
在りを蝕む

和宇之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
在りを蝕む

【Nコード】
N2015M

【作者名】
和宇之

【あらすじ】
人が存在していたという現実を喰らう生き物と、その生き物を倒すことを生業にする一族、不幸にも生き物が見えてしまった人間達の、「存在する意味」という話。

喰われる男

死出の旅路、という言葉をも男はふと思い出していた。

まだ昼前のはずなのに採光の乏しい廊下は、あちらこちらにそれでも影を作っていて全体はまるでトンネルのように薄暗い。本来は薄い灰色をしたリノリウムの床の色は、男が視線を遠くへ投げれば投げるほど深く黒く沈んでいくようだった。彼の気持ちに合わせてますます暗くなっていくのだろう。今から自分は死ぬのだと、思うには十分な演出だ。

ついさっき、刑務官が自分の独房の前で足を止めた時、男はとうとう自分の番が来たのだと思った。鍵穴に鍵を差し込んで軋む音も重たげな鉄扉を開けた洪面の刑務官が、「出る」と短く言うのを聞いて、「お前は今日殺される事が決まりました」と言われているのに大差ないと分かった。両手に縄のついた手錠をかけられて通路に出ると、嗚咽交じりの悲鳴のような懇願のような分らない声があちらこちらから漏れ聞こえていて、それは背中の中からは段々小さくなっていった正面のほうは段々大きくなっていく。鉄扉を開けられて同じように「出る」と宣言されるのを心底恐れている連中の、途絶える事のない慟哭だった。

そうした人間達に比べれば俺はまだまだ神経が図太いほうなんだな、と、自分でも意外な気持ちで男は自らの心情を分析してみる。

まだ通路は続いていた。この先に死刑台があつて今から死ぬのだ、と男はまた、今度は冷静な自分に確認事項を問いかけるように思ってみるけれど、やはりさほどの恐怖も感じていなかった。むしろ心中にあるものをよくよく凝視してみれば、安堵感のような、すこしだけ暖かいなにかで、強いていうなら熱望とかといえそうなものだろう。

男は死にたかったのだ。死ぬ事を望んで、恋焦がれてさえいた。それはきつと、死刑囚と呼ばれる以前から。形ばかりは普通に、

生きていた頃からずっと。

「だったら自分で首を括って死んでしまえばよかったんだ」とは、きつと男に対して不特定多数の人間が抱いている感想に違いない。

先を歩いていた刑務官が立ち止まったので、男も足を止めた。

薄暗い通路の右側の壁に扉があった。独房の鉄扉とは違う、いかにも軽そうな扉には真ん中よりも上の部分に正方形の曇りガラスがはめ込まれていて、暗がりの中でその四角だけが白く発光しているみたいだった。

今まで歩いてきた通路が黄泉路というやつでこの扉を開ければ天国ですよ、なんてあるはずのないことを想像した男を尻目に刑務官は扉を開ける。扉の蝶番は軋みはしたけれどほんの小さく鳴っただけで、やはり囚人を閉じ込めていく鉄扉よりは軽々しい。

途端、光が溢れ出る。扉で押し止められていた光が音もなく崩れるように、降り注いでくる。

男は目を睨めた。両手で庇を作って光をやり過ごそうとしたけれど、手錠に邪魔されておもむろに顔をしかめるくらいしか出来なかった。

薄暗さに慣れていた目がようやく部屋の明かりに順応しだしてようやく、男は気づいた。

太陽光が差し込む窓を背にして座っている青年がひとり、いる。彼は穏やかな顔で死刑囚を見ていた。穏やかに厳かであることが義務だともいいただけな様相は、男の前に一週間に一度の割合でやってきていた神父にも似ている。

小難しく聖書を語り、人生の贖罪を促す神父をせせら笑う代わりに男は訊ねた。「でも、社会は俺を殺しても反省なんてしないんでしょう?」そういえば、その質問の答えを彼の口から聞いていないただその時の神父の強張った顔は目の前にいる囚人は救えないものだと言った、背を向けた表情だった。どんな質問にも聖書の一説を語れば答えになると思っている彼は何も言わずに部屋を出て、その次の日から別の神父がやってくるようになった。

刑務官が向き直り手錠の鍵穴に鍵を差し込むのを見て、男は珍しく素直に驚いた。

部屋は眩しいぐらいに明るいが、目が眩むだけで何もなかった。五畳ほどの床と、壁と、男の正面で光をめいっぱい取り込んでいる窓と、その手前で折りたたみ式のパイプ椅子に座っている青年がいるだけだ。

男は想像していた。

自分を見据え死刑を宣告する刑務官、仏壇の前で手を合わせる自分、聞こえている読経、登る死刑台、足元で軋む階段の音。想像に想像をめぐらせて、自分はどんな風に死ぬのだろうと思っていた。この部屋には想像していたすべてのシーンに無縁の、太陽の眩し過ぎる陽射しはあるが、思い巡らせていたすべてのものがない。

俺はこれからどうなるのだろう、と、ここに来て初めて不安めいた感情が芽生え始めている。

カチリ、と音がなる。手錠が外れて、両手が自由になった。前で束ねていた両手をだらりと身体の脇に垂らす。

外れた手錠を持った刑務官ははまだ椅子に座ったままの青年を一瞥し、そのまま視線をそらすようにして男を見た。それもすぐに終わって、彼は視線を目ごと隠すように帽子のつばを深く手前に引く。まるで別れの挨拶のようだった。死刑台に上る囚人を階下から見上げて目をそらすような、遠慮がちな仕草だった。

「上村正紀さん」と、青年が口を開いた。

刑が確定してからずっと言われ慣れ聞き慣れてきた番号ではなく、親につけられた名前と呼ばれる。その事が意外なほど新鮮で、また同じぐらいに突拍子もなくて男は小さく目を丸くして青年を凝視する。何事か、と思う。

青年は穏やかさを崩さないまま、男を見ていた。

男が分かる事といえば、青年がせいぜい二十歳を過ぎるか過ぎないかという年齢である事と、服装からして刑務官ではないという事ぐらいだ。彼が羽織る、モスグリーンのフードのついた膝上程度の

丈のジャンパーコートは温そうだったが、六月の湿気を大量に含んだ空気には不似合いな格好だろうと思った。灰色の建物と藍色の制服を着た刑務官たちと、灰色の作業服を着た囚人たち。モノトーンと重たい色しかないような場所で、青年のそれは中庭の木々の葉と同じですこしだけ違う世界のようなものにも見える。

事実、青年はどこか違う世界のものだったのだらう。

青年が浮かべる穏やかさは、この場所とは縁遠いものに感じられた。死刑囚と面会し彼らに死ぬ事と自らがしかした罪を語る神父や牧師たちでさえ青年のように波ひとつざわめかない静けさのような穏やかさを見せることはない。

ここには大概、同情と諦観と嫌悪が混ざりこんでくるので、死ぬ準備のために神を語る彼らも、どんな形であれ命を奪われる死刑囚たちへの同情と、国が殺さなければならぬ事をしたのだからという諦観と嫌悪を抱いている。「死によってしか購えない事もある」と彼らはいう。「死ねば許される」とか安直な言葉もあるのに、わざと難しく言って、本当は意味なんてない死を彼らは誤魔化そうとしている。

青年はそんな、聖職者たちが諭す言葉とは彼岸ほどの距離を隔てた場所に佇んでいるようだった。

「貴方は三十年前、両親と仕事の事で口論となり二人を殺害し、その死体を家の庭先に埋めましたね」と、青年が言った。

しばらくの沈黙の後でまるで自分が頷くのを待つような間に、男は気づく。気づいてからそれでも、長い沈黙を置いてから頷いた。

「そうして、両親の失踪に疑問を抱いた二歳年上の兄と四歳年上の姉　ふたりが庭先の土を掘り返した跡に気づいたのを知って、死体が見つかる前にまたふたりを殺しましたね」

「それがどうした」不遜な言い方になったが、まさしくそんな気持ちだった。家族を全員殺した、だからどうした？　と問い返す。

日本の死刑制度じゃ、二人以上殺せば死刑になる可能性が出てくる。四人殺せば確実だ、しかも酌量される事情がまったくなかった。

両親を殺した時の事は、「頭に血が上って気がついたら血まみれで頭の片方が陥没している両親の死体が転がっていた」と当時の素直な心境を法廷で話したけれど、兄と姉を滅多刺しにした時の事は、「ふたりに地面を掘り返そうとするから見つかつたらまずいと思つて刺した。あれだけ滅多刺しにすればまず死ぬだろうと思つた」と正直に言わなかった。「両親が土の中から這い出てきて怖くなつて刺した。我に返つてみると、兄貴達だつた」言つた言葉はどちらかといえば舞台で役者がそらんじる台詞のようだつた。弁護士が作つた脚本に沿つて歌つて踊る、狂人の役だ。

「このままじゃ貴方は確実に死刑ですよ。もう精神鑑定に持ち込むしかありませんね」と、弁護士が言つた時は男は正直に不憫だつた。どんな最悪な奴でも命が助かるように刑が軽くなるように頑張らないといけないのが弁護士なら、こいつらは悪に加担して生きているんだなと同情もしてみた。

「貴方の行つた事には、情状酌量の余地がないと法務大臣が決裁しました」青年の声によどみはなかつた。けれど、罪人を目の前にしての露骨な青臭い断罪とは程遠い淡々とした声でもあつた。

鬼のような形相で法廷で詰め寄つてきた検察の顔を、男はこの時どういうわけか思い出していた。「助かるためならどんな嘘をついてもいいのか」「反省しないのか」「弁護士よりもこいつのほうが正しいな、と率直に感じたのも思い出す。友達になるなら検察のほうがいいかもしれない、彼の主張はまっとうだつた。

ことを淡々と進めるこの青年よりは、あのときの検察側の男の顔は好感が持てたのだ。

でも今更この堀の中で人の好き嫌いを言い出しても意味がないとも思つてみる。

「俺は死刑になるんだろう？」青年に訊ねた。傍らにいる刑務官に聞いても無駄だろうと思つたからだ。

青年はこくりと頷いた。「はい。その予定でした」

「、予定？」聞き返す。驚いたような声になっていた。無理も

ないと思う。「おい、俺は死ぬんだろう？」日本の裁判で死刑だと告げられた。いつ死刑になるかは分からなくても、いつか首を括ることは違いない。四人の人を殺して、その犠牲者全員が血の繋がった肉親で、そうしなければならぬような事情は何もなかった……、自分に下されて与えられる罰は死ぬ以外にないはずなのだ。少なくとも日本という国には終身刑がない、だったら一番重たい罰を与えられるしかないのだから。

なのに、どういう事だ？

「その予定でした」と、青年は同じ言葉を鸚鵡返しする。

「予定ってなんだよ」予定は、死ぬ予定だ。殺される予定。絞死刑になる予定。予定でした、でしたというのは過去形だ。予定でした、

『貴方は殺される予定でした』。

脈絡としては理に適った言葉の羅列が脳裏を過ぎったけれど、男は驚く事はおろか息を飲む事も動揺する事もなかった。本当は出来なかっただけで、突拍子もない言葉を吐いた青年を見据えるしかなかった。

これはなんだろう。両親も兄も姉も殺しておきながら反省のひとつもしなかった自分に対するオリジナリティ溢れる嫌がらせなのだろうか。それとも、本当に死刑になる予定がなくなったのだろうか。「死ぬ事でしか購えない事もある。しかし貴方の場合は死んだとしても罪は購えない」とでも言いたいのだろうか。

「貴方は」青年は独り言のように呟いてから、両手を前に差し出した。まるで傘を広げるような、そんな仕草をする。

刑務官が顔を伏せたのを、男は見逃した。気づいていたところでどうにかなったわけでもないだろうが、それでも男がこの一室で唯一自分を看取ってくれる人物の存在に気づけなかったのは哀れだったかもしれない。

青年は言う。裁判長が罪状を読み上げるような、抑揚の欠いた暗く落ち着いた声で宣言した。

「貴方は普通に死ぬ事が許されなくなっただけなんです」

不幸な接点

雨はいきなり降り出した。

精々が五階建てのデパートの屋上にさえひっかかってしまいそうなくらい低く垂れ下がった雲がべったりと濃淡なく空を埋め尽くしていて、嫌な天気だと窓越しに見上げた途端、まるでタイミングを探ってミサイルを発射するみたいに大粒の雨の軍団が窓ガラスを殴りだし、あつという間に雨模様となった。ただでさえ曇り空のせいで落ち込んでいるような通りの空気が、降り出した雨の湿気を吸い込んでぐつと不機嫌そうに下降する。雨は透明だと分かっているのにまるで雨粒と一緒に暗がりまで落としていつているようで、あたりは空気と一緒に急に暗くなり始めていた。

広めの店内は、そんな外の憂鬱さをなんとか追い出そうとしているみたいに煌々と照明がついていた。窓際に面したテーブル席と座敷席が十席と調理場が覗けるカウンター席に椅子が二十脚ほどある店内に客はまばらで、外の様子と平日の昼過ぎという時間帯もあつてかこみあっていない。店員も入ってきた客を進んで席に案内しようとは思わないようだった。「どうぞ好き勝手に座ってください」とばかりに、「いらっしやいませえ」と言うだけ言う。

「飯を食べてる時が一番生きている実感がある」と、テーブルを挟んで向かい側に座る男が言った。

店員が案内してくれなかったので、一番最初に目に入った入り口のレジ近くのテーブル席に腰を下ろした。お冷だけを運んできて店員はさっさと引き下がる。

お絞りはウェットティッシュみたいな感じで半透明の袋に入れられてテーブルの端に置かれていた、全国展開しているらしい中華料理のチェーン店は店の雰囲気から店員の制服やお絞りの置き方まで全部が全部本格派とは程遠く同じ界限に軒を連ねるファミレスと大差なかったが、値段も同じようにどっこいどっこいなので、気軽と

いえば気軽な店だ。メニューをざっと流し見て頼むものを決めると、店員を呼んで注文した。

「芳川^{よしかわ}さんはいつもそうですよね」店員が去ってから、陽葉^{よしかわ}は呟いた。呆れてもいるけれど一応は、感嘆交じりの感想だ。

「そういうお前は相変わらず食欲はないのか？」

腹が空いていないほうがおかしいと言いたげな口調だったので、陽葉は頭を振る。

「普通は出ないと思いますよ。……俺、さっき人を殺してきたんですから」声が低くなるのは口にした言葉の物騒さに臆したというよりも、その瞬間の事を思い出して声が喉に痞えてしまったからだだった。それを臆病だと芳川は揶揄を込めて言うけれど、これ自体は陽葉にはどうする事も出来ない。身体が起こすアレルギー反応みたいなものだ。

無意識に喉元に溜まっていた唾を飲み込む。

さっき、人をひとり、殺してきた。

その人物は死ぬ事がとつくの昔に決まっていた男だった。自分以外の家族全員を殺した殺人鬼は、罪を償うのに死しか用意されていない男だった。ただそれでも三十年間、自由はなくても塀の中で生き長らえて来たのは、人一人の命を国が奪う行為に対する気の遠くなるような手続きがあったからであり、同時に、男をただ死なすのかどうか法務省や神秘庁でも意見が分かれていたからだだった。

結局、男はすべてを奪われて死ぬ事になった。

普通に死ねば、男個人の命は終わっても彼の記録は残る。激情のままに両親を撲殺して庭に埋め、兄弟にばれそうになったらその兄弟まで殺し、顔の判別も出来ないほどに刃物で滅多刺しにした男。上村正紀の名前は戦後最悪の尊属殺しとして警察の記録に残っただろう。死後の彼は、本人の意思がどこにあったかは別としても、いろんな人間に名前を呼ばれる事になったはずだ。「また痛ましい事件が起こってしまいました。この事件は、昔に上村元死刑囚が起こした尊属殺しに似てますね」とか、「上村元死刑囚のようないきな

りキレて殺害に及ぶ事件は多発しています」とか。

決して善ではないだろうけれど、彼の名前は残る。生きていた事が知れる。

けれどそれを、陽葉は奪った。

「上が決定した事だろ」ひたすら素っ気無く芳川は言う。

罪の意識を感じるなら、死刑執行書じゃなくて削除執行書のほうに署名した法務大臣と神秘庁のお役人だろう。言いたい事を端折らずに言えばそんなところなのだろうが、彼の物言いは励ます事になると極端に短くなったりする。一見すると冷たく突き放すような、そんな口調だった。

「そうですけど、」

「首括る紐に罪があるかよ。お前のも、同じことだ。道具が悪いわけじゃない」顔をしかめて言う言葉の表面はいつも通り、優しさとは無縁のようだった。

陽葉は頂垂れるように小さく頷くと、テーブルに立てかけるようにして置いている傘に目をやった。傘は時代劇にでも出てきそうな番傘で、墨で塗りたくったように柄もすべて黒色だった。その外見もあるのだろうが、いまや外の道路の上で小さく波打ちながら降りしきっている土砂降りの雨の中ではあつという間に柄が壊れてしまいそんな華奢な感じがする。観賞用で実用にはまったく不向きであっても納得できる優美さだけがあって、使い勝手は俄然悪そうだった。

傘を見つめる目の瞼を落としてから、陽葉は芳川に向き直り瞼を上げる。

「それでも俺は、紐とは違って考えられるので」

「くよくよして、いじいじして」と、芳川はため息をついた。芝居がかかった仕草はさっきの素っ気無さとは正反対のところにある。呆れた気持ちを必要以上に晒して、陽葉を見遣る。目を意地悪げに細めたのはほとんどパフォーマンズみたいなものだった。「それでも忘れないだとか考えるのは辞めないだとか言うのは立派だけだな。」

そついうのは一回一回、殺した後に自分で立ち直れる奴が言える台詞だろうよ。陽葉」

「立ち直ってますよ」言ってから、あ、むきになってるな、と思った。

短く弾むようなリズムの芳川の笑い声は、分かりやすい否定だ。

「笠倉に帰ったら部屋に引きこもって出てこなくなるくせに？」

思わず、顔が赤くなった。大きなお世話だ、とか言い返せばいいのだろうけれど咄嗟に声が喉から出てこなかった。慄然とした気持ちでお冷を半分ほどぐいつと飲み干す。

ラーメンが運ばれてきた。ふたつとも平凡に醤油ラーメンで店員はテーブルに置くと、「ご注文した商品はすべてお揃いでしょうか？」と聞いてくる。無感情に近い、マニュアル通りの事を口にしていただけと言った感じの抑揚のない声音だった。端的に言えば無愛想の一言で、出てきた声と同じような表情をしてこつちを見ていた。客が客ならどんな接客対応をしているんだと怒り出すか不愉快になるところだろうが、ふたりとも彼の態度の悪さに眉毛を吊り上げる事はない。芳川は店員の声を聞いているのかどうかも怪しい素振りで割り箸を割って早速ラーメンに箸をつけている。

「全部来てますから、」食欲を誘うねぎの匂いを嗅ぎながら、陽葉は店員を見上げた。と、そこで目を細める。

店員は若い男だった。青年と言ったほうが差し支えはないかもしれない。陽葉と同年代か、それよりも下か。短く刈り上げられた髪は真正銘の真っ黒で、不自然であり得ないぐらい濃い色だった。店の明るい蛍光灯の照明を浴びても毛先まで黒光りして、薄い色になる事がない。髪の毛を黒く染め直したらこんな感じになるだろうか。男の感情の少ない目は律儀に陽葉を見たけれど、すぐさま小さくそれた。そうしてからなぜか、顔をしかめる。顔をしかめたと、見ている陽葉がかろうじて分かる程度の小さな表情の変化だった。

それもあつという間だ。気づいて、見て、訝しむ時にはもう消えている。沈んでいくように顔の表面から落ちていったようで、最後

にはほぼ無表情といっても差し支えのない顔で男は頭をさげた。「ごゆつくりどうぞ」やはりマニュアル以上の気持ちは全然こもっていない。

店員が立ち去るのを見送って、どうして顔をしかめたのだろうかと首を傾げたが、「さつさと食わないと麺がのびるぞ」と麺をすすする間に芳川が言うので、しばらくは黙ってラーメンを食べた。

テレビの特番とかでよく見るラーメンの激戦区で行列が出来る店の味とまでは当然いかなだろうが、全国チェーン店らしい可もなく不可もない味だった。グルメでもないラーメンをおいしく食べただけの客には値段も量も味もちょうどいいだろう。「うまいな、このラーメン」の賞賛の一言は全然出ないがそれでも箸は止まらずに黙々と口に麺を運ぶ。

芳川が口を開いたのは、麺を食べきったどんぶりを両手で持ってスープを一口飲んだ後だった。

「そりや俺達にだって、背負うものはあるだろうさ」いつになく真剣な声だった。ラーメンをすすっている間ずっと言おうとも思っていたのか、言葉は一気に口早に出てくる。「でも背負うことなんというのは精々、寺で供養してもらえるように取り計らうとかそういう事だろう。上村正紀は自分の命で償わなければいけないほどの事をやっちゃったんだ。だから死刑になった、日本の裁判で決まった事だ。でも、奪われるのが命だけでは足りない、法務大臣達が決定したんだ。あいつには子供もいなかったからな、あいつが人生を奪われても誰も困らなかつたから。お前はただ、それに従っただけだろうが」吐き出すように、吐ききるように。芳川は言い切る。優しく慰められないのはもう意地だからかもしれない。優しくしてはいけない、と頑なに信条にするように。

言い終わった後で、芳川はため息をついた。脱力するように肩を落とす。

「お前は本当に、笠倉の跡を継がないほうがよかったんじゃないのか？」

きつと言われるな、と予感があつたから返す言葉も決まっていた。「今更言つても手遅れでしょう？　それは」分かっているだろうにわざと口にするその言葉は、思いが一番強かつた頃に出し渋っていた激情の名残みだいだった。ようするに出るタイミングをなくしたような言葉だ。

さつきと同じ店員がコップに水を注ぎに来る。今度はさつきと立ち去った。

コップの縁よりすこし下まで注がれた水も店員にも目をやらず、ふたりはしばらく睨み合うように視線をぶつけ合ってから、どちらともなく目をそらしてため息をついた。芳川が立ち上がる。

帰るぞ、とでも、先に出てるからな、とでも言おうとしたのだろうが、芳川は口を開きかけたところで陽葉の傍らに視線をやって怪訝そうな顔をした。気づいて、「……どうかしましたか？」と陽葉が言い終わる前に、「おい陽葉。お前、傘はどうした？」と聞いている。

問いかけに陽葉も怪訝そうな顔をするしかない。

「傘って」 テーブルのところに立てかけてあるでしょう、と言って目をそこにやった。

ついさつき見たばかりの、黒一色の時代遅れの傘は消えるはずも隠れるはずもなくテーブルの縁に持ち手の部分をもたれかけて置かれている。　　はずだった。

「え？」

目を丸くする。傘がなくなっていた。

ある犠牲者？

傘を盗んだのには理由があった。雨が降っていたからだ。

といつても、雨が降っていて僕が傘を忘れていたから、ではなかった。

雨はいきなり降ったけれど天気予報では降水確率が五十パーセントだったので家を出るときに傘ぐらい持ってきていた。盗んだ理由をちゃんと正確に説明すれば、雨が降っているのに傘を店内に持って入ったから、だ。

あの客はビニールにも傘を入れてなかった。「雨の日は濡れた傘はビニールに入れて店内にお入りください」ってちゃんと入り口の自動ドアのところに貼ってあるのに、護らない人は意外と多い。それは人が願ったり気にしてほしいとひそかに期待しているマナーや思いやりを、わざと踏みにじってやったら楽しいだろうな、と浮かれている人があまりに世間には多すぎることの証明みたいだった。濡れっぱなしの傘の先から雨水が床に落ちて、水溜りを作っていくのをほくそえんでいる。新しく入ってきた客がその水溜りを踏んで靴を濡らして、近くの店員をとっ捕まえて永遠と小言を言うのを眺めて楽しんでいる。この世界は悪意こそすべてなんだ、とため息をつきたくなった。

傘を盗んだのはようするに、そんな連中の悪意をすこしは返してやろう思ったからだ。人が善意で頼んでいる事を無視し続けるとお前たちだってこんな目に合うんだからな、と言ってやりたかった。

空にむかって広げている自前のビニール傘を叩く雨は、一時の降り出した頃の土砂降りと比べれば大人しくしとと降っていた。最初の頃が人目はばからない号泣みたいな雨で、いまのは未練がましくむせび泣くような雨だ。ぽつぽつと降るから傘をさそうとは思えうけれど止みそうで止まない雨だった。きつと傘を盗まれたあの二人組みは困っているだろうな、と、中途半端な雨にいらいらしだす

のを我慢して笑ってみる。

笑って、店から十分ぐらい歩いてからようやくむくりと湧き出してきた罪悪感とか嫌悪感をどうにか見ないようにしていた。

でも、あの店はもう辞めるしかないだろうな、と漠然と思うのは、罪悪感と嫌悪感があるからで、腹が立ったからってこんな事をしなければよかったな、と認めたくはないけれど多少なりとも後悔しているのも、根元は罪悪感と嫌悪感のせいだった。こんな地方都市とかろっじて言えるような中途半端に田舎でもないような町じゃ、高校を中退した未成年が働ける場所なんてたかが知れているし、フリーターでへいこらへいこら働いてもろくに給料ももらえない時だってある。あの店は人使いは荒かったけど時給はしっかりしているほうだった、なのにあそこで人の物を盗むなんてしたのは本当に、何も考えてなかったとしか言いようがない。

呆れとか馬鹿馬鹿しさとか、いろんなものがぐちゃぐちゃになっているため息について、盗んだ傘を見る。

こいつが高く売れたらいいのに、なんて、強盗の端くれみたいな事を考えた。

傘自体は、いまだき珍しい、というか、時代劇でしか見たことのないような感じの傘だった。妖怪で出てくる一本足の傘のお化けみたいで、一番目に付くのは傘が真っ黒だということだ。傘のお化けも時代劇で出てくる傘も赤色の紙を張り合わせているのが多いのに、この傘は真っ黒としか表現のしようがなかった。持ち手も黒く、きつと内側の骨組み全部が黒く塗られているのだらうと思う。

全体的に華奢で、こんな傘で雨風が本当にしのげるんだらうかと疑わしい気持ちになった。

横断歩道の傍まできたところで運悪く信号機が赤に変わった。ついてない、と舌打ちする。反対車線の車が流れ出す。道路のあちこちに出来ている水溜りにタイヤを突っ込んで好き勝手に水を撒き散らしていくので、とばっちりをこつむらないようにすこし車道から離れた。

傘を広げた。まだ雨は止んでいないので、さしているビニール傘を左の肩と耳の手前で挟むようにして、ちよつと首を傾げているみたいな格好で盗んだ傘の持ち手を持って広げてみる。

内側も思っていた通り、外側と大して変わらなかった。拍子抜けするぐらい真つ黒だ。どこの百円ショップでもコンビにでも売ってそんな味気ない傘だったらビニール傘と大差ないじゃないかと思った。絶対に百円で買えるようなものには見えないから余計、そう感じる。もしかしたらこういう色一色のわびさびみたいなものが、風情とか粹とか、よく分からない分野であるのかもしれないが、僕にはとりあえず縁のない世界みたいだった。傘なんて雨をしのげれば十分、と思う僕には、やたら派手で、悪趣味なぐらい金のかかつていそうな傘を持ちたがる人間の気持ちは分かるのだけど、そういう金目のものからくる見栄とかとは違う風流といえるものの価値には、どうしても考えが及ばない。

覗きこむように骨組みを眺める。

普通の傘と違ってきつと、竹の骨組みと和紙で作られているらしいこの傘はもしかすると随分な値打ちがするんじゃないだろうか。と、思った。どちらかといえば実用というよりも観賞用みたいだと思ふけれど、装飾の一切がないのは不思議だ。

盗んだこの傘をどうしようか、と、思う。

高く売れたらいいのに、とは思ったけれど、実際値打ち物だったらおいそれと売れない気がした。この傘は盗んだものなんだ、と、今更のように思い知る。

近くのコンビニにでも寄って、傘立てに放り込んでこようか。家にもって帰ってもどこに隠そう。親はきつと、息子が変な傘を持って帰ってきてても驚かないし不審にも思わないだろうけど、それでも家に自分のしたことの証拠を持って帰るのは多少抵抗感があった。

歩行者用信号機が青色に変わった。待っていた人たちが横断歩道を渡りだす。

歩き出す前に広げたままの盗んだ傘を畳もうと、内部の骨組みに触った時だった。

音がした。タイヤが水溜りの水しぶきを盛大に上げる、そんな音だった。

傘から眼を上げる。車が見えた。メーカーまでは分からない白い普通乗用車が、反対車線から横断歩道へと走ってきていた。もちろん信号は赤色だが、白い乗用車はまるで速度を落としていない。直線に猛進に、死に物狂いで走ってくる。まるで肉食動物に追いかけられる草食動物みたいな、脇目もふらない疾走だった。

横断歩道の真ん中には音のほうに目をやっている女子高校生がいた、啞然、と目を丸くしている。

迫ってくる乗用車を立ち尽くして見つめている様子は、自分を今まさに飲み込もうと襲い掛かってくる津波の高さを逃げ出せずに呆然と見上げているように見えた。

「危ない！」と、誰かが叫んでいた。

どう考えたって手遅れで、自分は彼女を助けようとした、と後で弁解するために叫んだような声だった。

彼女は動かなかった。動けなかったのか、横断歩道の 瞼を閉じればあつという間に近づいて自分を轢いて遠ざかっていってしまった。いそうな、乗用車を凝視していた。大きい目を、これでもかというほどに開いている。今にも目が落ちてきてしまいそうなくらい見開く、それが彼女が出来た唯一の事のようなだった。

助からない。轢かれる、と思った。思った瞬間に現実になってしまい。そんな事を僕は思って、短く息を吐いた。顔は背けないで、目も伏せなかった。

事故の瞬間をすべて見ようとするみたいに、僕も目を見開いていた。

途端、乗用車は激しく車体を揺すった。

今まで何の躊躇いも何もなくただ走り去るただけに直線に疾走していた乗用車がいきなり後輪を大きく振ったのだ。運転手がブレ

「キを踏んだのだと直感する、しかし今まで真っ直ぐに速度を乗せて走ってきた車は言うことを聞かない。犬が尻尾をばたつかせるみたいに左右に車体の尻を振り回す、そうしてぐるりと車自体が回転した。前輪も後輪も空回りしている。雨で濡れた路面に小さな水しぶきが出る。タイヤが白い煙を巻き上げる。乗用車はその速度が落ちているのかどうか分からないままぐるりと回転し続けて、停止する前に突っ込んできた。まるで止まるにはどこかにぶつからないと駄目だと察したみたいに、横っ腹を近くの白いガードレールに一度衝突するように擦りつけて、ボンネットからぶつかってきた。……、え？」僕のほうへ。

砲弾歩道の女子高生がこっちを見ていた。見開かれた目のまま、一秒前の僕みたいに一秒前の自分を見る。

「ぶつかるぞ！」と、誰かが叫んでいる。

助からないから叫んでいる。と、思う。

ぐしゃりと、潰れるような音がした。身体の内側が大きくひしゃがってしまったみたいに、歪んだ拍子に身体の中から音が鳴った。瞬間、身体が弾んだ。

身体が空気をいっぱい詰め込んだボールみたいに跳ね上がって、とんだ。

ボンネットにぶつかって身体が浮き上がった、僕の目はその一瞬、空だけを見ていた。仰ぎ見たわけでもないのに重たいだけのどんよりとした空が、視界いっぱいにあった。

すぐさまそれは建物に隠れて、建物は地面に変わろうとする。落ちる。水が跳ねるのが見えた。なのに身体は跳ねないと分かっていた、ボールみたいに高く高く跳ね上がったのは乗用車のボンネットに乗りあがった一瞬だけで、僕という人の身体は短い浮遊の後はあるにつけなく、重たいものに戻っている。

落ちる。

落ちて潰れる、と、思った。

僕の身体は潰れるしかない。もう最初に、乗用車のボンネットが

僕の腹部にぶつかって僕を弾き飛ばしたときに、僕はもう潰れていくのかもしれないけど。

落下していく、濡れた地面が近づいてくる。

見開いている目が全部見ていた、カメラのレンズみたいにずっとずつと映している。轢かれて飛ばされて、落ちて、死んでしまうまでを、映している。僕はそれを見ている、体験しているというよりも見ているみたいだった。

まだ全然、痛くなかったからだ。

空から建物へ、地面へ　地面が迫ってくる。

音が聞こえるんだろうか。きつととても痛いんだろう。

今、全然痛くないのが不思議だった。

だから、どうして、と思った。痛いと思わない頭で、考えた。

雨が地面に降っている。まばらながらも止まない雨の粒が、地面に落ちるたび小さく跳ねる。

僕ではなくて、轢かれるのはあの子じゃなかったのか。

横断歩道に立ち尽くしていたあの子高生。真っ直ぐに駆け抜けようとする乗用車をただ目を丸くして見つめていた、あの子。

地面に吸い込まれるみたいに落ちていく。本当はぶつかってぐちゃぐちゃになるために、落下する。きつと血が飛び散る、そうしたらあの子はきつと悲鳴をあげるんだろう。轢かれると思って目を丸くした時のまま、潰れた僕を見てきつと悲鳴をあげるんだろう。

でも、

でも本当は、轢かれるのはあの子のはずで。死ぬのも、あの子のはずで。悲鳴をあげるのはあの子じゃないはずで。まるで入れ替わってしまったみたいで。

どうして、と思う。どうしてこう、不公平なんだろうと思った。

頭から地面に落ちた。みたいだった。身体にはじめて、衝撃みたいなものが走ったからだ。鉄球で思いつき背中を殴られたみたいに、背骨が軋んで歪んで折れていく音が聞こえた。まるで漫画の中の擬音のように分かりやすい衝撃の音が頭を殴りつけた、頭蓋骨の

なかの脳を右へ左へぐらぐらと揺らす。身体が擦じれていた、背中から落ちたのに地面が目の方を隠している。擦じれているのは身体じゃなくて、頭のほう、首の部分だとすぐには気づかなかった。骨が折れていくような、枝を折っていくみたいな音の最後に聞こえたのが首の骨が折れた音だなんて全然気づかなかった。

ただ、骨が折れる音も耳をすませば自分の耳に聞こえるんだな、と僕は変なところで感心していたりした。

痛みはようやくやってきた。遅すぎる登場だった。音が知らない間に、「痛い」「痛い」とうめき声に変換されていて、頭いっぱい溢れ出して身体の中にも沁みこんで来るのだ。蟻が死んだ蝶の死骸に集っているなところを食いちぎっていくみたいに、「痛い」という言葉があつという間に僕の身体を引きちぎっていったのだろう。痛覚はあるのに身体は全然動かない、なんて状況になっていた。視界の端っこにひっかかるように見える右手は、傘を握っていた。自分の傘ではなくて盗んだ傘を握っているのがおかしかった。

思わず、笑おうとした口が空気を吸い込んだ途端、血をこぼした吐き気がこみ上げてくるぐらいの血の味が、口いっぱいに広がる。

人が近づいてくる。おそろおそろ、何か恐ろしいものでも見つけてしまったような顔をして、それでも惹きつけられていくみたいにのそのそと近づいてきていた。確かに交通事故で人が轢かれる瞬間なんて滅多に見れるものじゃないだろう。見下ろしてくる人の無数の目を僕は地面に隠れていないひとつの目で見上げて、まるで山の中で撃たれて死んでいく野生の動物みたいだなと思った。近づいてくる人達は僕が生きているかどうかを確かめようとしているんじゃない、死むのを見届けようとしているのだ。もし歯を食いしばって起き上がろうとしたなら、誰からともなく猟銃を突き出してくるのだろう。

見世物みたいな死に方だ。人が死ぬときは、こんな死に方もあるんですよ、と誰かに教えるための死に方みたいだった。

おそらくは、……あの子に。

どうしてこう、ひどいんだろうと思った。

彼女が近寄ってきた。人込みを掻き分けて僕の目の前に現れた。僕の片方だけの目は本当は轢かれるはずだった彼女の着ている制服を見て、口は「ああ」と短い声を出した。出そうとしただけで本当は全然声に出ていなかったのかもしれないけれど、吐息のようなものが出た感じはあった。喉がひゅるひゅると鳴っている、呼吸をしているのかただ漏れているのか分からないけれど、次第に息苦しくて上手に呼吸が出来なくなっているのは確かだった。

ゆっくりと手足が冷えていく。視界が暗くなって小さくなっていく。ゆっくりとゆっくりと身体が、僕が死ぬ準備をはじめている。

彼女がこっちを見ていた。目を見開いていた。驚いているような信じられないような、悲しんでいるような目をして、それでも僕から目をそらそうとはしなかった。それは他の人達と同じように息絶えるのを待っているようにも思えたけど、この子の場合だけ違うのを僕は知っていた。僕が乗用車に轢かれる一瞬、目が合った時に、彼女も気づいたはずだ。

立場が違うだろう？

僕を見下ろす有名進学校の制服を着た女の子の目には、ありありと恐怖が映っている。潰れてしまった僕が怖いのではなくて、偶然が少しでも足りなければ自分がこうなっていたんだと気づいているから、目を見開いて立ち尽くして膝を震わせて、死のうとしている僕を見ている。

僕は君の身代わりか？

手を伸ばせるなら彼女のスカートの裾を掴んで、聞きたかった。どうして僕が君の身代わりなんだ、と質問したかった。でも出来ないから、手のひらは盗んだ傘を握り締めていた。それさえちゃんと力を込めているのか分からなかったけれど。

全部が衝動じみている。思うよりも先に身体が動くはずのものだった。けれどそれを表に出すには、僕の身体はあまりに機能をなくしすぎていて、僕はいまやっと動かせるものばかりで彼女を見てい

た。本当は睨むと表現したほうが正しいような気持ちで、僕は彼女を見ている。

世界が黒く落ちていく。

小さく萎んで、色をなくして、落ちていく。

その中で最期まで、彼女の眼差しがある。

きつと、神様が選んだ。

神様が僕を選んだんだ、とどんな神様も信じてはいなくせに僕は最期の一呼吸を肺からなんとか押し出しながら思った。今、ここにあるのはそういう類の偶然のような必然のようなものだと思っていた。偶然を装ってもちゃんとした段取りで車に轢かれて死んでしまう。今ここで死んでもいいのは彼女じゃなくてお前なのだ、と、背中を押されてしまったみたいに命はもぎ取られてしまうので。僕が中退した学校の制服を着ている彼女は、まるですべてにおいて僕よりも優れているみたいだった。だから僕がこうなっているのだと思えて仕方なかった。

お前はいらないよ、と言われていたようだった。

ふざけるな、死ぬのは君じゃなかったのか。

心に沸いたのは、呪いみたいなもの、

どうして僕が死ぬんだ、死にたくない、思うまま僕は底なしの暗闇に落ちきってしまう前に、

歩行者用信号が点滅をはじめていた。

水溜りにまではならないけれど濡れた路面に信号の緑色が薄く落ちて色づいている。

点滅を繰り返して、しばらくして赤色になった。緑色に成り代わったそれは路面を濡らす雨ごと赤く染まって、まるでそこに人ひとり血だらけで倒れているような錯覚を起こしかける。交通事故を珍しがる人達の目がそこに注がれているように、僕はすこし離れた場所から人盛りを見つめるように道路に滲んだ赤色を眺めている。

クラクションが鳴った。

けたたましく高らかと、人の注意と反感を引いて鳴り響いた。音はとても近い場所でもなりたてている。すぐ傍にいる天敵を排除しようと躍起になるしつけのなっていない犬みたいに吠え立てる。ああうるさいな、と思った。人が死ぬ時ぐらいもう少し静かに出来ないうるかとかとクラクションが鳴り響くほうを見る。

反対車線の道路の信号は青に変わっていた。右手から来る車は停止線をすこし越えたところで止まって動こうとしない。左手のほうは滑らかに流れているのに何かに痞えているみたいにぴくりとも動いていなかった、どんどん後ろに車が並んで長い長い数珠繋ぎになつていく。先頭の青い乗用車に乗っている男がいかつい顔をこれでもかと歪めてハンドルの中央に手を、というよりも拳を叩きつけている。さっきのクラクションよりも短く切り取られた、その分だけ殺気立っているクラクションが鳴った。動物が威嚇し続けた天敵を追ひ払おうとする、鋭い一声みたいな感じた。

男がこっちを見た。睨んでくる。

お、とその凄んだ目の今にも車から降りて胸倉を掴んできそうな勢いにたじろぐ間に、男は車から降りてはこなかった代わりに窓をすると開けて頭から外に乗り出してくる。右肩まですっぽりと窓から出して、初対面の人間でも不機嫌と分かるような単純明快なしかめっ面で口を開いた。

「轢かれないか坊主！」「すいませんッ！」

ほとんど反射的に謝って我に返った。あ、僕の声だ。と思った。

横断歩道の向こう側まで僕がたどり着くのを待つわけもなく、車は僕が車道の間から出て行くすぐにアクセルをふかした。走り去っていく。水をせき止めていた岩が転がっていった拍子に流れが濁流になって下へ押し寄せていくみたいに、瞬く間に乗用車が流れ出した。

反対側の歩道にたどり着いた僕は短い車間距離を保って整然と速い速度で流れていく車の数珠を見る、まるで何もなかったみたいに

走り去る車を呆然と見つめていた。

いや、呆然としている僕自身に、僕が驚いてる。

どうしたんだ。と、僕は僕に聞きながら自分の身体を見下ろした。交通事故なんてまったく起こっていない横断歩道の当たり前の光景から目をそらして、ボンネットに腹部を凹まされて地面に叩きつけられ背骨をへし折られて首の骨を折られた、ぐちゃぐちゃになったはずの僕の身体を見下ろしていた。見下ろすなんて事自体やってのけられる時点で、僕は首の骨を折っていないと分かるのに、確認せずにはられない。

そうしてじつと見つめてからようやく、怪我なんてしていないと納得できたけれど、それはそれで血どころか砂埃ひとつ見当たらないほづがとて不気味に感じられて、僕は小さな身震いした。

「ん、だよ。これ」呻いた声も震えてはいるけど、僕の声で、怖がつてはいるけれど何か痛みを堪えているような辛そうな感じじゃない。

僕は僕がこうして何事もなくここに立っているのが、理性とか表面的な部分じゃない深い場所で理解できないみたいだった。乗用車が僕を巻き添えにして突っ込んだはずの、横断歩道の向こう側にいる銀行の入り口から何事もなく老婦人が出てくるのも変だと感じていた。そういえば、と、僕をはねる前に乗用車が横っ腹を派手に擦りつけたガードレールに目をやったけれど、目を丸くするしかない。一瞬、僕は轢かれる寸前であるガードレールが大きく凹むのを見たはずなのに、そこは年季が入って白い塗装が剥がれている以外は何んでもなくて、いつも通りだった。

全部が、いつも通り。

交通事故なんて早々起こらない、いつものバイト帰りだ。

馬鹿か、そんなわけない。

そんなことがあるはずない、と、僕は咄嗟に頭を振って、そうしているうちに目の前の道路のすこし先が騒々しくなっているのに気づいて顔を上げた。

ちょうど建物と曲がり角のせいでここから見るとは出来ないのだが、大小入り乱れた人の声の形をした喧騒がしとと降る雨の合間を縫うようにして僕のところまで届いてくる。その角あたりからまた乗用車が止まりはじめていて、僕のとくのようにまた長い数珠を作っていく。しばらくしていると僕の目の前の横断歩道のすぐ手前まで渋滞が出来上がった。

動くのが不思議で仕方ない両足を意識的にどうにか動かして、僕は歩き出した。その喧騒のほうへ近寄っていく。

羽虫に夜の街路灯や玄関先の明かりに群がる習性があるみたいに、人には喧騒に群がる習性があるのかもしれない。しかし、街路灯の周囲を飛び交う羽虫を払いのける人はいるけど、喧騒に群がる人間を追い払おうとする人は、警察官とか正義感にあふれた人はまだ来ていないようで、喧騒は曲がり角を囲むように小さな野次馬たちの人垣になっていた。

方々飛び交い、囁く、そんな声がやがて、いろんなものが混ざっている喧騒の中から形のあるものとして僕の耳に入り込んでくる。僕の目には人の背ばかりが壁みたいに広がっていて、そこでなにが起こったのかはまったく見えなかった。

「事故だつて」と、誰かが言った。人の声がこれでもかというぐらい混ざり合った判別不能なひとかたまりの喧騒の中で、その言葉だけぼんつとはじき出されたみたいに僕のところ転がってきたみたいだった。

僕は立ち止まっていた。本当は僕が、というよりはその「事故」という言葉が僕の足を立ち止まらせていた。

声があつちこつちから身勝手に無責任に聞こえてくる。

「車が突っ込んできたんでしょう？　こんな曲がり角でスピードも落とさずに、なに考えてるんだろ」

「でもあの人もあの人でしょ。車が来てるのに飛び出したように見えただけ？」

「帽子を取ろうとしたのよ。あの、ほらあそこにいる人が帽子をと

ばして……」

「隣にいた人があの人を庇って車にはねられたんですって。……大丈夫かしら」

「おい、誰か救急車！ 電話したか！」

「車を運転していた奴はもう駄目だろう。なんかもう運転席とかぐちやぐちやだしなあ……」

「なアツ、車から離れたほうがいいんじゃないか！ こういう時つてガソリンに引火したりするんじゃないか！」

人垣がにわかに波打つようにざわめいた。野次馬の無責任しかない喧騒がいつそう浮き足だつ。

「おいッ、怪我人動かすから手を貸してくれ！ 足だ、足を持ってくれ！」誰かが叫ぶ。

その声到人垣のうちの誰かが動いたのか、まるで一枚の壁みたいに登え立っていた人垣の一角が小さく崩れた。手前で立ち尽くしている僕の視界に、それはあまりに唐突に容赦なく飛び込んでくる。

「……あんなに血が出てたら助からないわね、きっと」近くの声は遠慮がちに潜めていたけど、人が死ぬことだけは遠慮せずに断言していた。その光景を見る僕の耳に、その言葉はまるで決定事項のように聞こえてきた。

曲がり角のちょうど角、車道にすこしだけ突き出す形で立っている電信柱に白い乗用車が衝突していた。

車はその原型を後部座席の部分しか留めていなかった。あとは、ボンネットが紙切れみたいに大きくめくれあがり、運転席と助手席は圧搾機に折り込まれたみたいに本来の三分の二程度の長さになっている。機械本来のくすんだ濃い灰色が白い表面の塗料の下から見えていて、この車は事故を起こしたのだと、一目見ただけで分かる有様に成り果てていた。

鼻につく臭いが周囲に漂っている。ガソリン独特の臭いの他に、嗅ぎなれない鉄錆臭いものがあつた。

僕は目を瞬くのも忘れてその乗用車を見ていた。目の前で廃車の

ようになっっているこの車は急ブレーキの果てに僕を轢き殺した、はずの乗用車だ。

僕を轢いたはずの車が、ここでぺしゃんこになっていた。

「おい、救急車まだかよ！」

「芳川さんッ！　　、芳川さん！」

「血イ止まんねエ！　しっかりしろ！　おい！」

割れた人垣の合間から、倒れている人間が見えた。男だ。営業マンなのか背広のような服を着た男が路地に仰向けに横たわっていた、黒い革靴の片方が脱げていて人垣のすこし手前のところに置き忘れられたみたいに転がっている。「芳川さん！」と誰かが呼びかけているけれど、その人はぴくりとも動かない。この人は死んだのかな、と漠然と僕は思った。路上に投げ出されている掌がまるで、戦争物の映画とかでよく見る息絶えてしまった人のそれにとってもよく似ていたからだ。

掌を上に向けて、ゆるく指先が曲がっていて、でも硬直したみたいに動かない。

その人の身体から流れていく血がゆっくりと、道路を侵食して、死にはじめた指先まで伝ってくる。

僕は踵を翻していた。目の前の惨劇に興味をなくした薄情な第三者みたいに、映画館のスクリーンから目をそらすみたいに、悲惨ではあるけどとりあえず僕の現実ではないものを追い出して、僕の現実へと戻ろうとしていた。黙々と働いて黙々と家に帰って寝る、変わり栄えのしない毎日を繰り返すために僕は家へと帰る道に戻ろうと歩き出していた。

喧騒が遠ざかる。人垣も遠ざかる。

僕が轢かれた、はずの横断歩道のところまで戻ってくると、車道はまだまだ長い渋滞を作っている最中ではあったけどそれ以外はいつもと全然変わらなかった。何事もなく、通り過ぎていく人達の歩調というのはこんな感じだっただろうかと不思議にさえ思ってしまう。すこし離れたところじゃ事故があって人が死ぬかもしれないの

に、僕の視界の中を行きかう人達とはにかく無関心にいなくなっていくんだから。

でも、そんなものだろう。

僕は呼吸をする。肺いっぱい空気を感じ込んで吐き出す、濡れたように湿っていた空気からはアスファルトしかないのに土ぼこりの匂いがした。

本当は逃げ出したのだと、心のどこかで分かっている。

事故の悲惨さにぞっとしたわけでも飽きたわけでもない、僕はただ逃げてきたのだ。あの事故現場から無関心だけを装って。

僕は本当はただ、怖かったのだ。

死んだような掌をしている男の顔を見たら、そいつが僕の顔をしているような気がして。

あそこにあるのは、デジャブのような気がしていたから。

病院

手術中のランプが赤々と点灯していた。はじめの数分はその赤い光の中で白抜きされた文字を眺めていたけれど、三十分もたつ頃には陽葉は頂垂れて壁にもたれかかっていた。自分でちゃんと立っているのか壁に縋り付いているのか分からない格好で、かろうじて情けなく床に座り込みかけるのを堪えている。

芳川は、死ぬかもしれない。

と、陽葉は彼が助かる事を祈るよりもまず絶望的に思ってしまった。雨に濡れた路上を雨粒と一緒に流れる血の、薄まる事も知らないような鮮やかさが脳裏に焼きついてしまっているからだ。毒々しいまでの赤色、赤と平凡にいうよりも紅とか真紅とか、そんな表現が似合いそうな血溜まりが広がっていくのを見た。

身体に出来た裂傷から滴ったというよりは、まるで肺や心臓から直接漏れ出ているような色だった。

芳川は死ぬかもしれないのに、なにが起こったのかはいまだにはつきりと分からなかった。

車にはねられそうになったところを芳川に突き飛ばされ、代わりに彼が轢かれて重体になった。簡潔な事実はそのところだが、陽葉には腑に落ちない点がいくつかある。事情を聞きにきた警察にはいえない、現場検証をして手に入る物的証拠からも結論を得られない疑問に陽葉と共に首を傾げてくれる人は、いまは手術室の中で戦っている。だから自分で考えなければいけないと自身を鼓舞しようとするのだけれど、頭を動かそうとした途端、思い出すのは突き飛ばされて無防備にアスファルトに背中と肘を打ちつけた時の感触であり、そこから起き上がった時に見た光景だった。

両手で顔を覆う。

駄目だと思いながらも、打ちひしがる自分を冷静には保てないままにいる。

落ち着けと心の中で念じるたびに、まだ消えていない庇われた打撲の痛みが神経を逆撫でいくみたいだった。なのに痛みにも身を任せ、思っまま、悲しく遣る瀬無く居た堪れない気持ちのまま、泣き崩れてしまおうとしてもどうしてか涙は溢れてこないのだ。芳川が、自分にとって師ともいふべき人が死んでしまいかもしれないのに、模範的な生徒として感情を律することも、ただただ体裁もなく取り乱すことも出来ないでいる。

完璧に冷静になる事も、衝動のまま泣き喚く事も。 どちらも中途半端に出来ないまま、無様にも立ち尽くしているしかない陽葉は、しばらくしてからようやく近づいてくる足音に気づいて、手を離して顔を上げた。

病院の廊下を甲高く叩きながら歩いてくるのは、真っ白なスニーカーを履いたセーラー服の少女だった。

ヒールがついているわけもなく、平べったい靴底なのに歩くたびに聞いている人間を威嚇するような音を鳴らしているのは、ようするにいま彼女が少なからず怒っている証拠だろう。平常心を装った人形みたいな無表情も荒々しく床を踏みつける足音が伴うと、年不相応の威厳とか威圧みたいなものが伝わってきて、陽葉はなんとも居た堪れなくなる。

知っている少女だった。

「……華子、^{はなこ}どうしてここに？」

訊ねてからすぐ、こんな質問してるんじゃないまた馬鹿にされるな、と思う。

案の定、華子は思い切り、これ以上露骨な態度はないだろうというぐらい顔をしかめて鬼の形相を作ると、陽葉のすぐ傍で立ち止まってからぐいっと身体を彼のほうへと乗り出してきた。その分だけ陽葉は後ろへ身をそらす。

「事故にあったって、聞きましたけど」言いながら、間近な目で陽葉を観察する。

芳川の家で電話を入れたのに巡り巡ってどういふわけか、弓坂に

も連絡がついてしまったらしかった。

「事故にあつたのは芳川さんだ。俺は単なる打撲」後退ってからすこし間を作つて、陽葉はコートの右袖をめくり上げた。肘より下のあたりに大判のガーゼがテープで貼られている。似たようなものが背中にもある。彼女の視線が肘に注がれるのを見てから、袖を元に戻した。顔を上げた華子に、「芳川さんはいま手術中だ。長い手術になりそうだけど」

「助かりますの？」遠慮する事もなく率直に聞いてくる。

「助かるに決まつてるだろう」言いながら顔を歪める。

「貴方の顔は、そんな感じには見えませんけど」

何を言ってるんだ、こいつは。

睨み付ける眼差しに、いたつて華子は冷静に応じた。それはいつもの変わらない華子だった。身内が事故にあつて生死の境をさまざま程度の事じや慌てふためく事もしないのは、まるで近づいてきた時の足音みたいな性格だからだろうが、客観的過ぎる意見は場所を選ばず辛辣すぎてたまに陽葉はついていけない。今みたいに、死ぬかもしれないと思つていても気休めで否定してほしい時には、華子の言葉は鋭利過ぎて痛いだけの暴言だ。

「芳川さんが死ぬわけがない」自分の本音を相手にするみたいに、陽葉の願望はすこし心許なくなつていた。

誰かに、しいていうなら神様に乞うような弱音を吐くと華子に据えられていた陽葉の眼差しの強さも同じように翳つた。華子はじつとそんな陽葉を眺めて、「信じたいのに信じきれないというのも辛いものですな」と、またひどい事を口にする。手術室のランプを見上げて、「あの人が普通に死んでしまうなんて、私には想像もできませんでした。まあ、それは貴方であつても私であつても同じ事ですけれど、病院の手術室で死ぬような事があるなんて。世の中、なにが起こるかなんて分からないものなのですね」

その言葉は、まるでもう芳川が死んでしまったような言い方だった。けれどそれにしては死者を悼む気持ちとはまったく無縁のよう

で、芳川が生きていても死んでいても心底薄情なのは変わらない物言いでもある。ただ陽葉は、華子が不謹慎にも驚いている、と感じた。芳川が曲がりなりにも普通に死んでいこうとしていることにだ。事故にあつて、病院の手術室の中で心肺を停止させる。そうして、芳川の死は訪れる。

「普通に死ねば、葬式をあげるのでしょうか？」と、華子が訊ねてくる。

「華子、ここは一応病院だから」葬式とか言うな、とたしなめると、華子は不可思議そうな顔をして陽葉を見遣った。しばらく、まるで陽葉の顔の上に答えが書いてあるかのように凝視してから、「ええ、そうですね」と独り言めいた声を小さく呟いて頷いた。

「普通ならここで、亡くなるのですものね」まだちゃんと分かっていない。

陽葉は頭を抱えなくなつた。「……だから、」

「分かつていますわ、陽」こともなげに華子は言つた。陽葉の言葉を奪つて、「忘れられない死に方ですもの」と付け加える。口調は穏やかと言えば穏やかに、けれど空っぽに近い表情からは穏やかさから感じる優しげな雰囲気はないまま、彼女はもう一度頷いた。きちんと理解したと言いたげな所作だつたけれど、いちいち不安が残るのも確かだ。

本当は、分かつてはいるのだろう。分かつているからこそ華子は、人が普通に死んでいく事になん感慨も持てないのだろう。普通だつたら、と口にするのは普通じゃない状況を知っているからで、単純明快に自分が普通ではない事も知っているからだ。普通に死んでしまう事を悲しい事だとは思わない世界を、華子はとつきの以前から知っている。

それは陽葉も同じのはずだったが、華子よりその世界に入った年齢が遅かつただけの話だ。自分で選んで決めた、とも言える。

やっぱり歪だなと思ひながら、陽葉は華子以外誰も来ない廊下を見る。

「……芳川の人達はどうして来ないんだ？」

「来なくてはいけませんか？」華子は首を傾げた。来る理由なんてあるのか、と言いたそうな口調だ。

きつと、芳川の間人達も根元は華子と同じなのだろう、と思った。交通事故で病院に運ばれて死ぬ、その事にどうして慌てふためいて病院に駆けつけなくてはいけないのか、分からないのだろう。弁解してみた言方をするなら、その必要がない、と彼らは思っているはずだ。普通に交通事故で死んでしまうなら、死に顔を見る機会なんて死んだ後でもたくさんある。棺桶に入った本人でも、気休めに撮った写真でも。

生きているうちに会いたい、という気持ちが希薄なのかもしれない。

「……、どうして華子は来たんだ？」だからふと沸いた疑問を、陽葉は口にする。

思えば、事故で死ぬ事をほとんど悲觀的に考えていない彼女が怒りながらここまで来る理由が見つからなかったからだ。

華子は小さく息をついた。今更なに言い出すんだ、と呆れているようにも、そんなことが気になっているのかと馬鹿にしているようにも見えて、その実どっちでもないようなため息だった。多分陽葉の理解の範疇にはなさそうなため息の理由だ。

「事故だと聞いて、心配になったからです」ため息をついた表情のまま、華子は呟く。

「なにを？」と、問い返す。普通なら怪我してないか、とかになるのだろうけど、それと違うのは分かっているのだ。

華子はそつと目を細めた。眩しいものを見るために目を眇めているような表情だったけれど、口から出てきた声はいつも通りの平べったさだ。「芳川が死んだら、貴方は事故を起こした人を食べてしまっうんじやないかって、思いましたから」

淡々と抑揚もなく、だから華子の言葉が悪態や皮肉じゃない事だけははっきりとしていたので、陽葉は一拍分の呼吸を忘れてしまう

だけで済んだ。そうか、そういう心配事もあつたかと盲点に気づかされた気分でもある。

「芳川は貴方にとって大事な人です」華子は言葉を続けた。陽葉が息を飲んで黙り込んだ間の意味も、彼女にはどうでもいいようだった。「だから心配になっただけです。大事な人だからもしも亡くなつてしまつたら、貴方は芳川を殺すきつかけになつたものを食べてしまふでしょうから。計画性がなくなつて衝動的にでも。在りを蝕むモノとして、それを操るものとして、貴方がその境界を踏み越えるかもしれない可能性を、私は見過ごすことは出来ません」

確かにそういうことなら、華子がここに来た理由も分かる。むしろ、ここに来るのは華子の義務だ。

ただ、やっぱり芳川の事は何一つ心配していない。という事が証明されてしまつて、物悲しいような馬鹿馬鹿しいような複雑な気持ちになつた。かぎりなく人間に近いロボットと会話をしている間に、こいつはやっぱり人間なんじゃないか、とか、ああやっぱりこいつはロボットだ、とかあれこれ考えるのに似ている。血が通っているようで通っていない、暖かいようで冷たい主張なのだ。華子の言う事は。

「俺は笠倉だぞ？」そんなわけがないだろう、と首を振る。複雑な心境はひとまず脇に退けておく事にした。

「だと、いいですけど」陽葉を信用しているしてない以前に、華子の言い方はそっけない。「間違いを犯すのが人間でしょう？いくら笠倉の後継者でも貴方は人間ですもの」

「人間っていうのは間違いを犯す前に、自分を律する事も出来るんだよ」

「見境をなくしてしまつたらおしまいだわ」

やはり、信用信頼、そんな言葉からは遠すぎる物騒な会話だった。だからといって、事務的に応えている様子さえないのだ。必要以上の労力を使わないでおこうと決め込んでいるわけではない、なにを考えているのか理解出来ないのは意思疎通がうまくはかれていな

いからなのだろうけど、華子の会話にはいつもそれ以外の決定的な欠陥があるように思えてならなかった。もしかすれば同じ日本語を喋っていても、発する単語の意味をお互い正確に理解してはいないんじゃないのか、と通じることを前提にした会話以前の問題に直面しているような気がする。　本当は自分が特異な人間なのだと、分かっていけるけれど。

陽葉がどんな形であれ、芳川が死んでしまう事が悲しい。何を悲しいと思うか、それだけでもふたりの価値観はあまりに違う。

「俺を信じられないなら別にそれでもいいよ」陽葉は言った。華子が人間性が錆付いてしまっているような目をこっちへ向けてきたので、「俺の代わりに手術が終わるまでここにいてくれる？　ちよつと用事があるんだけど」

「　芳川を放っておいてまでする用事？」

華子は怪訝そうな顔をした。自分の予感が当たってしまったんじゃないか、という顔だったので、久し振りに華子の感情らしいものを見たな、と陽葉は思う。

「芳川さんが事故った理由は多分、在蝕ありくいのせいだよ」

華子に話した理由の半分は、黙っていけば誤解されるかもしれない、からなのだが第三者に説明しながら自分の中できちんと整理したい気持ちもあった。人間らしくここで芳川の手術が終わるのをひたすらじつと待っているのもよかったけれど、逆に言えば笠倉なのでここで勝手に打ちひしがれて自分の役目を放棄する事は出来ない。それも言い訳のひとつで本当は、この事故をどうにかできるかもしれないとも思っていた。

在蝕なら。

告げた陽葉の顔を華子は凝視する。真意を問いただすような数秒の眼差しの後で、「一体どういうことですか？」

「事故はもう少し先の道路で起こっていた、ってことだよ」と、陽葉は応える。「芳川さんが犠牲にならない事故がもうひとつ、あったってことだ」

過去は変わる

店を出て曲がり角に差し掛かったときに、道路の先で事故が起ったのだと知った。車が突っ込んできて人が轢かれている、と人盛りが出来ているほうから歩いてきた誰かが言っていた。顔見知りでもない他人に開口一番そんなことを言う彼の顔はこれでもかというぐらい真っ赤で、ぐでんぐでんに酔っ払っているみたいに呂律が廻っていないかった。彼はきつと大きな事故をこの目で見たことに興奮していたのだろう、場の空気に酔っていた。本来なら悲痛に顔をゆがめて小声で、人目をうかがうようにいうべきことなのだろうに男は我を忘れていた。きつと口走る言葉と同じ勢いで事故現場に傘を置き忘れてきたのだろう、男の頭は雨のせいでぺしゃりとなっている。

男がまた初対面の人間に言いに行くのを眺めながら芳川が、「事故なんて嫌だな。あんまりいい死に方じゃない」と言って顔をしかめる。

「死に方に、いい悪いなんてあるんですか？」死ぬ事なんて全部一緒だ、と思っていた。

「楽に死ぬるのがいい死に方だな」と、芳川は真顔で頷く。「逆に苦しみぬいて死ぬのは悪い死に方だ。ようするに痛いか痛くないかな。歯医者さんの腕の良し悪しみたいなもんだろう」

「歯医者さんの中には、無痛治療だとか言って歯を削らないで被せるところとかもあるみたいですけど」

「そういうのは結局後から痛くなるだろう？ だから悪いほうだよ、いい事だと思っても後から悪くなっていくこともあるだろう。と、語る芳川はどこか哲学じみている。彼は目を細めて喧騒のするほうへ顔ごと向けた。「まあ、生き死にほど人間に決められないものはない。自殺っていう手もあるが、自分で手を下すっていうのはやっぱりどうやっても痛いだろうしな」

「芳川さんは痛いのは嫌いなんですね」

「人間、痛い事を愛する奴なんて滅多にいないだろう。普通は、マゾじゃあるまいし」

「芳川さんは老衰でぽっくり逝くぐらいしか望みの死にはありませんね」

「とりあえずは不甲斐ない弟子がきちんと一人前になるまでは死ねないな」娘が結婚するまでは死ねないな、みたいなニュアンスである。もしくは赤ん坊を見て年老いた父親が、この子が成人するまでは生きないといけないな、と自分を元氣付けるようなものにも似ていた。他人を理由にして自分の寿命が長くなるように祈るような、持論の割りに人間は意外とさっくり死んでしまうものだと思ってるような言い方だった。

何か身体に不安でもあるのだろうか、とつい陽葉は勘ぐってしまった。

芳川はまだ世間一般的には働き盛りと言われる年代だ。でもその年代は最近では鬱病を発症して自殺しやすいとも言われているらしい、と新聞のコラムで読んだ事があった。自分勝手に振舞える年頃ではなくなつて責任が出てきて、けれどまだ完璧にその責任を背負えるほどでもなく子供じみた感覚も抜け切らない、らしい。社会に求めるものと捧げるものが、社会から求められ与えられるものとあまりに違う事に失望して絶望する。ギャップを埋められずに死んでしまう。それはあまりに過度なものを人間一人一人に求めすぎている社会の問題だ、とコラムは続いていたけれど、陽葉にはどこまでが正しいのかは分からなかった。

ただ見上げた彼の顔は、いつもと同じだった。

当たり障りがなく飄々としていて、食えない大人の顔をしている。だから余計、唐突に死についてなんて論議されると何かあったのだろうかと心配になるのだろう。何かが起こってから、「あの時の話の意味はこんなことだったのか」と気づかされたくないから、いま考えてしまうのだ。

「どうしたよ、陽葉」視線に気づいて芳川が言う。その顔から目をそらして陽葉は、「なんでもありませんよ」と答える。「傘なくしたのに随分余裕だな俺達、って思ってただけです」と言い直した。言い切り返しとしてはおかしくない、とすこし満足する。

道路のほうへ投げ出した視界にちょうど自分のすぐ傍を過ぎる人が入って抜けていく。道幅がそんなにもない歩道では、ふたりが並んで傘をさして歩いているとほとんど道を遮るような形になっていて、男は自分がさしているビニール傘を傾けて肩を小さくして陽葉の脇を抜けた。それでも軽く肩がぶつかったので彼は「すいません」と頭を下げて遠ざかっていく。狭い歩道の中じやよくあることだ。

よくあることなのに陽葉は立ち止まって振り返っていた。遠ざかる男の背を見る。

「なくしたものは慌てたってどうにもならないだろ」と、芳川。「落ち着いて探せば見つかるもんだ、あの傘は、そこらへんの傘とは違うんだからな。盗まれたにしたって、あいつのちゃんとした使い方を知っている奴は笠倉と芳川にしかないだろう」

「芳川さん」変哲もない男の背中を見据えたまま、陽葉は芳川の声を遮った。芳川が立ち止まって振り返る気配が背後でした。「さっきの人、見覚えありませんか？」

「誰が見覚えななかった？」

「俺の隣を通り過ぎた……、いま、ちょうど煙草屋の近くの電信柱のあたりにいる人ですよ」言って陽葉は指をさした。

「なんだ、芸能人かなにかか？」怪訝そうに言う。つかの間、おそらくは陽葉が言った人物を陽葉ほどはない不思議な気持ちで眺めた後で、「ここからじゃ遠すぎて分からないだろう。だいたい後ろ姿なんだから顔も分からないしな」「言いかけて、芳川はつと言葉を切った。誰なのか分かるわけもない、と言おうとした言葉を考えごと飲み込んで、「おい。あいつって」

「それに」芳川の動揺に頷いて、陽葉は付け加えた。「うるさくもないでしょう？」

気づけば、道路の先で聞こえていた喧騒がぴたりと止んでいた。

察するところは陽葉も芳川も同じだった。指摘したのは陽葉だが芳川は瞬時に彼の言いたい事を解すると、複雑そうな顔をする。直感と理性がてんでばらばらの見解を出してどっちを選ぼうか迷っている、といった感じの頷く事も首を振ることも半端になった表情をして、「まさか。盗まれてすぐだぞ？ そんな早くあの傘を使いこなせるはずがない」と、言い切った。

「でも事故なんて」ふたり分の視線を背負っている平凡な男は、遠く離れた場所から深刻に見つめられていることに気づくはずもなく角を曲がって視界からいなくなった。人の不幸を興奮気味に話していた姿からは想像できない、貧相でありきたりな男だった。「そうそう、なかったことにはならないでしょう？」男の消えた角から目を芳川に映す。「傘にしても在蝕にしても、何かがあったのは確かです」

芳川は息を吐き出した。長く細く、肺に溜まっていた空気を抜き出してから、同じ分だけ吸い込んで、「とりあえず。事故を見に行くか？」と提案する。

強く風が吹きあがった。咄嗟に傘の柄を強く握らないとそのまま持っていかれてしまいそうな瞬間的な突風にコートと髪の毛が大きくはためく、「あ」と短い声が車道をはさんで向こう側から聞こえた。車輪のついたカートに両手でしがみつくように立っている八十は過ぎていそうな老婆がしわくちやの顔の中で啞然と目を丸くして宙を眺めていた、さっきの風でもっていかれたらしいつばがやたら広い帽子がくると円盤みたくまわりながらこっちまで飛んでくる。陽葉達が通り過ぎたちょうど曲がり角、車道に出張っている電信柱の近くに落ちた。

彼女が深刻そうな顔をして帽子を見つめているので、陽葉は引き返した。隣で芳川が、「お前は人がいいな」と呆れた顔をしてでも嬉しそうな口調で言う。

道路はまだ雨で濡れていたけれど、未練がましく細々と降ってい

た雨は霧雨のようになっていた。拾い上げた帽子はすこしだけ湿っていたけれど大丈夫そうだった。誰かが拾ってくれるとは思っていなかったらしく意外そうな顔をする老婆に、帽子を拾いましたよ、と手を振ってから陽葉は道路を渡ろうとした。車道には通り過ぎる車がさつきからほとんどなく、横断歩道も信号機もまだ先にあるのだが渡っても大丈夫だろうと思ったのだ。走る車がほとんどないのは、手前の交差点で事故があったからなのだと、この時陽葉はきちんと理解していなかった。

ひとつの事象が消えれば、それに関連する事象すべてが消える。事故がなくなったのだから、事故のせいで起こった事すべてが、なくなる。

それが在蝕というものと、知っていたはずなのに忘れていた。車道を二歩ぐらい歩いたところだっただろう。それは前触れもなく、いきなりで……、なにより遠慮がなかった。

厳密に言えばこの時、一台の乗用車が道路を疾走していた。白い乗用車は手前の信号機が赤になっているのも構わず獲物を捕捉した獣のようにむしろ速度をあげていた。曲がり角に到底入りきれない速度で突入してくる。

陽葉はこの時、思い切り突き飛ばされていた。芳川が力いっぱい自分の背を押したのだと、気づくにはすこしだけ時間がかかる。

力任せに押されて陽葉はたたらを踏み損なってから前のめりに倒れこんだ。肘を打ち付けて背中をぶつけた、勢いはほとんど殺しきれなかったので地面にそのまま衝突したようなものだ。ガツン、とアスファルトの地面に骨そのものをぶつけたみたいな痛みが最初、生理的な涙が出てくるくらい痛かった。それから遅れて痺れてくるぶつけた背中をまるめてうつぶせになってようやく陽葉が両手をついて起き上がった時には、周りには人垣が出来上がっていて口々に何かを言っていた。口を広げて動かしているのが見えた。

その言っている何かは、ほとんど聞こえない。

鼓膜が破れたわけではなく、今の陽葉には聞こえない。それだけ

の事だった。

地面から顔を上げると、まず、見事に大破した乗用車があった。陽葉が老婆の帽子を拾ったすぐ傍にあった電信柱に乗用車は激突していた。電信柱の下部分が心なしか多少曲がってしまっているような気がする、車自体はまるで大きな手でぺしゃんこにでもされたみたいにボンネットと運転席と助手席がなくなっていた。かろうじて原型をとどめている後部座席も、窓ガラスがすべて割れてしまっていて今にも扉が取れてしまいそうに歪んでいた。どれだけの速度で電信柱にぶつかったのか、車の有り様を見れば一目瞭然だ。白昼堂々自殺でもしたかったらしい。

きつと運転手は助からない。即死だ。

けれど、陽葉が見つめているのは、その車ではなく。

車の傍ら、潰れた乗用車の窓ガラスやライトの破片が飛び散り撒き散らされている道路に身体を投げ出している男がいた。彼の身体を中心にゆつくりとゆつくりと血が流れ出ている、雨で濡れて黒ずんだアスファルトに次第に滲み出るような薄い赤色が広がっていく。「芳川、さん？」

たった一言、無造作に、としか言えない。

遊びに飽きた子供が人形を投げ出してしまったような感じ、といえはいいのだろうか。

人の形をしているけれど、もう、人ではないようなもの。まるで等身大の人形になってしまったみたいに、文字通り捨てられてしまったみたい。

倒れてぴくりとも動かない彼の身体から漏れ出る血の色は、だんだん薄っぺらい水彩絵の具の赤から目に痛々しい原色の赤へと濃くなっていく。流れていくのは命の鮮やかさだろうか、出て行った分だけ生命が欠けていく芳川の表情は青褪めて褪せた白っぽさから土色に変化しようとしていた。生きている人間がただの肉の塊になっ

ていく経過の色だ、死んでしまう人の色だ。
痛い死に方は嫌だ、と言っていたのに。

こんな、痛みしかないような死に方で死んでいくというのか。
貴方は。

「芳川さんッ！」立ち上がり様、足に走った激痛でつんのめりかけながらも陽葉は芳川の傍に駆け寄った。駆け寄って跪いた。「芳川さんッ！　　、芳川さん！」声を張り上げて芳川を呼んだ。遠く離れてしまった相手を必死で呼ぶような気持ちだった、戻ってきてくれ、と心の底から懇願していた。

救急車の音が遠くから聞こえたしたのは、随分とたってからだっ
た。

最後まで聞き終えて華子は、「陽。貴方はやはり笠倉の跡を継がないほうがよかったのかもしれませんが」とひっそりと応えた。小さなため息と共に、「貴方はここで芳川の回復を祈っている場合ではないでしょう？　なくした傘を捜しにいく事こそ、貴方がしなければならぬ事のはずです」と言う。

「……そっち？」やっぱりな、と思った。華子に話しながらそのようなような予感がしていたのだ。

「芳川の事故が在蝕の介在するところだった、というのは確かにその通りかもしれませんが。　　貴方は笠倉です、東條でも弓坂でもない。在蝕を退治する事は貴方の本分ではないでしょう？」と、華子は言う。

「事故の原因になったものを探せば、芳川さんは助かるかもしれないのか？」

「傘をなくした笠倉に何が出来るの？」いつもにもなく険のこもった言い方は問いかけの域を超えて批難の形になっていた。ふざけな
いで、と華子なら絶対に口にしないような暴言を突きつけられているようだ。「傘を持っていない貴方なんて無価値です。何も出来なくなっているのに、人を救えるなんて驕らないでください」

非の打ち所のない正論だった。反論する余地はない。

傘を持たない笠倉は無価値。まったくもってその通りだ。

「それに」と、厳しい口調を潜ませて華子は珍しく言葉をにこらせた。目を陽葉からそらして息を落とす。「傘の事をそんなに安易に人に話してはいけません。笠倉が傘をなくしただなんて、東條にばれれば大変なことになります。弓坂の中にさえ、貴方のところを快く思っていない人間はいるのですから、言動には気を配らないと。笠倉は敵が多いですよ」

「……華子だから話した、って思ってくれないのか？」実際そのつもりだった。

「私だから話す、理由がないですもの」本気で言っているんだろうかと思わず華子を見る。華子は、「私は芳川みたいに貴方に甘い人間ではないし。貴方みたいに情に流されたりもしません、不都合な話を打ち明けるのにあまり適した人間ではないでしょう？」と訊ねてきた。理路整然と、でも多少の矛盾も混じった質問だ。

陽葉は、そういうことを口に出す時点で彼女は情に流されていると思う。そのあたりの自覚はないのかね、と苦笑いする。目に見えて心配されているわけでもないが徹底的に他人事として処理されているわけでもない。このぎくしゃくした感じが華子の人間らしさと言えるのだろうけど、この愛らしさは人形じみた容姿とは相性が悪いようで、ただ冷たい感じになってしまう事もある。おそらく本人は第三者のそんな意見など歯牙にもかけていないだろうけれど、陽葉は少なからず残念に思う人間のひとりだった。

「大丈夫。傘は見つける」陽葉はいった。華子に言っただけにも言い聞かせる。「見つけてから、芳川さんの事故の事をやるよ。笠倉の名誉にかけて」最後は格好つけて言い切る。

なまじ芝居がかっているせいか華子は呆れたような顔をした。

「名誉も何もないと思いますけど。いくら子供がいらないからって離婚した相手に引き取られた子供に跡目を継がせるところですもの」

「……ひどい事いうな、華子」

「貴方に危機感がないから」と、強く彼女は言い切る。さっきの批難とは別の、苛立ちみたいなものが混ざりこんだ。「貴方がもう少

し慌てふためいていれば私も、助力は出来るのに。まるで今の貴方は、このまま自分の手元から傘がなくなってしまうなら別にそれはそれで構わないと言いたげでしょう？」見つめてくる目は真意を切り取ろうとしているように真っ直ぐだ。追求して答えを得ようとする眼差しだった。

「さすがにそこまで思っちゃいない」陽葉は首を振る。けれど内心、華子の言うことも当たっているかもな、と思った。

自分からなくしてしまう事は出来ないが、誰かに盗まれたりするのとは別じゃないか。気を抜いていた点に関していえば陽葉にも落ち度はあるが、あの傘が第三者に盗まれる可能性なんてほとんどないことを考えれば、仕方ないともいえないか。どこかに置き忘れてきたのではなく、盗まれる。これは仕方ないな、と状況を都合よく解釈している部分はある。

それに、何も知らない誰かがあの傘を盗んだとしたら、それはあの傘が笠倉の手元にあるよりもある意味で安全であるともいえる。あの傘の価値を知り、利用し続ける笠倉の人間が持つよりも、世間に危害を与えないかもしれない。

でも、「あの傘がなくなったら、笠倉はおしまいだからな」

あの傘がなければ笠倉は無価値。まったくもってその通りだ。

それでも言いながらやはり他人事みたいだと、陽葉は自覚していた。

ある犠牲者？

僕は生きている。生きている。生きている。事故に合っていない、轢かれていない。死んでいない。

心の中で念仏を唱えているみたいだった。ぶつぶつ、と同じ言葉を繰り返す。そうでもしないと僕は本当に事故にあって死んでしまいそうな気がして、いてもたってもいられなくなる。歩いているうちに足が自由に動く事は分かったけれど、また車に轢かれてありえない方向に折れ曲がってしまうんじゃないだろうかと思った。口の中で呟く言葉はほとんど魔除けが何かみたいだ。

雨が止んでも空は重く垂れ下がった灰色をしている。号泣して鼻水を啜り上げてから何とか泣き止もうとしているような、ふとした拍子にまた涙腺が緩んでしまいそうな暗く淀んだ空だった。

僕はただ歩いている。他に行きたい場所もないので、家を目指して足を動かしていた。

家に帰ったところでこの気持ちがどうにかなるとは思えなかったけれど、僕の身体は僕が何かを思うより前にバイト先から家までの最短ルートを選んで歩いているのだ。毎日の日課を黙々とこなしている。ヤジロベエの上に乗っかって高いほう高いほうへ歩いていくとするてんとう虫みたいだった。自分の体重でヤジロベエは動いて、どんなに頑張ったっててっぺんにはいけないのに移動する。習慣というか本能というべきか、同じように僕も歩いていた。家に帰るのなら鳩のような帰巢本能のほうに近いだろうな、と思う。どうでもいい事ではあるけど。

身体が全然痛くないのは不思議だった。

事故にあったのが、ただの白昼夢だったから痛くないのは当然なのだけれど、だ。

車に轢かれて弾き飛ばされて、地面に叩きつけられた。骨が折れる音を聞いて、近づいてきて見下ろしてくる人間たちの顔を見る。

生々しい、なんて言葉も滑稽なぐらい、現実と遜色ない体験だった。いまちゃんと生きて身体が動いていることよりも、貴方はあそこで死んで今は幽霊になってますよ、と言われるほうがまだ信用できたかもしれない。

僕はまだ、僕がここにこうしている事に違和感でいっぱいだった。あれは死んだだろう。と、冷静に思っている。死なないほうがおかしい、と感じている。幻の中でだってあれだけ痛い思いをしたんならショック死ぐらいなりそうなものなのに、と不安になってもいいた。

だから念仏みたいに唱えているのだ。生きている。生きている。生きている。普通に本当に生きていたら人間、こんなことを繰り返し言わなくてもいい。言い聞かせたいのは僕自身に生きている自信がないからだろう。本当は死んでしまってるんじゃないか、と、歩きながらずっと思っているからだ。僕が顔を見ないで逃げ出した、路上に倒れていた男の顔が、やっぱり僕自身だったんじゃないだろうかと気になっている。

僕を轢き殺したはずの乗用車が、僕以外の誰かを轢いた　　なんて、そんなことあるんだろうか？

単なる偶然。本当に轢かれたならこうして歩いているわけもないのだ、けれど。

「僕は事故にあっていないんだろうか？」独り言のように呟いてみた。

状況からすれば事故にあっているはずもない。なのに自信がもてないのが一番の問題だ。

僕は僕を、今何よりも疑っているようだった。

気づけば、足は住宅地の角を曲がった。

住宅地といっても乗用車がかかるうじて一台通れるぐらいの道路から分かれた道に両脇に似たり寄ったりの形をした民家が四軒ずつ並んでいるだけの、小さな一角だ。片田舎、という言葉から想像する田んぼに面した一軒の農家のただっ広い雰囲気はなく、肩を寄せ合

って狭苦しく建っている。そのうちの、手前二軒目が僕の家だった。建った当初はそれでも随分高い値段がついたのだろうが、今じゃ年季が入っている「一軒家」の価値ぐらいしかない建物に成り下がっている。

それでも雨風がしのげるだけましだろうな、と評価していた。

というか、それ以外にこの家の価値はないのだと思っている。

ちゃちな胸ぐらの高さしかない門があって、歩けば四歩もいらない距離に玄関がある。門はとくに錆付いて動かすたびに蝶番がぎしぎし嫌な音を立てるので、ずっと前から植木鉢と針金で固定されて開き放しになっていた。「誰でもどうぞ、お入りください」。

この家に住んでいる人間は僕を含めて閉鎖的で引きこもりがちなのに、いつも開いている門はその正反対に訪れる人を心から歓迎しているみたいだった。

だからなのか、勘違いをしてやってくるものはいつもいる。たとえば猫や犬、動物の類はその最たるものだ。我が物顔で入り浸っていた。

いつもの嫌な臭いが漂っていたのであたりを見回すと、玄関先に糞が落ちているのに気づいて、立ち止まって深々とため息をつく。腹が立つ前に、またか、とうんざりしながら思う。不本意な事にもう見慣れてしまった光景だったので、いちいちヒステリックに神経を尖らせていたら、僕の身のほうがもたない。

この近所の犬や猫は自分の飼い主の家で排便をするのではなく、この家の玄関先でするのがルールだとも思っているのだろう。

一度、はつきりここはお前たちの公衆トイレじゃないと判らせるために玄関先で糞しようとしていた猫を蹴り飛ばした事があった。猫は甲高い鳴き声をあげて飛びさすっていつて、それでもほんの少しだけ糞が残っていて不愉快だった。猫を追いつつても、糞が残っているんじゃない。今回の事に懲りてもう二度と来なければいい、と思った。

けれどもつと不愉快なのが、後からやってきた。しばらくしてか

らその猫の飼い主が人殺しでも見るような目で家にやってきたのだ。「貴方がうちのマーガレットを蹴飛ばすのを見ました」と、飼い主は青褪めた顔で言う。声が震えるのを必死に我慢して、僕を見ている。人殺しを見るような目、ではなくて、最初から犯罪者を見るような目だと、後になって気づいた。「うちの子に酷い事をしないでください。警察に訴えますよ」僕はこの飼い主からすれば猫の腹を蹴り上げて殺しかけた暴行犯、ということだった。あの飼い主が身構えていたのは、今にも襲ってきそうな見境のないキチガイに面と向かって文句を言っていたからだっただけらしい。

糞の世話も出来ないなら動物なんて飼うな、と言ってやりたかったが、無駄なような気がして何も言わなかった。

糞を踏まないように家に入って台所からビニール袋を、ベランダから園芸用のスコップを持ってくる。

台所と繋がっている畳敷きの居間ではテレビがついていて、母がぼんやりとテレビを見ていた。「ただいま」と声をかけたけれど返事はなかった。聞こえていないのか無視しているのか分からない、別に返事をしてほしかったわけではないから言い捨てるみたいに言うだけ言って、僕は外に出た。

糞の悪臭に思わず鼻に皺を寄せる。

また雨が降り出していた。しとしとと、降っていると気づく前に濡れた服が肌に張り付いて気持ち悪くなるような雨だ。水溜りが小さくさざなみを作っている。

それが余計不愉快だった。

「……んだって、僕が」こんな雨の中、飼ってもいない動物の糞を片付けないといけないんだろう。

至極簡単な答えだと分かっていたけれど、僕は毒づくだけ毒づいて傘立てから傘をとって広げた。選びはしなかったけれど、偶然盗んできた傘を手に糞の前にしゃがみこんだ。

雨が降っているせいなのか排便してすぐなのか、蠅がたかっけないのだけマシだろうなと思う。

あの自分の飼っている動物達を天使かなにかと勘違いしている飼い主を家から引きずってきて、「こいつは貴方の家の動物がやったことなんですよ」と告発してやりたかった。飼い主の罪状を読み上げて謝らせながら、僕がいつもやっている糞尿の後片付けさせてやりたい、いつも思っている。

ペットの下の世話まできちんとして立派な飼い主じゃないのか。

だから、あいつは本当は飼い主でもなんでもなくて、ただ犬や猫を集めている収集家が飼い主を気取っているのだ。だから動物たちはここに糞尿を当たり前のように垂れ流していくのだ。

にゃー、と猫がか細く鳴いて道路のほうから近寄ってきた。ぶくぶくと太った三毛猫で、無愛想でぶさいくな顔をしている。半分ぐらい脂肪で隠れている目をこっちにむけて、「いつもわたしたちのうんちやおしっこを片づけてくれてありがとう」と言っているようだった。でもすぐにそっぽを向いてどこかにいかないから、トイレの前に置かれている清掃中の看板を見て「はやくトイレしたいんだけどまだ掃除するの?」と聞かれているようでもある。堂々たる威丈高で僕を見ている。

「お前はわたしのことをいじめられないんだろう?」と、猫はほくそえんでいる。ような気がした。「俺達はまだ法律に護られてるからなにشتって構わないだろう?」と傍若無人に振舞う小学生みただ。

糞を片付けて家に入ったらまたこいつは糞をするんだろうか。それでまた僕がそれを見つけて、片付けるのだろうか。堂々巡りというやつだ、どれだけやっても終わりが見えない。

手が届きそうで届かない距離で立ち止まってこっちを見ている猫を改めて見る。

お前を護るのは動物愛護法ってやつか、と聞いてみたくなった。

この世界の法律は人間が作るのに、同じ人間である僕を助けてくれるよりも、人間の言葉もきちんと分かってるかどうか妖しい動物を護ろうとしてるのか。と、糞を片付けること以上に馬鹿馬鹿しい

気持ちになる。僕のことは何一つ助けてくれなかったのに、人の家の前で糞尿を撒き散らす動物のほうは大事にする世の中なのか。

小さく、息が漏れた。笑ってしまったのだと気づくにはすこし時間がかかる。ため息によく似たものだったから短く喉を鳴らした後で、僕は長く細くため息をついていた。

霧雨みたいだった雨粒がひととき強く傘を叩く。音が鳴る、また本格的に降り出してきたらしい。

「お前なんて、いなくなればいいのに」と、僕は呟いた。独り言のような、小さな悪態のつもりで言う。

猫が嫌い、というわけじゃない。ただ、礼儀をわきまえない奴はみんな嫌いだ。

途端、ベリッ、とあまり聞いた事のような音が頭上で鳴った。細い小枝を足で踏みつけて割るような、頭の上で鳴るにはすこし不自然な、そんな音だ。傘を見上げたけれど、傘の内側は外と同じで真っ黒なだけだった。なんだったんだ、と首を傾げて目をおろして、僕は猫がいなくなっているのに気づく。さっきの愚痴の意味に勘付いてそそくさどこかに立ち去ってしまったみたいに、そこらになくなっていった。「はい。すいません、わたしは立ち去ります。ご迷惑をおかけしました」と、猫が律儀に頭を下げている姿が頭を過ぎった。

いやいや、と首を振って想像を振り落とした。

猫にそんな芸当が出来るわけもない。

せいぜい雨が降ってきたから毛並みが濡れるのが嫌になって軒先にでも避難したのだろう。僕が糞を片付けていなくなって雨が止んだら、きつとまたトイレをしに来るに決まってる。僕はそこそ確信を持って頷くと、糞をさっさと片付けようと思った。

糞をビニールに入れて口を縛る、作業はそれだけだ。

けれど、

「……、え？」

驚いた声が喉から出る。

スコップがなくなっていた。

手にしっかりと握っていたはずなのに、スコップが消えている。そしてビニール袋も糞も、なくなっていた。

文字通り、跡形もなく。ない、と気づくとあたりに漂っていた糞の嫌な臭いもすっかり消えていた。ぼとぼと音を立て始めた雨は植木鉢の土や方々に生い茂った草の匂いを強くしているけれど、どれだけ鼻を犬みたいにひくつかせても、あの嫌な排泄物の臭いはどこからもしない。

僕は傘だけを持って、何もなくなつた玄関先にしゃがみこんでいた。

まるで幻でも見せられていたみたいに、夢遊病にでもなつたみたいに、僕は唐突に夢の中を歩き出していて気づけば現実に戻ってきいていました、みたいな境目の分からない世界を行き来しているような感じだった。どっちも現実に見えて、片方は夢なのだとしか思えなかった。夢の中じゃ糞は確かにここにあつて、猫は確かにそばにいて、僕は「お前なんかいなくなればいいのに」というけれど、現実ではなにもないのだ。

わけがわからなくなっていく。

糞が目の前からなくなつたつて全然困ることじゃない。スコップもビニール袋だってそうだ。でも、目の前にあつたはずなのに突然なくなっているというのは、糞であつても何であつても不気味だった。

僕はじつと玄関先を見る。眼を凝らして、本当になくなつたのだろうかと確認した。土とは違ってコンクリートの玄関先は糞をされると、スコップで掬つても跡が残ってしまうのだ。スコップで掬つた跡が嫌な感じに残る、僕はだからいつだってビニール袋に糞を放り込んで縛つた後で蛇口の栓を持ってきて玄関の植物に水をやるついでに糞の跡を洗い流していた。

その跡はない。

でもコンクリートは風で時たま吹き込む雨に点々と濡れてはいる

けれど、洗い流されたような感じじゃなかった。

本当になくなっていくみたいだ。

なくなっている、じゃなくて、はじめから、ない、というほうが正しいんだろうか。

僕は拍子抜けしたような、腑に落ちないような、なんとも居た堪れない気持ちになって立ち上がった。

ないなら別にそれはそれでかまわないじゃないか、と思うのだけど、僕が確かに見て嗅いだものが現実にはないというのは、僕が触れている世界というか現実みたいなものがどこかですれているんだろうか。そう考えると、糞を片付けなくてすんでほっとする気持ちに勝る不愉快な気持ちがあった。不安、不安定、不信、そんな不だらの気持ちがあぐちゃぐちゃにかき混ぜられて、不愉快だと感じている。

そりゃそうだ。僕が感じているはずのものが現実じゃないなんて、何も信じられないし、安心も出来ないし、だから落ち着けない。

僕自身がまるで嘘みたいなものじゃないか。

でも僕は、ついさっきもこんな気持ちを感じていた。

目を丸くする。

こんな気持ちになるのは本当は二度目だ、と思うと、糞の事で一時的にでも忘れていた一度目のことが堰を切ったみたいに溢れ出してきた。

交差点で事故にあった、あの時。死ぬと思っていたのに僕は、気づけば横断歩道の真ん中で突っ立っていた。

本当は死んでいるはずなんだ、と僕は今でも思っている。轢かれた瞬間の痛みは本物で、思い出すのも怖いぐらいの衝撃だったのだから、あれが嘘だとは思えなかった。僕のココロよりも、体験した身体こそが事実を知っている。あんなに痛い事を、体験じゃなくて想像できるものか。

僕はあの時本当に、あのまま死んでしまっぐらいの衝撃を腹に受けて。

、血を吐いて骨をぐちゃぐちゃにされて、死んでいるはずだった。

「でも僕は、こうして、生きてるじゃないか」

糞が目の前からなくなっただけなのに、僕が死に掛けている事も目の前からなくなった。そういう事なのだろうか。

僕が嫌だと思ったり否定したい事が目の前からなくなっている。

人の玄関先をトイレだと勘違いしている動物の糞や、まだ道路も渡っていないのに突っ込んできた乗用車にはねられて死にかけている僕自身。目の前にはあつたはずの、嫌だったものが消えている。

一度目はただ怖くて逃げ出した。でも二度目は確かに実感できる。直視して、理解できる。

掌を見下ろした。漠然と両手を見つめて、僕は呟く。心の中にぽつりと湧き上がった単語を、喉から押し出した。

「僕が、嫌だと思ったものが……消えてほしいと思ったものが、消えていく？」それはまるで、手品みたいに。

でもきつとこれは、手品みたいに種があるわけじゃない。

少なくともやっている僕自身は種なんて使っていない。僕自身が僕を騙す、そんな理由なんてないのだから。

だからこいつは、と、僕は手を握り締めた。これが嘘でないのを僕自身に証明するために、掌に詰めが食い込むくらい強く握り締める。

「……、超能力、とか？」

凄じい言葉を自分で言った気がした。

けれど口に出してしまうとそれ以上のことはなくて、僕は僕の独り言に笑ってしまう。うまく笑えなくて、ひきつったような、すこし格好悪い声が出た。

カタカタカタ、と鳴っている。

宝くじで一等が当たってもここまで声は震えない、興奮しない、怯えない、僕は今、どうやったって自分では止められない体の中からの振動に、カタカタと、身体を鳴らしている。

僕は、傘を外へ放り出して、靴を脱ぎ捨てて台所に飛び込んでいた。ほとんど反射的にやっていた。居間では相変わらず暢気なバラエティ番組の馬鹿げた笑い声が響いていて、大きめの卓袱台に頼杖を突きながら母がそれを眺めている。くたびれた顔をしていた。まだ五十に手が届くか届かないかの年齢なのに、人生が嫌になつて、そのついでに他のいろんな選択肢を放棄した人間の姿だ。息子がばたばたとせわしくなく台所にやってきても顔をあげようとさえしない。何も見ていないような顔をして、テレビに目を向けている。

この人はちゃんと、生きようとしているんだろうか、と、僕はいつも思っていた。

昔、自殺の報道で遺書が公開された時、「死ぬ理由もないけれど生きる理由もない。だから死にます」みたいな事が書いてあった。この人はまさにそんな感じなんだろうと、僕はずっと思っていた。死ぬきつかけがないから生きている、死ぬの反対語が生きているだから、逆さま言葉みたいに生きている状態にある人。死ぬ勇気もない人だと、僕は思ってきた。出て行った男を、僕の父親を、繋ぎ止めたのか思っているくせに何も出来ないで立ち往生しているだけの、見苦しいだけの女の人だった。

なのに僕を、束縛する。

「母さん」と、呼ぶ。

呼ばれて初めて、この人は顔をあげた。まるで眩しいものでもみるように目を細めて僕を見る。化粧気のない顔は家の電球のせいもあるのかくすんでいて、本当のこの人の年齢よりも随分老けて感じられた。年相応に綺麗でいる事も、あの男がいなくなってから辞めてしまった事のひとつだ。

僕がまだ学校に通っていた頃は、まだ料理を作つて家事をして、笑って怒って、楽しそうにころころと表情を変えて。幸せそうだったけれど、父が外に別の家族を作つて出て行つてからは、ゆっくりとひとつひとつの事をこの人は忘れていった。

笑う事を忘れて料理を作るのを忘れて洗濯物を干すのを忘れて、

代わりに最初の頃は泣き喚いて父親を恨んではいたけど、次第にそれも辞めた。母はなにもかも辞めてしまった。僕のほうは他所に家族がいる父はこの家にお金を入れてくれなくなったから、生活するために学校を辞める事になった。巷じゃ「お受験」なんて呼ばれて、それなりに騒がれて話題になっていいる有名進学校に通っていたのに、辞める時は簡単だった。

全部が狂いだした。

狂いだしたのは、この人のせいだ。

父が家を出て行ったのも、僕が学校を辞めなくちゃいけなくなったのも。

消えてよ、母さん。

父がいなくなつて、僕たちだけになつて。寄りかかるものがなくなつたから、今度は僕なわけ？

「……、いなくなればいいんだ」自分の耳にやっと入るぐらいの声で、呟いていた。

もしも僕がひとりだったなら、僕は学校を辞めなくて済んだだろう。奨学金を貰つてア何とか生活しながら高校生活を送っていたはずだ、その前にもしこの人がいなかったら、父は外に別の女の人を作つていなくなつたりはしなかった。その人が僕の母になればいいだけの話だ。僕は母さんをひとりぼっちにするのが気の毒だからつて、父に置いていかれたのだ。俺の代わりに面倒を見てくれ、と言われているのと同じだった。

何もしなくなったこの人を養う為に僕は学校を辞めた。

まだ高校三年生で、横断歩道で見たあの女子高生と同じ制服を着て毎日学校に行っているはずの僕は、この人の為に消えてしまった。「あんたがいなかったら、僕はもうちょっとは幸せなんじゃないのか？」と、独り言。けれど今度の言葉は聞こえたかもしれない、届かないように聞こえないように声を潜ませはしなかったから。

けれど母は僕のほうをじっと見つめているだけだった。怒る事もない。

ひどい事を言ったと自覚している僕も、罪悪感とか持たないままじっと母を見つめた。

詰る言葉も謝る言葉もない。

雨脚が次第に強くなっていくなかった。開け放しになっている玄関の扉が風にぐらついて、雨の匂いが湿気と一緒に家の中にあがりこんでくる。

消えろ。消えてしまえ。いなくなってしまう。何度もそう心の中で念じてから。

「消えてしまえ、あんたなんか」

消えてほしい、と。

口に出して、願った。

けれどしばらくしてから僕は、母から目をそらした。と同時に、ため息をついていた。長いようで短くて、何もないような数秒間だった。

母の視線も僕からそれている。「あんたがいなくなったら僕は幸せなのに」、そんな事を唐突に言い出した息子に面食らう事も怒る事も悲しむ事もしないで、全部をやめてしまったこの人はまた頼杖をついてテレビを見ていた。何事もなかったようになっていた。居た堪れないのは僕だけで、もやもやとした形も曖昧な嫌な感じに顔をしかめるのも僕だけだ。僕一人だけが、取り残されている。

玄関の扉が勢いよく閉まる。突風が扉にぶつかったのだろ。思わず身体を竦ませる、それぐらい大きな音だったのだが、母は相変わらずだった。何も変わっていない。

なんだ、と、脱力した。超能力なんて気のせいだったのか、と思った。竦んだ身体が僕が馬鹿馬鹿しくなったのと同時に、物凄い徒労感に溶けてしまいそうになっていた。

冷静になつてみれば、当たり前のような気もする。というか、これこそが現実だ。と、僕は緊張しすぎていたらしい頭の隅で思う。

僕が消えてくれと言った物が消える、なんて、いまだき子供向けのアニメでも使わない設定だ。スプーン曲げとかならまだしも、そ

んな超能力なんて聞いた事がない。ただ全部都合がよかっただけなんだ。消えてほしいって思った母さんは目の前にいるじゃないか。全部、すべて、勘違いだったんだ。事故も糞も、気になる事はあるけど夢みたいなものだったんだ。きつと。

口の中で短く苦笑してから、僕は玄関に戻った。大人みたいに物分りのいいふりをして納得する。外に出ると雨を抱えた横殴りの風が僕の身体を殴りつけていく、とつくに飛ばされてるような予感がしたけれど傘は奇跡みたいに投げ出した形のままだった。まるで漬物石みたいに、まったく動いていない。

拾って傘を置んだ。それだけの事をするのに僕の身体はびしょ濡れになる。

とりあえずはゴミ袋にでも放り込んでから新聞紙で包んで部屋に隠そうと決める。

雨粒を落とそうと傘を振りかけたところで僕はその事に、気づいた。

「あれ……。濡れて、ない？」

傘はそれこそ一滴の雨粒にさえ濡れず、黒々としていた。

嫌な客

華子には芳川の手術が終わったら連絡をほしいと頼んでおいた。そうしてから陽葉はまず、行動を起こす。

「といつても最初はあるの全国チェーンの中華料理店に電話して、「傘を忘れたんですけどありますか?」と聞くところからはじめた。

応対したのは若い声の女性でおそらくはマニュアル通りに、「どんな傘ですか?」と聞いてきた。無地の黒色の傘です、と答えると、「すこしお待ちください」と言ってから保留が流れる。待つ事三十秒ぐらい、「大変、お待たせしました」と低姿勢なセリフからはじまって彼女は、「黒色の傘は忘れ物の中にはありませんでした」と回答する。そのあたりは想像通り、食い下がる気もないので、「そうですか。ありがとうございました」と電話を切る。切ってからすぐ、今度は東京のほうにある本店に電話をかけた。

待たされる事なく回線が繋がる。電話口の向こうは今度は中年ぐらいの男だ、しっかりと落ち着いた低めの声だった。

「傘を忘れたんですけど、店のほうじゃないって嘘をつくんですよ」と、陽葉は切り出した。

支店の名前と店が一番込み合う時間帯を口にしてから、「車で行ったんですよ。傘を持って店に入ったんですけど、出る時に忘れましてね。いま電話をしたら、そんな傘はないなんて言うんです。そんなのおかしいじゃないですか、そこでなくしたのは分かっているのにないなんて。誰かに盗まれてもしない限りありえませんか」と、盗まれた、という部分を強調して断言した。

男は、「盗むなんてそんな事は……」と反論しかけて言いよどむ。事情も分からないのに下手に反論して後々問題になるのを恐れたのだろう。

いいぞ、いいぞ。このまま困り果ててくれ、と思いつながら言葉を続けた。

「じゃあどうして傘がないんですか。私がどこかに置き忘れたのを勘違いしているとも言いたいんですか？」熱っぽく激昂したように陽葉は台詞を受話器に叩きつける。頭の中はいたって冷静な分、黙り込んでしまった彼が早く匙を投げ出してくれるのを期待していた。「電話で聞いているだけで実情が分かるっていうんですか？ あんた、それで傘があのお店から見つかつたら責任取れるのかよ」敬語から溜め口に変更、物言いも脅しの効かせると、電話口の向こうの小さくノイズみたいな雑音を拾った。唾を飲み込んだ音のようだ。

「……、支店で起こったことは支店のほうに苦情をお願いします、」と、男は長い沈黙の後で言った。精一杯自尊心を抱え込んでの返答に聞こえた。今自分が対応している客は酷い客で自分まで言いがかりの対象になつたらかなわないと思つたのだろう。さつき短い逡巡のような沈黙の後で、「支店の事は分かりかねます」と、今度ははつきりと逃げ腰に言ってきた。

「本店なのにね」つい本音が出る。今回は投げ出してくれて助かったが、本来なら支店でどうにもできなかった事をどうにかするのが本店じゃないの？ という気持ちもあった。

「支店のほうには連絡しておきますので、今後は支店のほうと話を」ぼろりと出た本音が陽葉の性格そのままの暢気な言い方だったからか、男は逃げ切れると踏んだらしい。矢継ぎ早に言い切ると、挨拶もそこそこにそそくさと電話を切ろうとする気配があった。本当のクレマーならそんな態度のひとつをとつても槍玉に挙げて文句をぶちまけるところだろう。本物志向なら文句を言わないとな、と、どうでもいいことを考える。

結局、文句は言わずに見送る事にした。

電話は向こうから切れた。逃げたけど、一応丁寧に受話器を置いたらしくそれほど耳障りな切れ方じゃなかった。ツーツーと鳴っているだけの回線の繋がっていない受話器を目の前に持ってきて、「すいませんでした。ひどい事をいろいろ言つて」と、陽葉は謝る。それから受話器を電話機に戻した。

支店のほうから電話があつたのは、二時間ほど経ってからだった。堅苦しく重苦しく店の名前と自分の役職を男は言つた後で、「アルバイトが勝手な応対をしたみたいで……」と苦々しそうに言う。アルバイト、の部分だけこれでもかと強調して責任逃れを決め込もうとしているような言い方だった。あまり好きになれそうにない人だな、と思つてみる。

「別にいいんですけどね」と、話を進めた。好きになれなくても関わるのは今日限りだから気にしない事にする。「ちよつとお願いしたい事があるんですよ」

「な、なんでしょう？」

「忘れ物を保管している部屋とかあるんでしょう？　そこ、俺に見せてくれませんか？」

男はつかの間黙り込んだ。即「どうぞどうぞ」と言えない事情と一つがあるらしいが、彼に長い時間を与えて言い訳を考えさせる気は毛頭なかったので、陽葉はふたつ呼吸を置いてから受話器越しに声をひそめた。

「別に金を払えつて言つてゐるわけじゃないんですよ、店長さん。忘れ物を保管している場所を見せてほしいって言っているだけで、見せるだけの事にどうしてそんなに困るんですか？」

「いや、その」と、支店長は言いよどむ。

「それとも」反論らしい反論が出てこないうちに捲くし立てる事にした。口を開きながら次に何を言おうか考える。「見せられない事情でもあるんですか？　まさか忘れ物なんて誰も取りに來ないから空間がかさばるだけだとか言つて捨ててたりはしませんよね。ああ、でもそうだったら俺がさつき電話した時にないと返答したのも頷けますが。捨ててしまったのなら、最初からあるはずがないですからね」

「そんな事はありません！」はじめて支店長が声を荒げた。プライドをとかく傷つけられて苛立っているような声だった。

「じゃあ、どうしてですか？」彼の激昂に冷や水を浴びせるつもり

で訊ねる。

おそらくは、傍若無人な客の要求にはいい二つ返事で応じる事への抵抗感が彼にはあるのだろう。今は忘れ物を保管している部屋だけでいいとか言っているが、段々要求がエスカレートしていった最後には「傘代と手間賃を払っていただけないでしょうかね。貴方たちのおかげでとんだ時間の無駄遣いをしてしまったんですから」とか言い出して多額の賠償金を要求するに決まっている、とか思っているのかもしれない。最初のどうでもいいような要求を飲んでしまったらおしまいだ、と身構えているような気がした。

「金で解決したい気持ちは山々なんですけどね」わざと、金、という単語を露骨に強く出して言ってみた。

と、電話口で短い悲鳴みたいなものが上がる。息を吸い込んで喉がか細く鳴ったのだろう。ああやっぱり言いやがった、とふうな息の詰め方だった。「支店長さん、金で解決できない問題もあるとは思いませんか？ 俺がお願いしているのは、そういう部類の話だと思っただけなんですけどね」ここで、誠意を見せてほしいと言ったら暴力団の手合いだなと陽葉は思う。

だから勘違いされても困るので、電話越しに彼がパニックを起こす前に言った。

「俺はただ、自分の目で見たら納得できているだけです。電話越しであるなしを聞かされても納得は出来ませんが、自分の目で確認したらもう諦めるしかないでしょう？」

支店長はさっきの悲鳴ひとつだけをあげたまま黙り込んでいたが、しばらくしてようやく「分かりました」と応えた。ほとんど独り言のような、受話器にしっかり耳を押し付けていないと聞こえないような声だった。負けてしまった、と呆然としているようにも聞こえる。

陽葉は来店する日時を告げて電話を切った。「ひどい事を言いました。すいません」と、さっきと同じように受話器に向かって謝る。そうしてからもう一度病院に向かうと、芳川の手術が終わってい

て彼は集中治療室に移されていた。集中治療室の前のベンチに座っていた華子が出迎えてくれて、「手術は成功したようですよ」と嬉しいのかどうかいまいち分からない表情で言ってくる。

犯人探し

翌日は雨こそ降っていなかったが曇り空だった。ただ今にも雨が降ってきそうなのは違いない。

苦虫を噛み殺したような支店長と従業員用入り口で待ち合わせ中に入れてもらう。まるで万引きをした家族を迎えに来た身内のような扱いだな、と自分の前を歩く支店長の背中を見て思った。客として、というよりは、自分達に嫌な事をする人を招きいれているのだと、心の底が透かし見えそうな分かりやすい態度だった。裏口のような場所から中へ案内する事自体、あまりいただけない。「俺の時間を使って酷い事をしているのは貴方達じゃないか!」、と、本当のクレマーなら憤慨して表の店の客にまで響いて聞こえるようにわめき散らすところだな、と頷く。

とりあえず今はやめておいた。

しばらく従業員用通路を歩いた先にあった忘れ物保管室の入り口は、いかにも安物なアルミサッシの扉だった。中央に小さく正方形の曇りガラスがはめ込まれている。採光のためかただのデザインかは見当もつかないが、どっちが目的にしてもあまり成功していないようだった。

部屋は整然と片付けられている。

六畳程度の部屋の壁に添うように、ステンレス製の四段の棚が四隅に配置されていて、ダンボールが所狭しと置かれている。ダンボールの表面を見ると、大まかな日付がサインペンで殴り書きされていた。整然とはなっているけれど、全体的に付け焼刃のようない加減な感じだった。陽葉のクレームを受けてから慌てて片付けたのだろうと容易に推測できる。

「傘類はあつちです」と店長が部屋の一角を指差した。ビニール傘からはじまって花柄模様やこもり傘、子供用の黄色い通学傘までが白い荷造り紐でぐるぐると縛られている。近づいてみるまでもな

かったが、パーフォーマンス的に陽葉は近寄ってあの傘がないか眼で探してみた。あるはずがないな、と最初から思っただけだ、やはりない。

期待してはいなかったけれど、それでもふとため息を漏らしてしまった。

そのため息に何か不吉なものを感じたのか、背後で肩を強張らせるような気配がする。また何か文句を言う気か、やっぱり金を要求するつもりか、とこっちの反応を窺う態度に陽葉は振り返って、「俺の接客をした人は男の人だったんですけどね」と、駆け引きする気もわずかに切り出した。彼からすれば唐突だったのだろう、面食らったような顔をする。

「不自然なぐらい真つ黒な髪をした男の人でした。男の人っていつでもおそらく、俺より年下でしょうけど。高校生ぐらいかな。やけに無愛想だったので覚えています」

「あ、」面食らった顔のまま男は瞠目した。陽葉の言葉で誰なのか分かった、というような表情をしたが、一瞬失語症にでも陥ったみたいに短く息を吐くように呟いた後で、「あ、会わせるとか言うんですか……？」と訊ねてきた。電話の時よりも、直接話すほうが話の流れを汲み取るのは上手なようだ。出来る限り先手を取られないように気を張っているのかもしれない。

陽葉が他人事気味に微笑んで頭を打つと、途端に困惑したような表情を作った。

「傘はなかった、んですか」

「ここにはないみたいです」自分の目で確認したのだから素直に認める。

「……うちの従業員に会って、なにを？」おそろおそろといった感じだった。そこまで自分の態度は悪いものだったろうか、と思いついてしまふ。

「話を聞くだけです」

そこにちょうどいいタイミングで部屋の前の廊下を通り過ぎよう

としていた若い女の子がいたので、支店長は呼び止めた。「恵美ちゃん」と馴れ馴れしい呼び方をする。「悪いんだけど、足立を呼んでくてもらえないかな」といわれたアルバイトは、「はい」と行儀の悪い返事をして踵を翻した。

しばらくしてひとり分の足音が近づいてくる、「店長。なにか用事ですか?」と、不自然なぐらい真つ黒な髪をした男が顔を出した。彼は店長を見た後で、その奥に佇んでいる陽葉に気づいたみたいだった。どうして呼ばれたのか分からずに不思議そうにしていた目を細めてから陽葉を一瞥し、眼差しを店長に戻す。不自然な感じはしない、滑らかでそのない動きだ。傘を盗んだ相手を目の前にしての演技なら、なかなか図太い神経の持ち主という事だろう。

「足立。お前この間、この人の　笠倉さんの接客しただろう?」店長が口を開いた。唐突な、説明に欠ける質問の仕方だった。

足立青年は首を傾げる。なにを言い出すんだ、と呆れているようだったけれど一応律儀に記憶をさらっているみたいだった。しばらく邪魔にならないよう口を閉じていると、「ああ」と思い出したらしく、間延びした声を出した。「思い出した」と頷く。「あの背広を着た男の人と来店した人ですよ」と確認するように陽葉のほうを見てきた。

「はい。そうです」と、陽葉は頷く。

よく覚えているな、と言えなくもないが、そんな混んでいない日でもあったし不自然というほど不自然でもなかった。

店長からすれば、「覚えてませんね」とでも言っただけのところだったのだろう。苦虫を噛むような顔をしてから、「店に傘を忘れたって言っているんだが、心当たりがあるか?」と、また唐突な質問をぶつけてくる。

「え?」と、足立青年は目を丸くする。

「俺が傘を持っていたのは知ってますか?」動揺する足立に陽葉は質問した。横合いから訊ねる権利を横取りされて店長は不機嫌そうに顔をしかめたけれど、気を取り直して、「どうなんだ。足立」と

重ねて聞いてきた。

足立青年は戸惑うようにふたりの顔を交互に眺めてから額の髪の毛の生え際を爪で掻いて、「ああ、覚えてますよ」と応えた。しばらくくれるよりは素直に応じたほうがいいと思ったような、すこし投げやりにも感じられる言い方だった。言ってからしばらくして、大きく何度も瞬きした目をふたりにやって首を横に振る。

「店の中は空いてたし、雨の日に店内に傘を持ち込むお客さんで覚えてただけですよ。雨もいきなりの土砂降りだったから、覚えやすかっただけで」

無実を訴えるような仕草だ。

店長は不機嫌な表情に胡乱気なものを混ぜながら店員を見遣り、それから陽葉を見て、「まあ雨の日に傘を店の中に持ち込むのは、一応、入り口のところに張り紙をしているんで目立ちますよ」と答えた。陽葉もその張り紙のことはきちんと覚えていて、「他のお客様のご迷惑となりますので店内への傘のお持込はご遠慮ください。傘立てをご使用ください」と白い紙に丁寧な文字で書かれていた。言われたとおり、使って雨に濡れていたビニール傘のほうは傘立てに入れたのだ。

「その傘のことを」陽葉は足立を見た。見据えた、と言ったほうがいい。鋭利、とまではいかなくても人の心の中を見透かすように目を細めた。「貴方は知ってますね？」

知っている、という単語に足立は間の抜けた顔をする。驚いているような、啞然と口を開いて陽葉を見た。反論したのは、その言葉通りに聞けば告発のようにも聞こえる問いかけを額縁通りに受け取った店長のほうだった。慌てふためいた拳動不審さで陽葉の眼前に向き直り、「ちょ、ちょっと待ってください！」と声をあげた。

「知っているって、さっき足立は言ったでしょう！」

「ええ」聞いた。だから確認したのだと返せば、彼は一瞬表情をひきつけてから、「なにを確認するって言うんですか」と、訊ねてくる。

足立青年は陽葉を見ていた。ただ驚いていた顔はふたりのやり取りの間に奇妙に崩れていて、複雑そうなものになっている。どんな表情をすればいいか、迷っているともいえそうな中途半端な顔をしている足立に陽葉は改めて質問した。

「俺が持つてきた傘がどんなものだったか、言えますか？」まるで記憶力を試すテストみたいだと、聞いている自分も思う。

店長は勢い任せに口を開きかけて、途中でやめた。不愉快そうにひきつった表情はそのまま陽葉を一瞥し足立を見遣り、顎をしゃくる。言つてやれ、といったところだろう。別にこの客の傘の柄なんてなにかの問題になるわけでもない、と思っているのが伝わってくる。客足がまばらな雨の日に、傘は持ち込まないでくださいという張り紙があつたにもかかわらず持ち込んだ客の傘、だ。覚えているからどうの、と難癖をつけられても、切り抜ける出口はいくらでもある。

確かに、普通ならその通りだった。

足立は店長よりは慎重だったが、やがて、「時代劇に出てくるような傘でしょう？」と答えた。表情の変わらない陽葉の顔を見ながら、「なんか遊郭とかにありそうですね。あんな感じの傘なんて滅多に見れないからよく覚えてますよ」と、当たり障りのない事を言う。

陽葉はすぐに返事をしなかった。

つと足立を見遣り、そうしてから目を伏せる。「分かりました」と短く声を出したのは、すこし経つてからだつた。店長のほうを見る。「どうやらここに傘はないみたいです。他をあたってみます」

「そうですか」と返事をした店長の顔は露骨にほっと安堵しているようだった。「お役に立てずに」律儀に形式だけの会釈を向けてくる。それから足立を見て、「足立。出口までお送りしろ」と指示した。半ば命令口調で強引な感じがしたのは、手間のかかる客の苦情をどうにか処理できた自信や誇りからくる自尊心の現われかもしれ

ない。もしくは普段からこんな感じで、部屋の主導権が難癖をつける客から剥がれたのでせつせと今度は自分に貼り付けなおそうとしているのだろうか。

どっちにしても鼻につく物言いには違いない店長の命令に、足立は抵抗しなかった。ただしばらく店長を眺めていただけだ。そんな足立を陽葉が見ている、観察するような目だった。足立青年も店長も気づいていない。長いといえば長い、一方通行の眼差しは店長が、「店も混んでくる時間だろう。なに突っ立ってるんだ、足立！」声を荒げた事で終わった。

足立青年が黙って頭を下げて部屋を出て、陽葉もその後続く。外に出るまで誰ともすれ違わず、互いに口を開く事もしなかった。

陽葉が足立に話しかけたのは通路口の扉を先を歩いていた彼が開けて、後ろを、陽葉のほうを振り向いた時だ。このまま脇を通り抜けるものなのだろうが三步ほどの距離を置いて立ち止まった陽葉に、足立は怪訝そうな顔をした。

「俺の傘の事、覚えてるんですね？」二度目になる質問をする。

足立は顔をしかめた。同じ事を聞いてくる陽葉に呆れているようでもある。「覚えていますけど、」それがどうした、とばかりの言いは自分が肯定した事の重大さをまったく理解していなかった。傘の正体を何も知らない、足立青年の態度はまさしくそんな感じだ。でも彼は、傘の事を知っている。そこが重要だった。

「あの傘は大事な傘なんです。それこそ、うちの家の家宝みたいなものでしてね。特別な傘なんです。どんな形であれきちんと返ってくるのなら俺は、誰かに盗まれていたとしても文句を言う気はないんです」

「はあ」と、とぼけた声。そんな事を僕に言われても困る、と言いたそうに眉根を寄せている。

「だから、返してくれませんか」言って、陽葉は手を差し出した。足立青年に、犯人にむかって、訊ねる。

「俺のあの傘を盗んだのは、貴方ですよ？」

ある犠牲者？

確信を持っている。というよりも、自分が言っていることが真実だと知っている。嘘ではないと分かっているから堂々と、彼は手を差し出してくる。それは丁寧な慎重な嘘をつき続けている僕に不意打ちを食らわせて止めを刺す、唐突で正確無比な質問だった。

だから、「は？」と、聞き返せたのはかるうじてだった。

それだけで、他には何も言えなかった。「何言ってるんですか、貴方は」ととぼけようとしたけれど、寸前のところで言葉が喉に詰まったみたいに何も出てこなくなる。下手なごまかしはどうなるんだろうか、と分からなかったからだ。

口の中に溜まっていた唾と言葉を飲み込んで、僕は彼を見る。彼が来る前に店長が別のお気に入りのバイトの子に愚痴っていた、「本店にまで電話をした嫌な感じのクレーマー」の像とは何か違ってのような感じがしたからだ。理不尽に脅したり喚きたてたりするでもなくて、彼がいたって普通に見えたからかもしれない。だからこそ、僕が口にした言葉からどうして傘を盗んだ犯人だと思うのだろう、と不思議に思うのと同じぐらいに薄ら寒いものも感じていた。

普通の事しか話していない。

言いがかりだと、鼻であしらおうとするには、彼は穏やかすぎる。傘をなくした腹いせにそんな適当なことを言ってるんでしよう、と言ったらこっちのほうの言いがかりをつけているような気持ちになるのは間違いないだろう。

頷くにも首を振るにも、僕は中途半端でどっちも出来ないまま俯いた。二時間ドラマの最後に罪を暴き立てられた犯人が頂垂れて跪いてしまうような感じた、そっちのほうはまだ素直に罪を認めて潔いかもしれないけれど。

「あの人に言うつもりありませんよ」と、彼が言う。

店長の事だな、とすぐに分かった。初対面でもあの店長の横暴さは理解しているらしい。「他にも、誰かに告げ口するつもりはありません」と、言葉が続ける。「貴方が返してくれるなら、俺にはそんな事をする必要がありませんから」

「腹いせとか」素直に頷いておけばいいのについてそんな事を口にする。「わざわざ電話してこんなところまで来て、その事に対する抗議とか」被害者が行う告げ口は正当なものだと思った、しないと言うのは自分から権利を放棄しているようなものだろう。

「また手間を取らされるなら、やるかもしれませんけど」彼は頷いた。「でも今はしませんよ。そこまでしなくても、貴方が返してくれそうなんで」

目を丸くして彼を見ると、彼は物静かに微笑んでこっちを見ている。

彼の言う通りだった。

僕は彼が「返してくれるなら誰にも言わない」、といった時に返そうかと思い始めていた。あの傘を盗んですぐにもう罪悪感や嫌悪感があつて、盗んだ傘をずっと持ち続けていてもいい事はなさそうだし、なによりも盗んだのが僕だと分かっている相手にしらばつくれるのもおかしかった。客の傘を盗んだ事がばれて店を解雇されることを考えたら、今なら黙っているという彼の言葉を信じて返すのが妥当だと思う。意地を通すのが面倒になったのも事実だ。

「分かりました」と僕は頷いた。

罪を認めたつて事になるのだろうけど、不思議と彼に対しての罪悪感は生まれなかった。度の過ぎた遊びを自分からお開きにするような、諦観めいた気持ちのほうが強い。「盗んだの、僕です」告白しても気持ちに変化はない。

「返してください」とだけ、彼は言った。長々と、「どうして俺の傘を盗んだんだ」とか「どうしてこんなひどいことが出来るんだ」とか非難のしうはいくらでもあっただろうけど、彼は何も言わずに端的に言葉を選んだようだった。言う言葉を少しでも短くして話

す時間を減らしたくしている風でもない、本当に彼の用事と興味はあの時代錯誤の傘のみなのだと分かる言い方だ。

だったらそんなに大事な傘をどうして持ち歩いていたんだろう、と、逆に気になってくる。人それぞれお気に入り傘というのはあるだろうけど、あの傘は普通に使うにはあまりむいていないような代物だと思うからだ。竹の骨組みも華奢で、今の彼の挙動のままに大事に扱うつもりなら、家で大事に保管しておくべきものだろう。

けれど、質問する立場にないので、僕は疑問を飲み込んだ。

「家にあるんです」と、応える。

昨日のうちに新聞紙に包んで部屋の押入れの中に入れていた。学校に通っている間は毎日欠かさずつけていた日記帳や文房具を押し込んだダンボールの後ろにばれないように隠している。抜け殻みたいな母が僕の部屋の掃除をするとも思えないけど、重たいダンボールを退けてまでわざわざする事なんてないはずだから、あそこなら安全だろう。

「このアルバイトは何時になったら終わるんですか？」

「夜の七時には」と、僕が答えると、「じゃあ、アルバイトが終わってから返してください。貰いに来ますから」彼は言った。後は、夜の十一時にこの店の前、とあっさり決まって彼は僕が手で押さえている扉の出口から店の外に出る。一度も振り返らずに駐輪場のほうへ歩いていった。

一言ぐらい文句を言っていくだろうと思っていたけど、最後まで本当に何もなかった。

拍子抜けしたような気持ちで上向いて見上げた空は、雨が降り出してきそうな雨雲で埋め尽くされている。店にきた時よりもどんよりとしていた。これだと約束の十時頃には雨が降るかもしれないな、と思った。別の傘をさして傘を返す、なんて傍から見たら変な感じだろう。

別に考えなくてもいい事を僕はくどくど考えてから、盗んだ傘の事を思い出していた。盗んですぐの時は、なんて事をしたんだろう

と呆れていたのだ。たかがマナーの悪い客の傘一本を盗んだせいで僕は店を首になるのか、と、自分の軽率さに馬鹿馬鹿しくなっていた。でも、あの客は盗んだ事を批難するでもなく、返してくれるなら文句は言わない、と言う。

「ついでるよな」口に出して僕は言ってみた。

傘を返せば、彼が言う通りに黙っていてくれるなら、とりあえずは傘を盗んだ事はなかった事になる。あの店長にばれて罵声を浴びせられて辞めさせられる事もない。リセット、帳消しだ。僕は僕に、もう二度とあんな馬鹿な事はしないと誓えばいい。

僕はほっと息をついてから扉を閉めて、店長が怒鳴りだす前に早足で店に戻った。

新聞紙に包んだままの傘を持って家を出ると、店までの道のりを半分程度残したところで思った通りに雨が降ってきた。まだトタンやビニールシートに落ちる一滴一滴の雨の音がはつきりと聞こえる、まばらな雨だ。濡れても気にならない雨だったけれど、ビニール傘を広げた。傘を包んでいる新聞紙が濡れないように気を配りながら、店まで歩いた。

店は十時に営業を終了する。それから清掃やらの後片付けをやつて、従業員が全員帰って店の明かりを消すのは十一時ぐらいだ。今日は後片付けが早く終わったようで、十一時前に店の前に着いたときにはもう照明は消えていた。夜間はど派手な赤い電飾看板を灯しているのだが、今はその看板もひっそりと暗がりの中に紛れて佇んでいるだけだ。

彼はまだ来ていなかった。大事なものと言っていたのに遅刻か、と息をつく。

閉まった扉の把手を揺するような音が駐車場のほうから聞こえて、僕は振り向いた。僕がいま立っているのはシャッターが閉まった店の入り口のほうで、音がしたのは従業員用の裏口だった。明かりは消えているのに残っていた人がいたのか、と思う傍で、そういえば

きちんとどこで待ち合わせするとかは話していない、と気づいた。店の前とは言ったけれど入り口は僕がいる場所だけじゃないし、その事を話したのは裏口だ。建物に沿って従業員用口へ向かう。

雨はゆつくりと勢いを増している。

建物の角を曲がった時、出会い頭にそれは飛び出してきた。声をあげる間もなく驚いて飛び退くと、飛び出してきた自転車は大きく左右に揺れてバランスを崩し乗っている人ごと道路に倒れこんだ。けたたましく自転車とアスファルトが衝突し、人が投げ出される。音に思わず身体を竦ませた。甲高い残響が長く強く耳の中の残る、カラカラカラ、と不自然に歪んでしまった後輪が宙を上にしながらか回りしている。

「……痛ッ、てえ」倒れた男はこめかみを押さえながら起き上がり、「？ お前、足立」地面に片手をついたまま店長は僕のほうを見た。痛そうに顔をしかめてはいるけれど目を丸くする。

「……こんばんは」とだけ言った。とりあえずは一番無難な挨拶だけれど店長は何が気に入らなかったのか、思い切り顔をしかめる。「こんなところでなにをやってるんだ、お前」と、すこし乱暴に聞いてきた。

挨拶に挨拶を返してくれないのはいつもの事だった。自分の疑問を最優先させる、というよりは店長のそれは王様みたいな独りよがりな支配欲が原因している。対等のコミュニケーションをとらなくてもいい、上から物をいつてもいい、と全部勘違いと思い込みでこの人はできている。と、僕は思っている。

「別に」まさか、盗んだ傘を返しにきたんです、とは言えない。言ったらおしまいだ。

だから、なんでもありません、と答えると、露骨に店長は不機嫌な顔を見せた。

思えば、ここは店の厨房でもなければ呼び出されて休憩室にいないわけでもないのだから、彼の質問に律儀に答える理由は僕にはこれっぽっちもないはずだった。それでも、答えないのは部下としての

誠実さに欠ける、とても言いたそうな顔をする。誠実なんて遠回しじゃなくて、店長が求めているのは忠誠心や忠義やそういったほうかもしれないが。

部下じゃなくて家臣だったりな、とも思う。

傘を返してくれるなら、誰にも言わない。

そう言った彼の気持ちがありがたい、と、本当に思った。

店長はむすっとした顔のまま立ち上がって、地面に倒れこんだ時についた汚れを払う仕草をしてから、「足立。お前、ここで働き出してどのぐらいになる？」といきなり聞いてきた。雨が降っているから汚れたといっても水溜りで濡れたぐらいだろう、でも目は僕のほうを見ないまま服の袖ばかりを気にしている。

「一年、ぐらいでしょうか」

父が出て行って母が抜け殻になって、学費を払えなくなって高校を辞めて、アルバイトをはじめた。だから大まかでそんなところだ。僕の返答に店長は大きく頷いてから、僕を見る。

「なのに全然成長しないな、お前」

短く鼻を鳴らして笑うのが、とにかく僕を見下して馬鹿にしている感じだったので店長を見ると、彼は倒れている自転車のハンドルを握って起こしてから、「接客態度悪いって自分で気づいているか？ 最初の頃は慣れてないんだろうなあ、ぐらいで大目に見てきたけどまあ、もう治りそうにないな」スタンドを立てて向き直った。

あ、何か始まるな。と直感する。

似たような光景を前に数回、見たことがあった。その時は僕はいつも外野だったけれど、今回とうとう当事者になってしまったわけだ。

「苦情来てるんだよ、お前に」と、店長は切り出した。言い辛いことを口に出しているような感じではなく、むしろ楽しんでいるような口調だった。ねちねちと弱いものをいじめる嫌らしい言い方をする。「愛想悪いって。ろくに接客も出来ない奴をフロアに出して使うな

んで飲食業として間違ってますか？　って」

インターネットが普及している現代は、ちよつとした接客の悪さでもすぐにメールで本店に送られる。名指しなんて当たり前。この間も「言葉遣いが全然なっていない、不愉快だ」と本店に名指しでメールを送られた先輩がやめた。前の店長が、今の店長と彼女のどちらを次の店長にするか悩んでいる時だった。

「ちゃんとやってます」マニュアル通りに動いている。

「お前的には、だろ？　でもそう思っていない客がいるっていうのが問題だ」性格が悪そうな、と思うぐらいじゃ生易しそうな笑みで店長は僕を見た。作ろうと思っ作った、そんな感じの表情だった。ちつとも自然じゃなくて、むしろ偽物くさかった。程度の低いお化け屋敷の幽霊みたいなものだ。

でも、言いたい事はなんとなく分かる。察する事は出来る。

「僕は辞めません」どうして辞めなくちゃいけないんだ。

貴方は本物の王様じゃないのに、どうして言うことを聞かなくちゃいけない。

どこかの王様を気取っているらしい店長は大袈裟に首を振る。芝居がかっていた。「辞める、とか自分で決めれると思ってるのか？」意味を聞く気もないように、店長は続けて口を開く。もったいぶって楽しむよりも僕の反応を見て楽しみたいらしい。「自分からここをやめなくたって、世の中にはリストラってものがあるだろう？」

「僕が辞めてどうするんですか」

売り言葉に買い言葉ではなくて、正直に思っていた。

ここのアルバイトの数はいつだって足りなくて、いつに貼り出したかも忘れてしまっているような飛び散った油の染みが目立つアルバイト募集の貼り紙を入り口や厨房近くの目立つ場所にずっと貼っている。入ってきてても仕事の忙しさからやめていくのも普通なので、一年間続いているアルバイトをクビに出来るわけがなかった。そんなのは自分で自分の首を絞めるようなものだ。

人を急き立てるように毎日誰かを怒鳴りつけているこの人自身、

そんな事は分かりきっているだろうに。

「ここで一番権限を持つてるのは、俺なんだから」なのに店長は、顎を持ち上げてふんぞり返る。まさしく王様だった。いや、独裁者か。「客からの評判が悪いつてやめさせるぐらい簡単なんだよ」傲慢に、心底偉そうに言い切つて愉快そうに笑い、そうして途端にまた不愉快そうな顔をした。「俺は本店からここを任されたんだ。自分がやりやすいようにして何が悪い、部下を教育するのも上司の仕事だろうが。言う事を聞かない部下の首は刎ねるのが当然だろう？」

時の暴君ならまさしくギロチンを用意してくるような、物騒な言い方だ。けれど店長もギロチンはなくても言葉で人の生き方をばつさり断ち切つてしまえるならやっている事は同じだろう。

彼が店長になった時、僕は一度辞めようと思った。先輩が辞めてしまったのも理由のひとつだったが、彼女が店長になるとばかり思っていた僕は、王様気取りの彼がはじめた恐怖政治のような経営方針についていけなかったのだ。辞めなかったのは職場に仲間がいたからでも理不尽に負けたくなかったからでもなく、単純に生活がかつていたからだつた。金のためだ。

人の好き嫌いでその場所ごと逃げてしまふわけにはいかなかった。父のように母の粘着質に疲れ果てて別の女を棲家にして生きるような方法が、僕には出来なかっただけだ。僕ひとりなら身軽に出来る事がすべて、たったひとりの人間を背負っているだけで難しくなる。母はいつだって僕の重荷になっていく。

「俺は間違つてない」と、店長は毒づいた。「俺は正しいんだ」思ひ込もうとしているわけでもなく、本心から思っているらしかった。「お前にはずっと辞めてもらおうって思ってたんだよ。お前は生意気すぎるんだ、足立。全然店の役にも立てないくせに偉そうな態度ばかり取るからいけないんだ、どうせお前なんて前田の使い走りみたいなもんだろう。あいつと一緒に辞めればよかったんだ。そうすりゃあ、少しはマシだったんだよ」

いきなり、前田先輩の名前が出てきて少なからず動揺してしまっ

た。

前田先輩は店長とは正反対といってもいい意見の持ち主だった。店長のする事が独裁政治なら、前田先輩のは民主政治みたいに違っていた。どんな意見でも聞き入れましよう、という前田先輩の優しさが僕は好きだった。結果クレーマーを付け上がらせて辞めさせられたけれど、それでも尊敬できる人だと思っている。

そんな人を馬鹿にした店長に、自分を罵倒されるよりも苛立ちを覚えた。それははつきりとした怒りだった。

「気に入らないから辞めろって言うんですか」いろいろ御託をならべてもようするにそういう事だ、と分かっている。先輩のように「気に入らなくなつて人の意見は大事にしないとね」と言えるような人じゃないと分かつてはいたが、はじめて自分でうるたえるぐらい店長の事を失望したと思つた。

「辞める、じゃない。辞めさせてやる、だよ」と、律儀に言葉を訂正してくる。人差し指を突き刺してきた。「今回の客の事で上からどうなつたか報告をあげろって言われてるんだ。お前が接客しててよかったよ、客が忘れたものなんて俺にはどうでもいいからな。けどまあ、ひとりぐらい責任を取って辞めたとか言えば少しは見栄えがよくなるだろう？ 一応差、誠意つてやつ」

この人ほど、誠意つて言葉が似合わない人間はいるんだろうか。何か言おうとしたけれど、言葉がうまく出てこなかった。

この感じは、父親が家を出て行く時に似ていた。何を言っても無駄だろうと諦めきつた気持ちとそれでも何か言わないと取り返しがつかなくなるような不安感が心の中で渦を作つて体全部を重たくしていく。引き止める言葉を見つけれず言えなかったから、父親は出て行つて。店に居続けたい気持ちをまとめられず口に出せないまま、解雇されてしまう。

「言いたい事は言わないと伝わらないんだよ」と、先輩は心の中で僕に言うけれど。

黙りこんだのをどう判断したのかは分からないが、笑つた店長の

表情は勝ち誇っているようだった。

「シフトが決まってる今月いっぱいには仕方ないから店に置いといてやるよ。来月からは辞めてもらおう。それまでに新しい職場を探しとけ」高飛車なリズム、笑うのを堪えているような言い方で言って店長は自転車のサドルに乗った。足で地面を蹴って、走り出す。

途端、さっきよりも無性に腹が立ってきた。

前田先輩の事も、理不尽な解雇の話も、何も言えない僕自身も。おそらくは全部。ぐちゃぐちゃになって切り分けられなくなった、怒りだった。

正面きつて話している、ほとんど殴りつけれるみたいに言葉を投げつけられている時以上に、それは込み上げてきた。体が発熱していくように怒りが発火して、体の末端にまで達する。指先が痙攣を起こした、手にしているものを思い出した。

その遠ざかっていく背に、その傘の先を向けていた。

傘を持っている手が自然と動いた、としか言えない。見えない誰かが「傘の先をあの子の背中に向けなさい」とでも言ったみたいに、身体は僕が思うよりも先に動いていた。気づけば、包んでいたはずの新聞紙がなくなっていた。柄を離してしまったらこのまま夜のうちになくしてしまいそうなほどに黒い傘があるだけだった。新聞紙はどこにもない、落ちてもないし、風で吹き飛ばされたようでもない。まるで最初から傘に巻いていた新聞紙がなかったみたいに、消えていた。

けれど、そんな事はどうでもよかった。

自転車の軋む音が耳障りに響いている。地面にぶつかって何処か壊れたのかもしれない、危なっかしい音がゆっくりと遠ざかっていく。

傘が開いた。滑らかに広がる、広げようと手を伸ばしてもいないのにひとりでに開いていた。

夜の黒色はいつもよりも濃度を増して重たく、店長の背中はまだほとんど見えなくなっている。自転車の今にも壊れてしまいそうな

摩擦音だけが耳にまで届いていて、店長がまだそんなに遠くには言っていないのだと教えてくれる。

指先が震えていた。柄の部分に握り締めている手の爪が軽くぶつかる、小さく小刻みに乾いた音が鳴る。秒針の刻まれる音みたいに、カチカチ、と鳴る。

「あんななんて、」

声が落ちた。出そうと思って出たものではなく、思わず零れたような声だった。

「あんななんて、いなくなればいいのに」

心の底からそう願っていた。

その時、傘がぶるりと震えた、ような気がした。握っている掌に伝わってきた振動は、びしょ濡れの犬が身体を震わせて水気を飛ばすようなそんな感じのものだった。手の皮膚を抜けて骨にまで達して伝わる。

大振りの枝を力任せに真つ二つにしたような音がした。

歯車が軋んで止まる、瞬間に鳴る音が聞こえた。ひととき大きく長く響いて、止む。そうして聞こえなくなる。それが自転車の音だと気づくのにはしばらくかかった。前触れもなくいきなり、音が途絶えていた。

耳をそばだてる。歩き出していた。

次第に走り出して、車道にでたところで立ち止まった。背の高い街路灯が首を傾げて明かりを落としている、ぽつんぽつんと道路を照らしている。車も自転車も、何の音も聞こえなかった。自分の鼓動だけが鳴るたびに皮膚を押し上げる、何度も深呼吸をして落ち着かせようとしたが息苦しさが増すばかりだ。

単純に、興奮していた。顔中が熱くなつていく、熱が体中に伝染していく。

耳が拾うのは、僕自身の心臓の音だけ。あの、軋んだ音は全然聞こえない。

「ぼ、僕はやっぱり、」

喉が声をあげていた。自分が声をあげている、と感じるよりも先に声が耳に聞こえていた。震えている。喉が震えているのだと思っ
てから、違うのだと分かった。体全部が振動しているのだ、伝染して
いった熱があつちこつちでたために温度をあげて身体を震わせて
いる。高熱で悪寒が止まらなくなるみたい、自分の気持ちじゃど
うにもならない部分で、震えている。

でもこれは、悪寒ではなくて、

「僕は、僕はやっぱり、」両手を見る。「僕はやっぱり、出来る……？」

震えているのは、得体の知れない恐怖心でも戦きでもなくて、も
っと身近でもっと明確で 自覚してしまえば目をそらす事もでき
なくなるぐらいのちゃんとした輪郭を持っている、優越感じみた好
奇心のようでもある、こみ上げてくる衝動そのもののような痛快で
愉快で馬鹿げてもいる、そりゃあもうはつきりとした戸惑いの形を
した高笑いだった。

喜びに。興奮に、打ち震えている。

「……………僕は、……………出来るんだ」

確認するように呟く。自分の耳に聞こえてきた自分自身の声に、
その通りだ、と何度も頷いた。

消えてほしいと思ったものを、消す事が出来る。事故のように、
猫の糞みたいに消す事が、やはり出来るのだ。

だとしたらひとつだけ、納得できない事がある。震えがゆっくり
と治まっていく速度で、僕は率直な疑問を口に出していた。

「なら、あの時、居間にいた母さんを消す事が出来なかったのは？」
消えろ、と思ったのに嘘はなかった。今の店長の時よりもはつき
りと強い意志で、思っていた。殺意ですらあったかもしれないのに、
あの人は消えなかった。

それはどうしてか、

答えは直感めいた速度で、彗星のように頭の中に落ちてきて衝撃
に変わった。

脳震盪を起こしたみたいに足元がぐらついた、ような気がする。事実よろけてしまったかもしれない。衝撃に麻痺しかかっている頭の中で、「傘を返してくれるなら誰にもいいません」と言った、彼の顔を思い出す。

嫌なクレーマーだと言われていたのに、ごく普通の穏やかな客だった人。

おかしい、と思った。その僕の場合は間違っではないなかったのか。傘。視線をおろして、傘を見る。そう、この傘だ。

一度目の事故の時も、二度目の猫の糞の時も、この傘を持っていた。けれど、母さんの時は持っていなかった。

そうして今回の、店長の時も持っていた。この傘を持っているときに、「消えてしまえ」と思ったものが消えている。どういう仕組みかは分からないけれど、消えたのは確かだ。この傘にはそういう力がある。そして彼が、「傘を返してくれるなら誰にも言わない」と言ったのはきっとこのせいなのだろう。下手に文句や苦情を言うと啖呵を切れば、僕だって簡単には認めなかった。あくまで寛大に傘の返却だけを言ってきたのは、確実に傘が返ってくるようにしたかったから。

この傘の正体を知っているから、あの客は本店にまで電話をかけて脅しまがいのことを言ったのに、ここでは簡単に引き下がったんだ。

あの客の一貫性のない言動は全部、この傘を取り返すためだったんだ。

気づけばしつかりと、柄を握り締めていた。

傘の事を理解したのと同時に、僕はまだこの傘を手放せないと思ったのだ。この傘を使って消したいと思うものを消せるなら僕には消したいものがある、消して取り返したいものがあるのだ。僕自身の人生とか生き方とか、母親に抑圧されたままの今から解放されたい。

僕はこの傘を、彼に返すわけにはいかない。

「足立さん？」

一番最悪のタイミングだっただろう。

後ろからかけられた声は、昼間の客の、笠倉さんのものだった。怪訝そうな声をしている。ここで何かが起こったのはなんとなく理解できるけれど、はつきりとは分からないといった感じの戸惑った声音が、瞬間、僕に決断させていた。

彼が捜していた傘は、まだ僕の手の中にあつた。僕の手が握っていて、彼の手の中にはない。

どの道、予行練習は必要なのだ。この傘に本当に、そんな力があるのか。消えてほしいものを消せる、まるで御伽噺みたいな超能力があるのか確認しなくてはいけない。確実に言える事は、この傘にそんな力があってもなくても、彼に渡してしまえばもう調べられないから手遅れだという事と、力があつたなら当然彼も知っているはずだという事だ。

ようするに、本物なら、本当にこの傘にこんな力があるのなら、返さない態度を見せた時点で彼は気づくかもしれない。僕が傘の価値に気づいて返したなくなつたのだと察したら、彼も平穩に話を終わらせようとはしなくなるだろう。

けれど、彼はまだ気づいていないはずだ。だから話しかけてきたけれど、僕の手の中には傘がある。

僕はまだ、この傘をなくしたくなかつた。

「足立さん」声をかけても振り返らない僕に焦れたのか、強い口調で彼は言う。

柄を一度強く握りなおした。人を殺そうと決意して包丁の柄を両手で握つたような気持ちには、不思議とならなかつた。消えるって事と死ぬという意味が一緒かどうか分からなかつたせいかもしれない。一回だけ深呼吸をする。

吸って吐き出して、肺の中にある酸素を全部出し切つたところで振り返り、

傘の先を、突きつけた。

目を見開く、よりも先に肩が強張る。のを、見た。思うよりも早く、僕は笑っていた。

思っていた通りだ。考えていた通りだった。分かりやすい怯えだった。傘の先を向けられたのではなくて、ぎらついた包丁の先とか黒光りする銃口とか、死に直結するものを突きつけられたように、彼は怯んだ。体が震えた。後退った彼こそが証明なのだ、この力の証明だ。

「お願いです」と、僕は口にする。言いながら、お願い、というのも変な感じだと思った。嫌だと向こうが首を振っても僕はするのだろくに、僕の中じゃこれはお願いしているつもりなのだ。「お願いです。消えてください」いなくなってくれ、どこかに行ってくれ。まるでそんなニュアンスの言葉を言っているみたいだった、僕自身が驚くぐらいに僕の言った言葉は優しさの一片もなくて、当然のように冷たい。

死んでください、というのとどこが違うんだろうかと頭の隅のほうで考える。

東條からの召喚

……ぐしゃり、と音がするだろう。それは咀嚼する音だ。

頭から足の先まで口の中に放り込んで、歯で細かくしてから嚥下する。その手前の、奥歯で骨を噛み砕こうとする音と、力。まさしくそんな表現が妥当な、神経も骨も筋肉も一緒くたにない交ぜに引きちぎられる、圧搾機じみた力の作用が働いた。か弱い人間の知恵や力じゃ、どう足掻いたって逃げおおせない、恐ろしく圧倒的で獰猛な捕食者の頭が人一人を食い殺して食い尽くす。

後には何も残らない、血ひとつこぼさない。記憶も思い出も噛み砕いて飲み干して、貪欲に獲物を平らげる。　、はずだった。

少なくとも、その傘にはそれだけの獰猛さと貪欲さがあるはずだった。

笠倉陽葉は文字通り消えるはずだった、のだろう。足立だけでなく陽葉本人さえ、その一瞬を覚悟して身構えたはずだ。

空間を見えない頭が食んだ。空間そのものを咀嚼して飲み干すように雨に濡れる夜の空気が歪んで軋み、くしゃりと丸まってすり潰されて消滅した。傘に喰われて嚥下されて消え失せる。今まさに喰われた空間のように噛みつかれ、殺される。それは陽葉自身が行ってきた数多くの「喰らう」と同じで、逃げようもなく容赦のない終わりだった。

陽葉は、思わず息を止めて、目を閉じる。

それだけの所作の間に食い殺されているだろうと、知っていた。ただ、死ぬのではなく終わる、というのが痛みを伴うものかどうかなど知るはずもなかったから、眼を閉じた瞬間に終わっていてその事に気づけないんじゃないか、とどうでもいい事を思った。限りなく逃避に近かった。けれど、そう思った直後で、俺が殺してきた人達は今俺が感じているような死と終わりの区別も分からないまま文字通り終わってしまったのだな、と反芻する。

最後に手にかけた、あの上村正紀のふてぶてしい顔が脳裏に過ぎ
った。

今はもう、誰からも忘れられてしまった男の事を思い出すと、詰
めていた呼吸の一部分が漏れて言葉になった。

ため息そのもののような声で、「俺は酷い事をしてきた」と消え
入りそうに地面に落下する。

それが空気をいっぱいに入れたゴムボールのように地面で跳ねて
陽葉自身の耳に入り込んだ時、駆け出す足音が一緒に聞こえた。と
同時に、陽葉は瞼を上げた。遮蔽物を取り除かれた眼球がタイムラ
グもなく、走って遠ざかっていく足立の背中を捉える。傘を広げた
ままなにふり構わないといった様子で、ダイナマイトを敵へお見舞
いしてやろうと思っていたら火薬が湿気っていて使い物にならずに
結局敵前逃亡を図る敗残兵のようでもあった。

陽葉は即座に駆け出そうとした。等間隔に路上を照らす街路灯に
照らされる彼が夜目でも見えるうちに後を追わなければいけない。

ズボンのポケットに押し込んでいた携帯電話が鳴ったのは、最初
の一步目の足を踏み出した瞬間だった。運動会のピストルの軽快な
音と比べたら愛想のない着信音がバイブレーション機能と一緒に人
気が遠ざかっていく路上で鳴り出す。二歩目は自然とたたらを踏む
ような格好になっていた、三歩目で完全に立ち止まってしまつて前
を見ると、もう足立の姿は足音も一緒に消えていた。

携帯電話はポケットの中で這い回るような心地の悪さで振動して
いる。

仕方なくポケットから引つ張り出して、通話ボタンを押した。耳
に当てて、「はい。笠倉です」と言う。無愛想な言い方になった。

『……、酷い声』と、華子は呟いた。指摘する本人の声のほうに愛
想がなさ過ぎるが、しかしこれはいつもの事だ。『声を聞く限りだ
と傘を取り戻すのは失敗したようですね、それとも食べるのに失敗
しましたか?』終わりの問いかけは彼女なりの冗談だったかもしれ
ないが、全然そんな風には聞こえなかった。悪気はないのだろうけ

ど、それを察してやる気持ちにまではならない。

「電話のタイミングが悪すぎる」悪態をついてから、陽葉は再び視線を路上の先へと投げた。戻ってくるわけもないのに、足立青年が走り去っていった先を見つめて目を細める。

『だったら無視をすればよかったのに』

「バイブレーションにしてたから振動させながら走るのは気持ち悪い」実も蓋もない華子の言葉に客観的事実のような他人事の言い方を返してから、「それで？ 華子が俺の携帯に電話をよこすなんてどうしたんだ？ 芳川さんに何かあったのか？」同じ口調で訊ねたつもりだったけれど、芳川という単語だけは意識しなくても心配げに震えてしまっていた。傘と芳川だったら、芳川のほうが大事。自分の気持ちそのままの言い方だ。

『別に何もありません。容態は安定していますし、取り立てて急を要することは芳川の件ではなにも』

「もう少し嬉しそうに言ってもいいと思う」

『それでも喜んでいます』心外だ、とばかりの言い方にも聞こえるけれどもはじめて華子の声を聞く誰かがいたら、ただ薄情にしか感じないだろう。『死なないでいることはいい事です』

「華子が言つと全然喜んでるように聞こえない」実際華子がどのぐらい喜んでいいのかは分からなかった。もし芳川が死んでしまつても、車に轢かれて病院の手術室で息を引き取るのだからその事自体が幸福じゃないか、と言い出しそうな予感もあった。そういった意味じゃ、華子は死ぬ事と終わる事の差異をきちんと理解しているのだろう。さつき死ぬ事と終わる事の違いを見つけられなかった自分とは違う。

『もうひとつ話があるの』と、華子は続けた。こっちが本命といった調子の声だった。『東條が貴方と呼んでいます』

面食らった。「俺を？」声も上擦る。「どうして？」傘の事がばれたかな、と疑問符をいっぱいならべた声を出しながら思った。

『東條が笠倉に威圧的なのはいつもの事ですけど』私は何も話して

いませんから、と言葉の端に付け加えて華子は言う。『この間の一件、まだ東條に報告に行っていないのでしょうか？ 自分を除く家族全員を皆殺しにした死刑囚の』宿題を忘れてきた生徒をたしなめる教師のような言い方をした。

陽葉は、ついさつき脳裏をよぎったばかりの男の顔を今度は自分から思い出した。列挙された罪状に恐れおののく様子も悔いることもなく、「それがどうした？」と日常会話のように訊ねてきた男の、ありきたりな表情だった。ついでにあの男も味わったかもしれない、消えてしまう瞬間の得体の知れない恐怖も思い出して、体が耐え切れずに小さく震えた。

「そういえば、まだだな」奥歯を噛んで、声だけは平坦に押し出す。『東條は笠倉を信用していないのはご存知でしょうに』ひっそりと華子はため息をついた。電話の向こうで人形のように整った眉の端をつりあげる、そんな顔を想像する。どうやらこっちの動揺は伝わらなかったらしい、すこしだけほっと肩の力を抜いた。

「芳川さんの一件で報告なんてすっかり頭の中から抜けてた」正直に白状する。「東條もわざわざ華子に連絡して俺を呼び出すなんてな。そんな回りくどいことをしなくたって、直接笠倉に連絡をよこせばいいのに」

『暢気な貴方と違って、東條は笠倉の關係にいつも危機感を覚えています。無償の信賴だけで關係が成立していないのだから、仲介者を入れるのは仕方のない事じゃありませんか？』

「華子はどっちの味方だ？」取り付く島もない彼女の言い方に、質問なのか愚痴なのか半々ぐらいの言葉を投げた。電話口から返ってきたのは、さっきのため息よりも幾分呆れや同情が混じったもので、途方もなく馬鹿で可哀想なものでも見ているように長々と吐き出される。これみをがしな嘆息だった。『敵とか味方とか、単純な括りで陣取りして納得しようとするのは陽葉の悪い癖です。私達の敵はひとつ、他は味方が中立かの違いだけでしょう』

「嘘でも、俺の味方だとか言っただけでよかったよ」

『敵でないのは確かですから。東條も、別に貴方の敵というわけではありません』

睨みを利かせている、とだけ思えば確かにその通りだ。敵ではないが信用もされていない、というのが現状だろう。

互いの家の存在理由と価値観が違えば、いがみ合うのも無理のない事だった。相対する敵は同じでも、その敵にどう対応していくかで人の評価が変わっていくのと似たようなものだ。有無を言わず殲滅するか、利用できる部分は残して不必要な部分だけをそぎ落としていくか。前者は無慈悲とか冷酷だと言われるだろうし、そんな彼らからすれば後者の方法は生温くもありずる賢くもあるだろう。「……分かった。すぐに東條の家に行くよ」狡猾な笠倉の後継者が仕事を終えたのに連絡にこない、と、東條の中では大騒ぎにでもなっているのだろうか。半ば笠倉の家の中でもよそ者の位置に近い陽葉にすれば、いちいち外の家の陰口にまで付き合ってられない。しかし放っておくことが出来ないのも確かで、嘆息する。「すぐに行かないと、どうして来なかったんだって嫌味を言われそうだしな」それに、詮索されればされるだけ、傘の事がばれる可能性も高くなるから仕方ない。

『よくお分かりで。でも、清夷きよいも貴方の行動に口を出すのは貴方に早く笠倉としての自覚が芽生えてほしいと思っているからですよ』

「分かっているよ」重々自覚しています、と陽葉は言いながら頷いた。『分かっているても行動に移せないのも、貴方の悪い癖ですね』

「……それも分かっているよ」

それがますます頭の痛いところなのだ、とは喉まで出かけてなんとか押しとどめるのに成功する。

ある犠牲者？

走っていた。

あ、消えていない。と判断した瞬間から走り出した。てつきり追いかけてくると思っていたけれど後ろから足音が迫ってくる様子はない、このあたりは近道になるような道路もほとんどないので、どうやら逃げ切ることに成功ようだった。ほっと息をつきながら走る速度を落とす、それでも完全に立ち止まらずにジョギングぐらいの速さで走り続けた。

街路灯がまばらに並んでいた車道から細い路地に入る。

傘は右手でしっかり握っていた。

でも、と、僕は顔をしかめた。成功すると思ったのに失敗した。

これはいける、と確信していた数学の文章題の方程式が理由も分からないまま間違っていたような気分だった。

一度目に失敗した母さんの時はやっぱり超能力なんて気のせいだ、と思ったけれど、今度は超能力がないとは思わなかった。三度も起こった事を全部気のせいだと考えるほうが不自然だったし、何より交通事故や猫の糞の時とは違って店長の時は、目をそらしていない。夜目ではあったけれど、店長は確かに消えた。車道に出て確認したのだから間違いない。自転車の今にも壊れそうな音が突然消えたのは、自転車他突然直ってスムーズに走るようになったからと考えるよりは、店長と一緒に消えたんだと思うほうが正しいような気がした。

消えてほしいと願って、消えた。

交通事故の時はどうして僕が死ななくちゃいけないんだと思って、猫の糞の時は人の家の玄関先で糞尿を垂れ流す動物に嫌気がさしていた。どっちを思い出しても胸がむかついて苛々する、そうか、と目を丸くした。立ち止まると自分の足音も聞こえなくなって、あたりは急に静かになる。まばらに家はあるけれど、もうあと少しで

明日になる時間帯だから明かりが漏れている家もなかった。急に立ち止まって弾む息を深呼吸して抑えながら僕は、「そうか」と声を出した。

「そうか、怒りだ」と、最後のヒントを埋めてようやくクロスワードを完成させた気分になる。

思わず笑い出しそうになってから、自分の声が静かな路地に反響しているのに気づいて息ごと言葉を飲み込んだ。それでも、くつくつと喉が鳴る。あまりいい笑い方じゃなかった。聞きながら、悪党っぽい笑い方だと思った。

傘と、感情。腹立たしさとか悔しさとか、大まかに括れば怒りに分類される気持ちだが、この超能力には必要なだろう。どうして僕が事故で死ななければいけないんだと思ったときは文字通りこの世の全部を呪っていたし、猫の糞の時は全然後片付けもしなければ謝りにも来ない飼い主に腹を立てていた。けれど、さつき失敗した彼の時は、僕は何も怒っていない。あつた感情といえば、義務感みたいなものだけだった。彼が消えなければ傘を取られる、取られたら僕は僕を解放出来ない。母さんを消せない。

僕は僕を救いたくて、彼を消そうとしたのだ。

その感情が本当に失敗の原因なら、この超能力も最初に感激した時に感じたよりは役に立たないものなのかもしれない。持っていても役に立たない晴れた日の雨傘みたいなものだろう、かさばるだけで得をすることは何もないのだ。

傘を見下ろして、少し考える。力を手に入れた、と我を忘れる熱が冷めた頭で事態をめぐらせた。

「だったら、」笑いが終わった後で落ちた一言は、僕自身も驚くぐらいに冷静に聞こえた。「だったら、大丈夫だ」

必要な事だけ、やりたい事だけ並べる。別にこの世界にいる人間すべてを消してやりたいとか、自分の人生の前を歩く人間すべてを葬ってやりたいとか、僕は思っているわけじゃなかった。独裁者になるつもりはないし、無闇に人を傷つける気もないのだ。僕は僕と

して、僕自身が僕だけに責任を持つて生きられるような人生がほしただけで、そのために僕の人生を束縛する母親を僕の人生から取り除きたいけなのだから、怒りをわざわざ探し出さなくなつていい。消すために相手に対して怒りを覚えるように仕向けなくなつて、僕の中にはもう怒りがある。僕が消したいと思うのは、最初から僕の心の中で前準備が整っている相手だけなのだ。

だから大丈夫。と、心の中で自分をなだめて家へと歩き出す。

頭の中では、どうやって母さんを消そうか計画が何度も考えては書き直していた。きつと今の時間じゃ布団の中で眠っているだろう、包丁で刺すとか首を絞めるのとは違つてこの消すという方法がどのくらい痛いのかいまいち分からないけれど、眠っている間に死んでしまふのは楽な死に方かもしれない。睡眠薬を飲んでから密室で七輪を炊いて一酸化炭素中毒で死んでしまふのと似たようなものだろうから。

苦しませて殺してやりたいと思うほどの気持ちはなかったから、それでいいと思うけれど、一方で「本当にそれでいいのか？」と首を傾げている僕がいるのも事実だった。殺し方の話ではなくて、小さな確認事項のような疑問だった。

消えてもらふのは、あの人だけでいいのか？

母さんが父に寄りかかつて、それが苦痛になつて父さんは他所に女の人を作つて逃げ出した。父を追いつ込んだのは言うまでもなく母さんだろうけど、足立家を崩壊させたのは間違いなく父だろう。

父さんの事は、知らず知らず目をそらしてきた部分がある。

僕の人生を狂わせたのは誰だろう。と、ふと思った。両親がまだ家にいて他愛ないことで笑い合つていたところは、ふたりが笑つてくれるのが嬉しくて遊ぶのも我慢して塾に行つて勉強して名前の知れた進学校に合格までしたのに、父がいなくなつた途端、その学校に通っている価値はなくなつてしまった。履歴書に学歴を書くときだって、僕は今までの人生のほとんどを費やした学校の名前の横に中退と書かなくてはいけなくて、店の面接の時にも「中退してるん

だね」と輕蔑の目で見られた。そんな歳で後先考えずに学校を辞めて人生を舐めてる餓鬼だ、と顔に書いてあった。

父が母に我慢しながらでも女を作らずに家にいてくれたら、僕は学校を辞めずに済んだだろうか。

それは母だけの問題だったんだろうか。

「悪いのは、別に」口に出して、確認するようにつぶやいてみた。声に出してみることで自分の耳で自分の意思表示を聞いてみよう、という気持ちもあった。「母さんだけってわけじゃない」

意外だったのは、今までそんな事を考えた事がなかった事のほうかもしれない。

口に出すとそれは存外ちゃんと理路整然とした意見に感じられたけど、今までの僕にしてみれば父はいつだって酷い人ではあったけど絶対的な批難の対象ではなかったからだ。僕は今、父親の代わりをしている。だからきつと父さんも家を出て行く前はこんな思いを続けて、きつと耐え切れなくなってしまうんだな、と理解できた。束縛に苦しんで嫌気がさして、逃げ出した。それはこれから母さんを消しに行こうとか思っている僕の中にあるものと同じだろう、と分かっていた。

「自由にしてくれ」たったそれだけの、願いが込められている。

父を批難する事は今から僕がしようとしている事も否定する事になるんだぞ、と思った。今まであからさまに父を批難してこなかったのは父の追い詰められた心境を理解できたからもあるのだろうけど、なにより僕もいつか父みたいになるんじゃないかという予感があったせいかもしれない。ずっと、いつまでも、母を愛していられるわけでも、養っていけるわけでもない。捧げてきたものをいつか取り返したくなる、逃げたしたくなる。父親みたいになる自覚があったからだ。

家の近くの辻を曲がると、僕は立ち止まった。家の垣根に寄せて車が一台止まっていたからだ。暗くても目立つ白い乗用車は傷ひとつなく綺麗に磨かれていて、眺めているだけで乗っている人間の愛

着が伝わってくるようだった。父の車だ、とすぐに分かる。

車一台が通るのもやっとな路上に軽乗用車でもない車を停車しているのに向かいの家の壁に背中をこすりつけるように隙間をすり抜ける。通る時、ちらりとだけ助手席の窓から人が見えた。シャツなのかワンピースなのかは分からないけれど、白い服が明かりのない車内でほのかに発光しているように映った。それが僅かに身じろぎして、僕が隙間を抜けてから扉が開く。

高校生一人がなんとか通り抜けられる幅ぎりぎりまで扉を開けて、なかば身体をくねらせるように彼女は出てきた。白い服は無地のワイシャツで、膝丈程度の藍色のタイトスカートをはいている格好は、どこかの大手企業の社長秘書のような凛々しさがあつて新入社員のような初々しさも滲んでいる。綺麗だ、と何のお世辞も必要なくいえる。「正人君？」と、彼女は口を開いた。相変わらず綺麗な声だと思つた。

「美空さん」父の車なので彼女が乗っていても全然おかしくはなかった。が、彼女が僕の家の前にいる事が驚きで、つつい声が上擦る。不倫している女性が本妻のいる家の前に停まっている不倫相手の車に乗っている、なんて、何かが起こっているのだと察するには十分な人物だった。

「驚いた。てつきり家にいると思つてたから」美空さんは言葉通り目を丸くした。

「俺のほうこそ、その、驚きました」

「あ、そうよね」納得したように美空さんは頷いてから、「驚くのは正人君のほうよね。私は押しかけてきたわけだから。……もしかして、アルバイトの帰り？」なんでもないことを聞くように訊ねてきた。あくまで見た目だけ、さりげない仕草や態度は僕がこんな時間までどこに行っていたのか興味があるのか落ち着かずにそわそわしている。

持っている傘を体の後ろに隠した。「ええ、まあそんなところで」嘘をつく。

「アルバイトしてるって本当だったんだ」

「いろいろと、ありますから」

父さんが貴方のところに行ってから生活費も入ってこなくなりましたから、とはさすがに言えなかった。それは不倫相手の美空さんの問題というよりも、一応は戸籍上の家族である僕達を捨てた父さんの責任だと思えたからだ。ふたつの家庭を養うほど経済力がなかったにしても、足立家に一銭の金も入れなくなったのはそれ相応の父の意思なのだろう。

文句を言うなら父さんに。僕はそう思っ言葉で言葉を濁したけれど、美空さんはそうは思わなかったらしい。「……私のせい、なのかな」ぽつりと呟いた。腹部のあたりで両手をゆるく繋ぐ。

「どうでしょう」

「正人君は私のこと、憎んでるでしょう？」

「それ、結構難しい質問だと思いますよ」実際、憎んでいる？ という言葉が場違いに感じられたから仕方なかった。

昼間の愛憎入り混じったどろどろのメロドラマのようななら、憎んでいる、という言葉も随分と様になりそうな気がしたけれど、現実じゃそこまではつきりとした感情を抱えない。美空さんの事を憎んでいるか、と自問自答すれば、「まあそういう気持ちもあるかもしれないません」というところだった。小説や漫画でありがちな、こいつを殺さなければ自分は呼吸も出来ない、とまで思い詰めてはいない。そこまで追い込まれていたら、そもそもこんなに穏やかには喋ってられないだろうから、証明できる。

美空さんが目を瞬かせた。照明らしい明かりはないのに、目がほのかに輝いたような気がした。「本当に？」

その言い方に、なんとも表現しにくい媚のようなものを感じた。といつても、女が男に縋るようなものではなくて、どちらかといえば教師が生徒に対してする自慢話のような、就職活動中の生徒が面接官に対して作り笑いするような、そんな感じのものだった。自分をよりよく評価してもらおうとしているような、健気といえば健気

ともいえる物言いがひっかかる。

そういえばどうして彼女がここにいるのか聞いていなかったのを、思い出した。

「でもどうして、こんなところにいるんですか？」

「足立さんについてきたの」と、彼女は応えた。それ以上もそれ以下もない、簡単な答えだった。

「父さんに？」 どうして？ と聞き返したつもりはなかったけれど、彼女にはそんな風に聞こえたらしい。美空さんは少し困ったような顔をして黙り込みながら、へそのあたりで絡めている両手の指を強く寄り合わせた。なにかを護るような優しい仕草だ。

あ、と思ったのが、きつと顔に出たのだろう。

僕が思わず聞いてしまう前に、まるで先手を打つような速さと不本意さで美空さんは口を開いた。

「結婚することにしたの」

それを、どうして？ と聞く必要はなかった。けれど、おめでとうございます、と言えるような気持ちでもなかった。

ああこの時がやっぱりきたんだな、と当たらなくてもいい予感が当たったのにうんざりする気持ちと、母さんはやっぱり見捨てられるんだな、と多少はどうでもいい奇跡を信じていた自分に対する呆れみたいなものがない交ぜになっていた。

自分でも間抜けな顔をしていると分かっている。きつときよんとした目をして口を半分ぐらい開けている僕の顔はおかしいだろう、でも美空さんは笑う素振りも見せないで僕の顔をじつと見つめていた。嘘を少しでも見破ろうと躍起になっているのではなくて、見えにくい深い水の底をなんとか見ようとしているみたいな、僕の心の中を覗き込もうと眼を凝らしているようだった。

さっきの媚の理由が分かって、僕は少しはすっきりした気持ちで口を開く。

「父さんがそう決めたんですか？」

美空さんは俯くみたいに頷いた。「私生児は可哀想だから、って」

それじゃあ、捨てられる事になる僕はどうなるんですか。と、喉まで出かかってなんとか飲み込んだ。

ここでそれを聞いても美空さんへの八つ当たりにしかならなかったし、子どもが出来るといいう戸籍上の問題を経てようやく父が母と向き合おうとしているのが、らしいといえはらしかったからだ。別居して一年が経つのにそんな素振りが一度もなかったのは、穩便に済ませられるならそれはそれで、と父が思っていたからだろう。形式上の夫婦というものにさほどの必要性も感じてなかったが、子供が生まれる以上はきちんと書類上の整理をしておこうと思つての行動に違いなかった。

「あの人がね」美空さんは慎重に父の名前を口に出すのを避けているみたいだった。遠慮がちともいえるその言葉遣いは逆に鼻につくぐらい勝ち誇つてもみえた。「正人君を引き取りたいって言うてるの」

「え？」言葉の意味が分からなかった。

思わず、美空さんを見る。どういふことですか？ と訊ねる前に彼女が口を開いた。

「正人君が学校を辞めたの、あの人知らなかったのよ。自分が出て行つても、その、奥さんがちゃんと正人君を育ててくれるだろうって思つていたらしいの。いざとなつたら生活保護もあるし奨学金もあるから、まさか正人君が学校を辞めて働かなくちゃいけないなんて想像もしてなかったって。だからね、本当に申し訳ないつて思つてるのよ、あの人。だから、正人君を引き取りたいって言うてるの」

父がどんな表情をしてそんな事を美空さんに言つたのか思い浮かべた。

きつと眉をひそめて困り果てた顔をしていたのだろう。不倫相手の、しかも自分の子どもを妊娠している美空さんに「正人を引き取りたいんだ」と相談する様子を想像して、なんとも居心地が悪くなかった。生まれてくる子供のために、程よく距離を保っていた妻と

の関係を解消しようとして、一方でその妻との間に生まれた子供の将来を案じている。

「美空さんはそれでいいんですか」僕と一緒にでもいいんですかと聞いた。

難しい質問だったのだろう。美空さんは、「そうね」と相打ちを先に打ってから、「……あの人が心配する気持ちも分かるから」曖昧な言葉を続けた。苦々しそうで淋しげな、そんな言い方だったので、きっとこの人の心中もこの言葉通りなのだろう。曖昧で見え辛い、拒否とも肯定ともつかない間をふらふらしているような感じだ。このあたりは父と似ているのかもしれない、と思った。

母と父はどちらかといえば、母が勝手に決めたことに父が後から従うといった感じだった。二人が同じ問題にぶち当たって一緒に頭を抱えて悩む姿を僕は見た事がない、父はいつだって母に主導権を握られているような人だ。

美空さんとなら一緒に人生を決めていける、と父は思ったのだろうか。

「子供のことを心配するのは、親として当然でしょ」と、美空さんは言った。

これは嘘だな、とすぐに分かる。美空さんがその言葉を投げ所にして自分の気持ちをひた隠しにしているのは、直感的に理解できた。と、家のほうから大きな物音が聞こえてきて、僕と美空さんは玄関のほうに同時に目をやった。響き渡ったのは、投げられた物が壁にぶつかって粉々に砕けて床に落ちるような、そんな音だった。ヒステリックな音だ。普通に生活していたら出す事もないような、甲高い人の叫び声のようなものだった。

美空さんが不安そうに顔をしかめた。「正志さん？」と、父の名前を呟く。玄関のほうへと歩き出そうとする。

「待ってください。美空さん」引き止めたのは無意識だった。手を伸ばして、美空さんの肩を掴んでいた。振り返った彼女に、「美空さんが行くのは危ないですよ。父さんと母さんが離婚話してるなら

余計、美空さんは当事者な訳ですから。僕が見てきますから、美空さんはここで待っていてください」紳士的な事を言つて玄関から家に入った。

玄関の扉を閉めてから、本当は違ふんだろうな、と自分の心情を分析してみる。美空さんと母さんが会うのが危ないのは確かで、だからこそ父さんは美空さんを車に残したんだろうけれど、僕が美空さんを外に残した理由はあの人の身の安全がすべてじゃなかった。単純にこの家に入つてほしくない、と思つたのだ。もう壊れてしまつた家族ではあるけど、父さんがいて母さんがいて僕がいる、その中に美空さんが入つてくるのはルール違反のような気がした。

僕達はまだ、戸籍上は家族じゃないか。

廊下はとても暗かつた。廊下の先にある、居間に続いている扉から明かりが漏れているだけだ。人の気配はその先にあつた、話し声が途切れ途切れに聞こえてきては時たま激昂したように甲高くなる。「ふざけないで!」「貴方は卑怯よ!」相手を批難する声は金切り声で、分かりやすく母親の声だつた。閉まっているその扉にそりと近づいていく、足音を忍ばせる必要なんてないのに慎重に足を進ませた。次第に父の声も聞こえてくる、声を荒げる母とは違つて父のそれはいたつて冷静で、だから余計に突き放しているように感じられた。

「正人の事を考えるんだ。どこもかしこも不景氣だつていうのに、高校中退で雇つてくれる会社なんてないんだぞ。君は正人にちゃんとした教育を受けさせたいって言つていたじゃないか。だから受験までしたのに、どうして今、正人は学校を辞めてアルバイトなんてしているんだ? 君一人に正人を育てられる力がないからだろう?」

「貴方が出て行つたからでしょう!」

また、何か割れる音がした。「貴方が私達を置いて出て行つたからでしょう? 貴方がいけないんでしょう、正人が学校を辞めなくちゃいけなくなつたのも、貴方が家にお金を入れてくれなくなつた

からじゃない」泣き叫びわめきたてる、母の声が響く。

「離婚にに応じてくれたら養育費は払うって言っていただろう」と、父の声。僕は目を丸くした。そんな話は初耳だった、僕の中では父は一回も離婚を切り出さずに美空さんのところへ行った事になっている。養育費、なんてはじめて聞く単語みたいに意外だった。「なのに君は応じなかったじゃないか。それで正人が学校を辞めざるおえなかったんだから、君のせいだろう」

「……どうして別れなくちゃいけないの？」私には貴方たちしかないのよ、と言葉は続きかけた。断ち切るように父はため息をついていた、聞きたくないばかりにわざと嘆息してみせたのだと、これ見よがしなタイミングだった。

「他に結婚したい人が出来たんだ」

質問への解答は明確だった、聞き間違いがないように一番母を傷つける言葉を選んだと勘ぐってしまっただけ遠慮のない言い方だ。

突発的になぐり捨てたようなわめき声が響き渡るかと思ったけれど、父の声の後に出来上がったのは小さな沈黙だった。絶句、だったのかもしれない。

「美空さん？」しばらくしてから、乾いた母の声が聞こえた。うめき声みたいだった。「美空さん、なの？」

「そうだよ」

「どうして結婚したいの？」

「彼女に子供が出来たんだ。父親がいるのに私生児にするわけにはいかないだろう？」

理解できるだろう？ と訊ねているような言い方だった。分かってもらうのは当然だと思っているようでもある。

扉の前まで来て、僕は立ち止まってしまった。どうしてそんな事を母に聞くんだろうと思った。父は冷静に話を進めているはずなのに、おかしい部分で何かを勘違いしている。母さんから逃げ出したかと思っているくせに、どこかで理解してほしいと望んでいるみたいだった。円満に終わりたいと思っているのだ。

会話が途切れたのが分かって、扉を開けた。

いきなり開いた扉から僕が出てくるとはふたりとも思っていなかったようで、どっちも僕のほうを向いてから、父さんは大袈裟に、母さんは母さんなりのリアクションで目を丸くした。そうしてから驚いた表情を先に崩したのは父さんのほうで、「正人、ちょうどよかった」と笑いかけてくる。意外な場所から味方が現れたのを喜ぶような、そんな感じの笑顔だった。

「待つて」と、母さんは喉を尖らせる。僕とふたりっきりの時は全然起伏のなかった表情に苛立ちを垣間見せて、「正人まで巻き込むの」と父さんを睨んだ。

「巻き込むも何も、僕達が離婚したら正人にもいろいろと迷惑はかかるだろう」今の状態でも十分迷惑をかけているのに気づいていないとしか思えないような、白けた物言いをして父は首を横に振った。仕草が年齢よりも子供っぽく感じられる。見れば着ている服も家にいた頃の、いかにも中年のたるんだビール腹の親父みたいなおしゃれなんて言葉自体を忘れてしまった地味なものではなくて、柔らかいパステルカラーのシャツと黒い木地のパンツだった。一目見て、美空さんが選んだな、と分かる。中年の老いよりも、まだまだ活動的な若さを感じる服装だ。

父は美空さんのものになったのだと、それだけ見ても理解できた。「正人、父さんたち離婚する事になりそうだ」と言う父さんの言葉には深刻さがまるでなかった。

「私は頷いていないわ」

「一年も別居していたらもう離婚しているのも同然だろう」聞く耳持たずといった感じで言うと、父さんは僕に向き直った。

母さんが何を言おうがうまくあしらえると高を括っているみたいだった、そんな感じの父を見るのは初めてで少なからず驚いていた。母のわがままに応じるか逃げ出すくらいいしかしい人が、いまこの部屋で主導権を握っているのだ。

「それで、どうする。正人。お前はまだ未成年だから、僕か彼女か、

「彼女、の部分でちらりと母を一瞥する。「保護者が必要だろう？」

保護者、という言葉を久し振りに聞いたような気がした。学校を中退してしまうと、途端にその言葉から縁遠くなってしまったからだ。まだ未成年だから、と言われるのも心外だと思う気持ち半分面食らった感じ半分といったところだった。なにを今更、と噴きだしかけた。美空さんに、父さんが僕を引き取りたがっていると言われた時よりもはつきりと、感じているのは呆れだ。

「僕は、もう働いているから」保護者なんて、今更いらない。

父は眉をひそめた。「正人がアルバイトをしているのは知っているよ。でも、アルバイトっていうのはちゃんとした仕事じゃないんだ。働いている事にはならないんだよ」物分りの悪い子供をいさめるみたいな言い方だった。「働くっていうのは、しっかりとした雇用関係で成り立つものなんだ。そのためにはまずちゃんと学校を卒業しなくちゃいけない、正人はちゃんと高校を卒業しないと一生不利のままなんだよ」

聞いててあまり感じのいい喋り方ではなかった。素直に頷こうと思うよりも反発心のほうが先に疼いた。

「僕がどうしてアルバイトしていたと思ってんだ」あんたのせいだろう、とは口から出なかったけれど睨みつけた。仕方ない事だと思っただけ、今の僕自身を否定されているみたいでいい気分じゃない。

反論されるとは思っていなかったようで僕の目の前でたじろぐように目を泳がせた父さんは、「だから」と言い訳した。「……だから、僕がお前を引き取るって言っているんだよ。このままここにいたらお前は駄目になる。最初は、任せても大丈夫だと思っていたけど、無理だと分かったんだ。気づくの遅れてしまったのは申し訳ないと思っている。でも、正人をきちんと学校に行かせてやれるのは、僕だ。僕だけだろう！」最後の言葉は強く言い切って、頷いた。自分の言うことを自分で確認するような仕事だった。

「私は離婚するなんて言っただけだ」

「裁判離婚だつて出来るんだ。それに僕達は、とうの昔に終わって
いたじゃないか」

くしゃりと母さんの顔が歪んだ。今にも泣き出しそうな顔をして
から痛みに堪えるように喉を震わせて、「正人は貴方になんてあげ
ない」と呟く。

「それを決めるのは君じゃなくて、正人だ」にべもなかった。でも、
選ぶ権利が僕にあると言う割りに、父さんの言い方は断定的だった。
「正人が決められないなら裁判所で決めてもらうしかないだろうけ
ど、そうしたつて君が正人を養うのは無理だろう？ 思春期の子供
には、母親と父親が必要だ」また、子供、という単語を使う。

子供には保護者が必要だ。子供には母親と父親が必要だ。最初の
その両方を放棄したのはこの人なのに、まるでそれが何よりも正し
い事だといわんばかりの様子だった。

「……貴方と、美空さんね」呻くように母さんは言う。

「経済力もある」と、父さんが言った。貧乏人を前にして財布の中
身をわざとばら撒く金持ちみたいな顔をしていた。

その顔を見て、僕は、もしかしたら母さんも父の心情を察して、
はじめて性根を思い知ったのだらう。驚いて息を詰めたけれど、そ
れはすぐさま嘆息になって落ちた。人を見下す目を父さんはしてい
て、それを母さんに向けている様子はちょっとした気遣いもないよ
うだった。

優れているものが自分のことを自慢するみたいに、単純にそれだ
けの事なのだ。

けれど今まで専業主婦だった母さんが父さんよりも経済力に劣つ
ているのは当たり前前で、その事を忘れたように勝ち誇るのは、
本当はとても卑怯なことだった。

愛情はない。おそらく親しみや遠慮や、少なからず子供が生まれ
た夫婦としての絆みたいなものもない。分かりやすく言えば、赤の
他人にしか出来ないような、謙虚な人間なら他人にさえするのを躊
躇うような態度で、父は目の前に立っていた。

頂垂れるようにして肩を落とす、そんな母の姿を見ながら、僕は

「母さん」と呟いていた。

「母さん、諦めなよ」

「正人？」母の声は震えていて、どうしたって聞くに堪えないものだった。父がいなくなってから段々感情の起伏をなくしていった母さんが、結局父さんの酷い言葉で感情を取り戻していくなんて、馬鹿馬鹿しい展開だと思う。僕が酷いことを言っても見向きもしなかったくせに、自分を裏切ってどこかに行ってしまう人の別れの挨拶は聞こえるなんて。

「無理だよ」

「……、どうして？」

「だって、見え見えじゃないか」

夫婦でいたいのが貴方だけだと、分かりきった話なのに。

夫婦という形なら、とつくの昔に壊れている。元通りに出来ないのなら諦めるしかないだろうに、それでもこの人はその形にこだわるんだらうかと母を見つめた。このまま父に追いすがってもきつといいほうに転がる事はないんだらうに。父さんが美空さんとの結婚を諦めることも、美空さんが子供を産むこともきつと、止められないのに。

手放してしまえば、楽になれるかもしれないのに。

ああ、でも、僕になら、止められるかもしれないのか。

握っている傘のことを思い出した。

だけど、僕は美空さんを多分恨んでいない。美空さんは確かに僕の家を崩壊に導いた人間かもしれないけれど、その最初のきっかけは父であり母なのだと思う。ふたりがきちんと夫婦をしていれば、美空さんが現れても父は家を出て行かなかっただらうし、赤ん坊が出来ることもなかっただらうから。誘惑はいけなものだというけど、誘惑はひつかかるから誘惑なのだ。ただそこにあるだけなら、無害じゃないか。

玄関の開く音が聞こえた。と、「……正志さん？」美空さんの声

がか細く響く。

誰もが無言でいたわけでもないのに、全員が口を閉じた一瞬の隙間を縫うようにして伝った声は彼女の心細さとは無関係に耳にはつきりと滑り込んできた。それは僕だけではなくて、父も母も同じだったんだろう。父は驚いたような顔をして玄関のほうへ目をやり、母はゆっくりと顔をあげた。頬や目や、顔にかかる乾いた髪をよけともしないまま、ぎこちない動作だった。

その眼球が、部屋の照明の中でぬるついた光沢を発している。涙で濡れている、のだと気づくのに遅れた。

床に重たいものがぶつかる、そんな衝突音がした。

台所の椅子と一緒に父さんが床に倒れこんだのだ、その音で僕は我に返った。母さんが玄関のほうに気を取られている父を力任せに突き飛ばしたのだと咄嗟には分からなかった、突拍子もない挙動に父も踏ん張りきれなかったのかあっけないくらい簡単によるめいて背中から椅子にぶつかり尻餅をついている。目を丸くして、毒気の抜けた顔で母を見上げていた。傲慢も嫌味もなにもない、何か起こったのか全然分かっていないような顔は、本当に子供みたいだった。その父さんが見上げた眼差しを、母さんは見下ろさなかった。

見ないで、母さんは振り返っていた。

尻餅をついた父に背を向けて、玄関の美空さんへと向き直る。その一瞬、

本当の年齢よりも老けてみえる手入れの行き届いていない髪の毛を数本、濡れている頬に張り付かせたままの姿に、「……っ、母さんッ！」

悲鳴のような声をあげたのが僕自身だとすぐには分からなかった。ほとんど衝動的に喉から飛び出していた音は、まるで運動会のリレーのピストルか合図のようで、母さんは走り出していた。

一直線、廊下を駆ける。疾る。

その母の右手の中に、やけに目に突き刺さる鋭く光を弾くものが見えた。瞬くほどの短さの中、垣間見れた程度なのにそれでも刃物

だと理解出来たのは、はつきり見たわけじゃなくて、それが一番この場に似合っていると直感的に感じたからだ。包丁でもナイフでもカミソリでも、人を殺してしまう凶器が今の母さんには一番ふさわしいと思った。

そうして振り上げられた母の腕の先で、ざらりとそれは輝く。玄関先に明かりはなかったのに、まるで自分から輝いているみたいに主張する。遠くの人間にまでこの瞬間を思い知らせるために光を発しているような、まだ立ち上がれない父に見せつけるためのような輝き方だった。

私を見る。これを見る。

光を帯びて落下する。真っ直ぐ振り下ろされる。

見えるわけがなかった。僕に見えるのは、明かりのない筒みたいな廊下と出口の玄関の長方形と、母さんの背中だけだ。美空さんを殺す刃物だつて、光るはずがなかった。本当なら全部は嘘だった、けれど見えた、ようだった。

母さんが美空さんに覆いかぶさる。

大事に両腕で護るように慈しむように触れていた美空さんの腹部に、その瞬間、包丁が突き立てられた。柄が皮膚に食い込むまで深く強く。白いシャツに赤色がじわりと滲んで、すぐにぐしりと濡れて、布が吸い切れなかった血が床に滴る。一滴、二滴、と落ちていく。美空さんは母さんを見ていた、驚いているようなのに惚けてもいるような、そんな目をしていた。焦点が僅かにずれる、母を見上げたままの格好で、糸の切れた人形のように膝から崩れて、横に倒れた。

重たい音がする。まるで、今見えたような気がしたすべてが現実だともいうように、美空さんが玄関の石畳に倒れ伏せる音だけが現実味を帯びて聞こえた。

「佳子！」と、すぐ傍で父が叫んでいる。もどかしげに立ち上がって駆け出そうとするのに足が追いつけず、つんのめって顔面から再び地面に倒れこんだ。

佳子は母さんの名前だった。

美空さんではなく、母さんの名前を呼ぶ父の声は素直に動揺していた。

またなんとか立ち上がって今度はよろけながらも玄関へ父がたどり着いた時には、母は逃げていた。こつちを振り向きもせず走り出していった。僕も父も、この瞬間に取り残されてしまっていた。

母がさっきまで立っていた玄関の石畳には横向けに倒れている美空さんがいて、その様子はさっき想像した通りだった。腹部のナイフは突き刺さっているというよりも、まるで腹から生えてきたみたいで、白いシャツは大きな赤い染みを作っている。美空さんの体の下に小さな血溜りが出来ていた。明かりらしい明かりがないから、黒く淀んだ液体にしか見えないそれは命があるみたいになんか波打ちながら先端をゆっくりと広げている。

黒い液体の中にふと、混じりあわない透明の液体が流れていた。錯覚だとすぐに分かる。ナイフが子宮を突き破って、柄の先から羊水をこぼしている。錯覚だと分かっている、諦観は変わらなかった。

見た瞬間、絶望してしまうものではなかった。それでも思わず立ちずくんでしまう光景ではある。

美空さんの顔の傍にほとんど力尽きたように膝を折った父さんは大きく背中を丸めた。両腕がだらしなく地面に垂れ下がっていて、動かない。

「ま、正志……さん……ッ」痛みをただがむしやりに堪えて、美空さんは言った。出血で青褪めた唇が小刻みに震えていて、「きゅ、救急車……」

お、「お願い、と最後まできちんと言えず途切れる。血溜まりの侵食が彼女の折り曲がった膝のところまで進んでいた。唇を噛み締めて全身を唇と同じように震わせて、身体をくの字に丸くする。痛みをなんとか和らげようとしているように最初は見えなかった、彼女の手が、血まみれの腹部を触るのに気づいて分かった。赤ん坊を守ろうとしているのだ、この人は。どうにも出来ないけ

れどころにか、しようとしているのだ。

でも、と僕は想像した。この人の胎内で赤ん坊は死んでいる。生まれる前に、ナイフで刺し殺された。胎児の頭のナイフの切っ先が突き刺さっているのだ。

この子はもう、死んでしまっているのだ。

「お、お願い、い……救急　車……」

父さんは動かない。息をするのも忘れてしまったみたいに、僅かさえ動かない。

血溜まりに片方の頬をつからせて、美空さんは目を動かした。「ま、正人……く、ん　……お願い、」なんとか肺に空気を出し入れする、その途切れ途切れのリズムと同じ息遣いで美空さんは声を出した。呼吸しているのか喋っているのか分からない。

苦しげに肩を上下させて瞼を伏せた、美空さんの目尻から涙が押し出されて血溜まりへと落ちていく。

「お願い……、この、子……、のぞ、……」

最後の単語は聞こえなかったから、のぞみ、なのか、のぞむなのか分からなかった。

けれど、僕には美空さんのお腹の中で死んだのが妹だと分かった。僕が女の子だったら、望美と名づけていたと父さんが言っていたからだ。のぞみ。母に殺された胎児は本当に僕と半分とはいえ血の繋がった妹だったんだ、と思い知った。

しばらくして、サイレンの音が鳴っているのに気づいた。遠くのほうから間遠く響いてくるサイレンが段々近づいてきていた、まっすぐにここに向かっていてみたいに一度も遠ざかったり音が途切れることもなく。母の金切り声に近所の誰かが、警察に通報したのかもしれない。

父さんは弾かれたように顔をあげた。微動だにしなかった身体を大きく震わせて、体全部で呼吸する。「佳子が、佳子がどうして」両手で顔を覆い隠そうとして、ぎょっと動きを停止させた。掌を見て目を見開き、唇を惚けたように半ば開けている。地面をこするよ

うに持ち上げた指先には黒ずんだ液体がべっとりとついていて。美空さんの血だ。

美空さんはどうにか呼吸を繰り返しているだけだった。その動作も危なっかしくて、いつ終わってしまうか分からない。

サイレンの音が近い。何かを追い立てるように近づいてくる。

、追われているのは母ではない。僕だった。

歩きかけて、足に傘の先がひっかかった。見下ろすと、閉じていたはずの傘はいつの間にか開いていて、狭い廊下の壁に先をこすりつけている。黒い内部が見えていた。まるで生き物の口みたいだと思ったところで、そういえば店長の時も同じだったと気づいた。あの時も傘を広げていないのにこんな風になっていて、そうして店長を消したのだ。

傘は勝手に開いていた。

僕は自分に問いかける。怒りは、あるのだろうか？

母さんが美空さんを刺した。僕の妹かもしれない胎児が死んだ。

怒りなんて、あるのだろうか。悲しいとも辛いとも、思わないのに、ただ茶番劇のど真ん中にいるように漠然と白けている僕がいるのだけなのは確かだ。父さんのように惚けることも出来ない、ちゃんとこの事態を把握している僕はため息をつくの堪えるので精一杯みたいだった。

馬鹿馬鹿しい、と思っている。そんな気持ちならあるかもしれない。

「なんで、「こんな事になったんだろうと、頭を抱えなくなるというよりは僕は笑いたいのかもしれない。

分からないけれど、指の爪がカチカチと柄に当たって小さく音を鳴らしている。齒軋りみたいな音だった。

最初は僕自身が震えてしまっただけなのだと思うたけれど、すぐにそうじゃないと分かった。傘自身が振動しているのだ。今にも獲物に飛び掛ろうとしているように筋肉を引き締めて、跳躍しかぶりつく準備をしている。肉食動物が地面を抉るように蹴り上げる、

その一瞬手前のような、音を立てて引き絞られた弓の弦みたいなものだった。

脈動だった。命だ、ゆっくりと呼吸を静めて静止する。駆け出す合図を待つ。引き金を引くのは僕だ、「用意、どん」という代わりに別の言葉を使う。

目を丸くした。

「……、ああ、そうか」

今まで、「消える」とってどういう意味をちゃんと考えてこなかった。目の前からいなくなる。その事がどういう事なのか僕はきちんと考えるべきだった。

いなくなっても、この世界から消えてなくなるわけじゃない。僕の目の前から消えてしまっても、この世界中どこを探してもいなくなつたわけじゃない。どこかには存在するのだ。でも、この傘を使つて「いなくなる」のはきつと、僕の目の前からだけいなくなるのではなくて。

「お前が、食べるんだ？」傘に呟いていた。傘が頷くはずも返事をよこすはずもないけれど、僕の声は握っている傘に向かって落ちていく。傘が大きく震えた、今までよりもはっきりと感じる事が出来る。まるで犬が飼い主に尻尾を振っているみたいだった。その通り、今まで私のご相伴に預かってました。また餌をもらえるんですかと聞かれているようでもある。

傘が人を喰らう。ありえないはずの事に、僕はどうしてか納得してしまった。

見ると、美空さんはもう動かなくなっていた。血だらけの腹部を押さえていた手も血溜りのなかに力なく落ちていて、波紋のひとつもなかった。死んだんだ、と理解する。敗北者のように崩れた父さんは頂垂れたままで、この人も息絶えてしまっているみたいだった。この場所で生きているのは僕だけなのだ。

サイレンの音が耳障りだった。もう角を曲がったかもしれない。まるで秒数を数えているみたいだ、警察が来て美空さんの死体を見

つけるまでのタイムリミット代わりにサイレンが鳴り響いている。
「父さん」僕はこの美空さんの死体をなかった事に来るかもしれない。

呼んでも父は動かないので、僕はひとりで決めた。

これは、母さんを助ける事になるのかな、と傘を持ち上げながら考える。僕は母さんから逃げたくて、母さんを消すはずだったのに、今は母さんが殺した美空さんの死体を消そうとしているのだから滑稽な話だった。このまま美空さんを放っておいて、警察に任せたっていいはずなのに僕は傘の先を美空さんに向けている。美空さんへの怒りはやっぱり心の中をいくら探しても見つからないから、うまく行くかも分からない。多分、このまま先を父へ向けたほうが成功する、と僕は素直に思う。

こんな事になったのは離婚話を切り出すのに車の中とはいえ不倫相手の彼女を連れてきた、父の落ち度だと思っていた。

サイレンの音が唐突に途切れた。このあたりの道路は道が狭いから、まだ広めの道路に停車して歩いてくるつもりなのだろう。錯覚かどうかも分からない、空耳のような薄っぺらい足音が近づいてくるみたいだった。しばらくしてから僕の中の心臓の音と同じリズムだと気づいて、小さく息をつく。それでも耳を澄ませば近づいてくる足音はやっぱり聞こえてきそうなのだから、やっぱり追い込まれていた。

美空さんの死体を消そうと思ったのは、間違いなく僕のためだ。

母さんから解放されたい僕は、ここで美空さんの死体を消さないと一生殺人犯の息子と言われ続けるんだと分かっている。それは、はりばての足立家に立てこもった母さんに食事と家を提供する今までの僕と全然変わらないのも分かっていた、いやそれよりもっと悪い。家からは逃げ出せても、あの女の人の息子、というポジションはどこにいても付きまとう。

「だから」僕は逃げ出したかった。あの人から。「だから、消えてください。美空さん」

そうして、その犠牲者は世界を変える

ぐっと腕がひっぱられるような感覚。その後で、またあの音がした。

太い枝を思い切り足で踏みつけてへし折るような、硬い物が力に負けて真つ二つに割れてしまったような、甲高いのに重たくぐもった音が僅かな振動を伴って僕の腕に伝わってきた。

傘が手から落ちる。

思わず、だった。振動に手が痺れて落としてしまったわけじゃなくて、自然落下して床に落ちた。思わず、分かってしまった事が僕の理性を押しつけて足立正人の全部を支配して、手から傘が落ちたのだ。柄から爪、指先から腕へと伝わったその音の振動が、何かを踏みつけているわけでも真つ二つにへし折っているわけでもなくて、ただ、噛み砕いているのだと分かってしまった。

この傘が本当に、人を食べているのだとしたら。

この音は間違いなく、咀嚼の音だった。骨を齧り、奥歯で折る。

骨付きチキンみたいに間接部を折り曲げて引きちぎる。

人を食べる音、細かく千切って飲み干す音。

ばりばり、と大口を開けて咀嚼する。

これは、人殺しの音なのだ。

途端、喉の奥からすっぱいものが込み上げてきた。吐く、と思った。口を手で押さえるよりも先に目を瞑ってしゃがみこんで俯むと、喉がひくつくように痙攣を起こす。ちゃんと言葉にならないような声と一緒に、胃酸が喉を伝った。口の端から滴って長く尾を引く、唾液の糸が途中で切れて落ちる。

下で、ぽちゃり、と音がした。

水溜りの中に水滴が落ちるような、というよりもそれそのものような音だった。

掌で口を拭いながら目を開けると、床が一面赤くなっているのに

気づいた。目を丸くする、視界に痛いぐらいの赤色だった。乾ききっていない赤色は明かりの中で光沢を発していて、その中に僕の吐いた胃液が小さな泡を作って浮いている。赤いペンキをとところかまわずぶちまけたような、そんな感じではあったけれど違うとすぐに分かった。鉄錆臭さが部屋中に充満していたからだ。美空さんの血だ、と思ったのは最初だけだった。

玄関ではなくて僕が立っているのは台所だった。

フローリングの木目の溝に血が入り込んでいた。明かりのない場所で見えた美空さんの黒ずんだ血溜まりとは違って、僕の目の前にあるのは真正正銘の赤色だった。たったひとりじゃ流しきれないんじゃないだろうかと思うぐらいの、大量の血痕だ。惨状、というべき状態だった。

美空さんや父さんは、と思って玄関に行ったけれど、誰もいなかった。それに何もなく、来客が来た様子もない。

台所に戻ってきてから、落ち着け。と、心の中で呟いて深呼吸した。何かが起こったのは確かで、事態が変わっているのは交通事故の時と同じようだった。僕を巻き込んだ事故はなかった事になって、地面に転がっていた僕は横断歩道の中央で立ち尽くしていた。傘を使うと、唐突に場所が変わってしまう事があるのかもしれない。

僕自身には怪我もなかった。確認するように自分の身体を手で触りながら見下すと、足元の近くにバケツが置かれているのに気づいた。水色のプラスチックのバケツの中に、赤い絵の具を溶かしたような薄い赤色の水がたつぷりと入っている。バケツの縁にかかけられている雑巾も赤く汚れていて、まるで血だらけの床を掃除している最中のようなのだ。

僕はようやく落とした傘を拾おうとして、「……え？」声が出た。傘がない。

血溜まりの床のどこにも、傘は落ちていなかった。そのタイミングで、居間のテーブルの上を硬い物が小刻みにぶつかる音がした。条件反射に身体を大きく揺らしてテーブルのほうを

見ると、テーブルの上を這うように携帯電話が鳴っていた。僕の携帯電話だった。バイブレーション機能が働いて、携帯電話が振動するたびにテーブルにぶつかって音を立てているのだ。無意識に口から息が漏れて、僕は携帯電話を拾う。ほっとして気がゆるんでいたのか、大して相手のことも気にしないで電話に出ていた。

「はい、足立……」

『正人か？』知らない男の声だった。

「え？」

『正人だろう？　たく、何回電話したと思ってるんだよ。ずっと心配して電話してたんだぞ。お前、おとといからずっと学校休んでるじゃないか。家に行っても顔も見せないし、どこか具合でも悪いんじゃないかってみんな気にしてる……』

「ちょ、」声が弾んだ。上擦って最後まで言い切れずにかすれてしまふ。一度呼吸してから、「ちょっと、待って」ゆっくりと言った。理解不能な相手の言葉を止める意味もあったけれど、どちらかといえば自分に言い聞かせるような口調になった。

『なにをちょっとだけ待つんだよ』と、男はふてくされたようだったがそれでも口をつぐんでくれた。けれど十秒そこらもたたない間に、『……、まあ、お前んちがいろいろ大変なのは知ってるけど。何も言わずに三日も無断欠席っていうのはいただけないだろ』と、続ける。『伊崎の奴がそりゃあ性悪に文句を言ってたからな。』

「あんな社会のルールも守れないような生徒は伝統ある進学校にはいない」とかなんとか』

伊崎、という名前には心当たりがあった。何より彼の口真似が陰険な伊崎の口調に本当によく似ていて、まるでカセットテープに録音された伊崎の声を受話器の前で流しているような出来前だったのだ、思い違いだとも思えなかった。

伊崎というのは、僕が辞めた学校の教師の名前だ。今はどうなっているか知らないけれど、一年前には進路指導の責任者として校内に君臨していた。

生徒の品評に教師生命というよりは職人生命を賭していて、生徒の出来具合に応じてどの大学に送り出せばいいのか果物を梱包するような手際のよさで決定するので有名な人だった。人格者として尊敬できる人ではなかったし、度が過ぎて規則やルールに厳しい人だったので一部の生徒からは反感を買っていたが、傷んだ林檎を数合わせで出荷するような人ではなく見立てはいつも完璧だったので一部の生徒からは物凄く支持されていた。通っている当初はどっちも分からなかったけれど、父が家を出た後で「お前の成績だとアルバイトをはじめたら成績が落ちて奨学金は受けられなくなるだろうから、もう学校自体を辞めてしまったほうがいい」とはつきり言われた時は、両方の生徒達の気持ちが率直に理解できた。

そんな伊崎にとって、自分が品質を管理して出荷しなければいけないのは学校の中の生徒達だ。どんな形であれ、果樹園の外に転がり落ちてしまった林檎にまで目を向ける人じゃないし、まして気になっってしまうような性格でもない。だから、今更だった。伊崎が僕の事を批難したりするのはとてもなくおかしくて、まずはそのあたりを電話の相手に訊ねることにした。

「どうして、伊崎が僕の事を心配しなくちゃいけないんだ」

『どうしてって』面食らったような声。『そりゃ心配ぐらいするだろ？ 自分のクラスの生徒がなんかずっと休んでるんだし、あ、そういえば家庭訪問するとか言ってたけど連絡いつてるか？』

「だからなんで、」埒が明かない。思っただけを荒げようとして、言葉を読み込んだ。血まみれの床と同じことなんだ、と思ったからだ。場所が変わる、というよりも状況が変わる、といったほうが正しいのだろう。瀕死の大怪我をしたのに傷がひとつ残らず消えていたあの時と比べたら、学校にまだ通っているというのは驚きはするけどそれぐらいだった。

僕自身はてんで分からないけれど、変わっている。現状が理解できなくて混乱しかけるのをなんとか言葉と一緒に身体の中に押し込んで、「……伊崎が家庭訪問するって言ったのか。知らないけど」

平常心を絞り出して普段どおりに喋ったつもりだった。

『留守電になつてたって言ってたけどな。そうそう、お前んちの電話、一昨日からずっと留守電だろう？』電話機を見ると確かに留守電のボタンが赤く点滅していた。メッセージが録音されている状態だ。『だから俺もこっちにかけたってわけ。あ、大丈夫。伊崎には言われたとおり携帯電話の電話番号は教えてないから』

「……ありがとう」と、言うべきのような気がしたので口にした。

『まあ、このくらいはお安い御用だけだなッ』照れ隠しなのか早口に言ってから彼は、ふとつかの間黙り込む。『それで、……うまく行きそうなのか、あの話』まるで近くに誰かがいて盗み聞きされているみたいに声を潜めてきた。緊張感が混ざった言い方でもある。

「、ああ、まあ」内緒話だろうな、と想像したものの、曖昧に頷くだけに終わった。どうやら僕はまだ学校に通っているらしい、というのは伊崎の一件で確信できたけれど、「あの話」はあまりにぼんやりとしすぎていて掴みきれない。学校に行っているならアルバイトはしていないのか、父と母はどうなっているのか、聞きたい事があるのは僕のほうだったが、自分を事を相手に尋ねるといのは普通の人間ならそうやらない事だから、どう切り出せばいいのか分からなかった。

『成功したのか？』聞いてくる声は真剣そうだった。お前の一生に関わることなんだぞ、と脅されているような気分になる。

質問の趣旨が分からない。とは、さすがに言えなかったので、「まだ分からないんだ」とだけ応えた。

『そうだよな』と、彼は息をついた。『学校を辞める、なんてそう簡単に認めてくれやしないよな』

一瞬、聞き間違いかと思った。でなければ何かたちの悪い冗談だろうと決め付けようとした、でもどっちにしても電話の向こう側から訂正が入る事はなくて、しばらくしてから、『やっぱりなんとかさ、学校辞めずに家だけ出て行く方法を探したほうがよくないか？

「そんなの無理だ」ってまた言うんだらうけど、高校中退しても

まともな会社で働けないだろうし。卒業まであと少しだしさ、それまで我慢したらこっちのもんだろう？」諭すような言い方だった。

返事をしなかったのに理由はない。あるとすれば返事のしようがなかった、というところなのだろうけど、彼はそう思わなかったみたいだった。僕の沈黙を拒絶とかそういう方向で受け取ったらしい彼はまたため息をついた。肺に溜まっていたものを全部吐き出すような、長い長いため息だった。

『そうだよな、そうやって一年間我慢してもう限界なんだもんな』
一年間、という単語に顔をあげる。

壁にかかっているカレンダーは僕が記憶している通りのものだったから、一年前というのは父が家を出て行った頃と一致する。つまりは僕が学校に行きたいのにやめて働き出した頃と同じ時から、僕は学校を辞めたいと思いつながら我慢していた、となる。理由は全然検討がつかないけど。

『まあ気を落とすなよ、正人』慰める為にわざと明るい声を出したような、ちよつと不自然な声だった。『親父さんが酷い時は俺の家に逃げてくればいいだろ。下手に切り出して大怪我するよりはましだって。そうそう、その事も心配してたんだよ。電話に出ないって事は、大怪我したんじゃないかって』

「それは……、大丈夫」僕自身に怪我をしている感じはなかった。多少空腹のような気がするだけだ。

それよりも彼の言った、「親父さんが酷い時は」という言葉が気になった。酷い時に逃げるなんて、酒乱とかしか思いつかなかったが父は酒癖はいいほうだ。何から逃げ出すのか聞きだせないものかと考えたけど、以心伝心のような彼の言い方に質問をはさむと途端に会話が破綻してしまいそうで躊躇う。

いつそ記憶喪失にでもなつてしまえばよかったけど、そうそうなれるものでもない。

「何かあったらちゃんと逃げ出すよ。僕だって命は惜しい」冗談ぽく言っただけだった。使い慣れていない茶目っ気をフル動員した

のだけど、そんな僕の努力に携帯電話の向こう側から返ってきたのはひっそりとしたため息だ。笑えない冗談だと思っているらしい。

『本当に命は大事にしろよ』彼の言い方は、今までの中で一番真剣そうだった。さっきの冗談に怒っているような、そんな感じでもある。『無理するなよ。本当に、心配してるんだからな』

「分かってる。大丈夫だから」事情は理解できなくてもこの言葉が一番適切なような気がして言った。僕自身がきちんと分かっている状況次第じゃただのやせ我慢みたいなものだろうけど、茶化して煙に撒こうとするよりは誠意があると思ったからだ。

彼はすこし黙り込んでから、『何かあったら連絡しろよ。相談に乗るからな』と言って電話を切った。回線を切ってから僕は携帯電話のストラップを掴んで目の前にぶら下げてみる、まるでパズルみたいにはらけてしまっている情報をひとつひとつ組み合わせようと頭の中で躍起になるが途中で訳が分からなくなつてやめた。携帯電話話もとあったテーブルの上に放り出す。

彼は僕の携帯電話番号を知ってたんだな、と投げ出した携帯電話を見て改めて思う。

「正人」と、彼は当たり前みたいに僕を名前と呼んでいたのに僕は自身は彼が誰なのか全然分からなかった。簡単に編入できるような学校ではないから顔ぐらいは知っているかもしれないけれど、あの声に聞き覚えはない。

一方で確認した留守電に録音されていた声のほうは、間違いなく伊崎のものだった。受話器の前で眉間にしわを寄せているのが想像できる、「伊崎です」と短く不機嫌そうに名乗ってから、「一昨日から正人君が学校を休んでいるのですが体の具合でも悪いのでしょうか。そろそろ試験の準備もありますので大事な時期ですので、どうしても学校に来られないようなら私のほうへご連絡ください」まるで原稿でもあるようにすらすらと喋り終えた。録音の終わる音から、日付と時間が流れる。今日の夕方頃にかかってきた電話らしい。

生徒に話す時よりも丁寧なのは保護者に聞かれると思ったからだろう。やっぱり僕はまだあの学校の生徒なのだ、と確信した。「学校を辞めたがっている生徒」となにかのキャッチフレーズみたいに口に出してから、生徒、という言葉がひっかって、しばらくして僕は、「あ」間の抜けた声をあげた。

汚れた床とバケツを放ったらかしにして自分の部屋に入った。手探りに電気をつける、小さく何回か点滅した後で明かりがついた。

部屋は前の僕が記憶しているのとあまり変わらなかった。学生らしく、壁に一年前に捨てた制服が律儀にかかってあるのと机の上に教科書があるぐらいだ。その部屋を横断して机の二番目の引き出しを開ける。

思った通り、前までなかったものが入っていた。

おろしていない鉛筆一ダース分と消しゴム、ノートに埋もれるように、臘脂色の表紙の角がはげた本が一冊収まっていた。父が海外出張の時に買ってきたそれは、本当はノートなのだけど見た目が立派なので最初に渡された時は僕も騙された。これなら普通に本棚に放り込んでいても誰もノートだと気づかないだろうと日記帳にしたのだ。以前の僕は学校を辞めてしまいう日まで、このノートに毎日日記を書いていた。

以前は学校を辞めた時にダンボールに押し込んで押入れの中に片付けていた。でも、学校に通っている今なら、日記を続けているはずだ。

続けていってくれ、と思いながら、表紙をめくる。

最初の日付は、去年の十二月になっていた。僕が覚えている通りだ。ぱらぱらとめくっていく、僕が知っている通りの懐かしい思い出が僕の文字で当たり前前に書かれている。テストで悪い点数を取って塾通いになりかけた事、母さんがたちの悪いウィルス性の風邪にかかって入院した事、僕自身ちゃんと覚えている。間違いない。

僕の知らない事が僕の文字で書かれているのは、父が出て行った

日付からだった。

父が出て行った。で、はじめるはずの一行目はたった一言、「信じられない！」と乱暴に書きなぐられている。けれどその続きは、近所の犬に吼えられて噛み付かれかけたという他愛ないものだった。頭の中をひっくり返して探してみると確かに、そんな事があったような気がする。でも、と思わず噴出してしまった。父が出て行った日に犬に噛み付かれかける、なんておかしい感じた。

父が出て行かなければ、こんな、どうでもいいような一日だったのだろうか。

次のページからは飛ばさずに読み始めてみたが、父が出て行ったらしいくだりはどこにもなかった。どうでもいいような、馬鹿馬鹿しくてくだらない事が毎日やけに幸せそうに書き続けられている。

その事に次第に、違和感を感じ始めた。

それはまるで幸せなことだけをかき集めて書いているようで嘘っぽかった。そもそも学校を辞めようとしている理由さえ見つからないのだから、困惑するしかなかった。僕の文字で書かれているのに僕自身が知らない、というのも変な感じではあったけど、腹立たしいことも悲しいことも何もないのが不自然だ。「幸せでした」「楽しかったです」と、死んだ後で故人の人生を振り返って誰かが言うような他人ごとのような視点で書かれているのだと、少ししてから分かった。けれど、これは僕が書いたもののはずで、僕がどうして僕自身を他人事のように見なくちゃいけないのか、そもその理由だけは全然分からなかった。

最後のページは四日前の日付になっている。学校で「清海」という生徒と話をした事が書いてあった、清海には双子の兄がいてその兄貴は清海にはとても厳しいらしい。でも兄貴のことを話す清海は楽しそうに僕は少し羨ましいと思ったそうだ。

「もしも僕に」と、最後の行の言葉は続く。「もしも僕に兄弟がいたなら、僕はその人と力を合わせて乗り越えられたんだろうか。僕はどうして一人っ子なんだろう。どうして僕を助けてくれる人がい

ないんだろっ」

それは切実で、でもどこか未練がましいような自惚れているような言葉だった。

誰かに助けてほしいのか。助けてもらえるのが当たり前だと思っているのか、どちらかといえば後者に近いニュアンスだ。

兄弟がほしいと思った事はあったかもしれない。でもそれは子供の頃の無邪気な願いみたいなものだろう、小学校の頃に年長の兄弟がいる同級生を羨ましく思ってた母親に「お兄ちゃんがほしい！」とせがむようなもので大人になれば忘れてしまう代物だったはずだ。

残りのページをめくってみたが白紙だった。何か悩み事があったらしい、と漠然と分かる言葉だけを残して後は何も書いていない。

自分しか読まない日記の中で自分は幸せだと言いついて聞いていないといけない何かがあったのだろうけど、具体的なことは何一つはつきりしなかった。ため息をついてノートを閉じようとする、と、ノートから白いものが抜け落ちるように落下した。

ひらひらと空を舞って、床に落ちる。拾い上げた。不自然なくらい素っ気無い白色の封筒だった。

いまだきこんな真っ白な封筒を誰が使ったろう、と封筒を見ながら思う。縦向き中に紫色の紙が入っているような、礼儀をわきまえた感じの和風な封筒ではなくて、ハガキよりも少し小さめの横向きの封筒だった。切手は貼っていない、宛先も差出人も書いていなかったけれど、触り心地から中に便箋が入っているのは間違い。裏に返すと、きつちり口の部分が糊付けされている。

出す準備の途中でそのまま置いていた、といった感じだった。

しばらく迷った後で封を開ける事にした。僕の日記に挟んでいた僕が封をしただろう手紙を開けて読む事は、記憶にない分だけ多少の罪悪感が付きまとうけれど、僕が準備した手紙だと強引に納得させる。愛想のない真っ白な封筒の中に入っていた二つ折りの便箋は同じぐらいに白かったけれどところどころ黒いインクが裏まで滲んでいた。

便箋を広げる。

「この手紙をはじめて読む人が誰になるのか、僕には想像できません」と、手紙ははじまっていた。

誰かに宛てたものではなく、強いていうなら最初にこの手紙を見つけた人に読んでもらうために用意したようなニュアンスの言葉に面食らう。誰でもいいからこの手紙に気づいてほしい、といった感じだった。「近所のおばさんなのか。伊崎先生なのか。もしかしたら全然僕とは関係のない強盗かもしれない。きっと一階の惨状を見てからこの手紙を見つけて、ああやっぱりと思っているといます。僕はこんな形でしか自分の罪を告白できませんでした。せめて迷惑をかけないように思っただけ、無理だったみたいです」

ボールペンで書かれている文面はきれいだった。僕の手だけけれど、一瞬惚れ惚れとしてしまう。ひとつとして修正液の跡がなくて、文字も丁寧に時間をかけて書いたのが分かった。誰でもいいから読んでもほしい、と思うのと同じぐらいの強さで、いつか必ず誰かが読むのだと確信しているような書き方だ。ただ気持ちをぶちまけて終わるんじゃなく、どう書けば一番自分の気持ちが伝わるか何度も何度も考え抜いた結果のように、精一杯の誠意が文面の中にあつた。

「一階の血溜まりはなんとか掃除をしようと思っただけですが、僕一人の力じゃどうにもならないと思います。少しはマシにしてあげようと思います。貯金通帳や家の権利書は両親の寝室のタンスのうちに右上の鍵のかかっている引き出しに全部しまっておきました。引き出しの鍵は僕のタンスの一番下の引き出しに入っています。この足立家で最後に生きている僕がいなくなったら、誰が家や貯金を想像するのだろうと気になっています。全部を終わらせる前に散財しようとも思っただけですが、さすがに僕の年齢であんな大金を使い切るのはいきなり、何より暗証番号も知らないのだから（きっと父の誕生日だとは思いますが。こういうのは基本が大事だとか母は言いそ

うだから）やめました」

読み続けているうちに、閃くというよりはじわりじわりと水が布

に滲んでいくように自然に、僕は察した。思い知った、というほうが正しいかもしれないけれど、ひとつの予感めいたものが頭を過ぎった。

「絶望して自殺したわけではありません。初めからこうしようと思っていました。一階の血溜りを掃除しようとしたのは証拠隠滅ではなくて、あまりに酷い有様だったから少しはマシにしようと思っただけです。もしかしたら、自責の念に駆られたとかのほうが話題性があるのかもしれないけど、ごめんなさい。そんな事は何一つないのです」

気づけば唇が動いていた。それに気づいたのは耳に僕自身の声が聞こえてきてからだった。吐息そのもののようなもので、けれど一度も途切れずにしつかりとした意志を持っている。「僕は何一つ後悔していないのです。だって、この事は一年前からずっと考えていました」

続きは分かる。まるで探偵にでもなった気分だった、それは僕がこの手紙を他人事のようにしか思っていない証拠でもあった。僕の知っている僕の文字で、僕以外の誰でもいい誰かに宛てた手紙この、遺書を僕が読むことだけはないはずだったのだ。血溜りの、あの部屋を少しでもきれいにして満足したら、僕は死のうと思っていられないから。

「僕」という代名詞が、僕である足立正人のことだと理解できるのに、全然聞き覚えのない別の誰かの名前を聞いているようだった。「父は一年前から変わってしまった。その事に家族以外の誰かが気づいているとは思えない、だから僕は最後にその事を書き残そうと思います。これも別に自分のした事への言い訳ではありません。僕のしたことは正義だ、と言い張るつもりはないのです。ただ純粋に僕は告白したいのだと思います。壊れてしまった僕達家族の事を誰かが勝手な憶測で話し出す前に、真実を。改めて僕は自分に確認します、僕は何一つ後悔はしていない。だってこの事は一年前からずっと考えていたのだから」

小さく喉が鳴った。ようだった。

ただ整然と乱れない文字だけが並ぶ便箋の両端にしわが出来た。便箋を持つ両手が気づけば拳になっていて、押さえ切れない感情の波に指先が震えている。怖がっているのだと、漠然と思った。他人だと思っているはずの手紙の中の「僕」の告白が、身に覚えのない自分の罪を暴いていくようで、戸惑いと、とんでもない事を容赦なく突きつけられるような恐怖があるのだ。

告白を、視線が辿る。

螺旋と連鎖

古い武家屋敷、と言って人が想像するもの。それが東條家の屋敷だと言ってもいい。

台所が土間でなくてきちんとした最新型のダイニングキッチンだったり、畳の上に毛の長い絨毯が敷かれてその上に海外から直接買ってきたらしい茶色の色合いのアンティークテーブルと椅子が置いてあったりするあたりは多少近代的と言えなくもないけれど、蔦を這わせて木製の門をくぐって玄関先まで歩く間の、日本庭園と呼ぶべき庭の風流さとか玄関を上がって出迎えるお手伝いさんの割烹着姿などは一昔前としか表現できない。

一度、池にいた鯉を見つけて「どうせ手をぼんって叩いてからパシくずややつてるんだろ。定番な事とかしてるんだろ」と清夷をからかった事があった。その時彼は「そんな事するか、馬鹿馬鹿しい」と顔を思い切りしかめていたが。

清夷に言わせれば、屋敷が文字通り「馬鹿馬鹿しい」ぐらいに古臭いのも庭が専属の庭師がいないと整備できないぐらいごちゃごちゃといろんなものが複雑に入り混じっているのも、全部は建前という事だった。東條としての建前、だ。伝統を重んじて今を生きる、この屋敷自体が在蝕と関わる一族や人間達全員への重圧として機能している。

だから陽葉は、この屋敷が何より好きではない。

両親が離婚した時に一度は表の世界に戻った事もあって、この世界の閉鎖的な居心地の悪さをはっきりと思い知ってしまった。生まれてからずっと秘密を抱え、身内以外の誰にも打ち明けらず、ある日突然自分がまったく理解されていない世界に放り込まれるかもしれない恐怖。仲のよかった友人が赤の他人になり、恋人だった人が疎遠になる。今の今まで、「自分」が存在しなかった世界を現実のものとして押し付けられる畏怖。でも、陽葉にそんな万華鏡のよう

にきれいでもなくせに廻せばころころと模様を変える世界を与えた笠倉は同時に、同じ悩みを持つ人間たちの集まりでもあって、思い知っても知らなくてもここに帰ってこなければならなかったのは確かな事だった。

それこそ、笠倉に生まれた時点で諦めるしかなかったことだ。

陽葉にとって普通に生きる、というのはギャンブルに近い。

常に一定の勝率で勝ち続けることと同じだ。気づかない振りをし続けていられるか、いつその事すべてあっさり認めて気づいてしまいか、二分の一のコインのどちらかを死ぬまで出し続けるのが不可能だと分かってしまったから、ここにいます。

お手伝いさんに案内されて濡れ縁を通り入ったのは畳敷きの十畳ほどの部屋だった。華子に連絡したのだからすぐにやってくるに違いないと思っていたのだろう、待ちわびたように座布団が二枚置かれている。その片一方に座るとさほど待たずに、陽葉がやってきたほうとは反対から一組の足音が近づいてきた。

部屋の鴨居をくぐったのは陽葉よりも年の若い青年だった。確か今年で十八になる。東條の跡取り息子は笠倉の跡取り息子を目を細めて一瞥すると、空いている座布団に膝を下ろした。礼儀正しく正座をしてから、「呼び出しに応じなかったらどうしようかと思っていた」開口一番、脅迫未遂のような口調で言い放つ。

「どうするつもりだったんですか？」

「笠倉ととうとう縁が切れると喜んでいたんだ」

「……本気で？」

「嘘に決まっている」脅し文句を言ったのと変わらない口調でそっけなく清夷は言う、「しかし。その事を望んでいる連中もいるだろうな、報告が遅れたぐらいでも文句の的にはなる」

「東條の当主代行が貴方でよかったですよ」

「そう思うなら面倒をかけないでくれないか」

すげなく言うてから清夷は息をついた。落胆とか感情を伴うものというよりは、この無駄話は終わり、と句読点を挟むような感じだ

った。

「それで」と清夷は話題を変える。「この間の事はどうなった？」
「いつも通りですよ」言葉通りの意味だったのだが、あまりに簡潔すぎて清夷が眉間にしわを寄せたので陽葉は言葉を付け加える事にした。「……なんの問題も起こらず万事抜かりなく、死刑囚の上村正紀は消えました」

「こつちでも確認している」頷く清夷に、だつたらわざわざ俺を呼ぶ必要はないじゃないか、と思ったのは内緒だ。

仕事をやり終えた笠倉を呼び出して仕事の報告をさせるのも面倒な事ながら東條の役割のひとつなのだろう、自分達で独自に調べるのは笠倉が何か矛盾したことを言っていないか確認する為の手順みたいなものだと芳川が言っていた。東條は笠倉を信用していない、けれど捨て置くことも出来ないからせめて監視している。名ばかりでも、「監視」という言葉は必要なものらしい。

「他には？」

「上村正紀を消した事で、家族は復活しました」復活、という言葉が子供じみていて幼稚に聞こえたが一番適切だったので口にする。

「一応、うちの家のものが調査しましたが聞きますか？」

清夷が頷いたので、陽葉は脇に置いていた東條に来る前に立ち寄った笠倉の家で受け取ったクラフト封筒からプリント用紙を取り出した。右上をクリップで留められている用紙をめくる。パソコンで清書されてプリントアウトされた文字面は無表情に並んでいて、そこについてこの間まで三十年前に息子や弟に刺殺されたある家族の現在から三十年前の記録が詰まっている。

傘で人を消す。そうすると、消された人間に関わった者達の人生に影響を及ぼす。早い話が、その消された人間が関わらなかった事として人生が作り変えられる。新しい彼らの人生がどんなものであるうと笠倉が介入する事はないが、それでもどんな風に変化したのかを調査して、東條に報告する。そこまでが笠倉の役割だった。

「両親の上村夫妻は、あの事件があった次の日に交通事故にあつて

います」言いながら陽葉は思わず顔をしかめる。息子に殺されたか
といえば、今度はトラックにはねられて死亡とは、つくづく死ぬ運
命だったらしい。「夫婦揃って即死。兄の上村恵太と姉の上村奈々
子は結婚して家庭を築いているみたいです、特別変わった様子はな
いみたいです」

「近所の様子は？」

「それと同じですよ」プリント用紙には兄と姉の近所付き合いの事
も詳細に書かれているが、細々とした評価の後で「深刻な問題は起
こっていない」と締めくくられている。深刻な問題というのは近
所トラブルのようなものではなく、ごくたまに傘を用いたことによ
って起こる弊害の事で、これが起こっているか起こっていないかを
確認する為に復活した者達の調査をしていた。

ふと、足立青年の事を思い出す。

彼はまさしく、その弊害そのものだった。滅多に起こる事のない
弊害が自分のほうからやってきて傘を盗んでいくなんて、つくづく
確率の低い不運に見舞われたと思う。

「上村正紀が消えて何か問題は起こっているか？」形ばかりの質問
が続く。

「目立つた問題はありませんよ」と、答える。「そもそも彼は三十
年前に警察に逮捕されてからは塀の中でごく限られた人間としか会
っていませんし、捕まる前をとってみても親しい人間がいたわけでは
ありません。正直、彼がいなくなつて混乱するような事態に陥る
人なんていやしない」事実だけを口にすると酷い言い草になった。
陽葉自身自覚しながら、それでもまだ言い足らずにため息をつく。
気持ちを少し落ち着けてから残りを告げた。「むしろ、いなくな
つてよかったんじゃないですか。彼は、戦後の家族殺しの先駆け
だとか言われていましたから。人が生まれながらに生きる権利を持
っていたとしても、彼には死ぬ価値のほうが大きかったかもしれま
せん」

自殺が連鎖する。とは、よく言う。自殺を目の当たりにしたり自

殺した者の家族が同じ方法で命を絶つたりする。それと同じで、殺しの連鎖というのも存在するのではないかと思う時がある。殺人犯に異常ともいえる親愛や憧憬を抱いたり、そんな生臭い人同士の感情を通り過ぎて絶対的な神だとあがめる事さえある。

上村正紀がそういう存在になるかもしれない、という危惧があったのかもしれない。もしかすればもうそんな歪んだ存在として彼を祭り上げて、起こった事件はあったかもしれない。

だからこそ政府は神秘庁を通して笠倉に「上村正紀を消してくれ」と依頼してきたのだらう。笠倉の持つ傘を使って、上村正紀の存在と彼の行いからくる後の連鎖を葬る為に。

「笠倉の役割に納得したのか？」正論を思う陽葉に意地の悪い質問を清夷はする。正論を善良だとは半分ほどしか思っていない陽葉へ、着飾った気色の悪い言葉ではなく素のままの本音を言えと催促した。「だとしたら、笠倉もやつと安泰なわけだが。お前がそんな簡単で分かりやすい納得の仕方をするとは思っちゃいない」

「笠倉の役割は、害となる人間を消して世の中を変える事」と、陽葉は答えた。両親が離婚する前に聞いた言葉だった。まるで正義の味方のような言葉だと、小さい頃は思ったものだ。けれど少しは物が考えられるようになって聞くと、なんて酷い言葉なのだとは別の側面がはじめて見えてきて失望もした。

「笠倉は、東條や政府やらが決めた害しか喰わないのに、世の中を変えると思卷いている。世界の悪と呼ばれるものを全部消していくなら無謀でもそれは信念でしょうが、今、俺がやってることは打算だ。そしてそんな笠倉を放置している東條も」

短く清夷は笑った。

「笠倉から傘を取り上げて壊して、そもそも笠倉なんていう役割をなくしたほうがいいか？」

「それが本来の、貴方の役割でしょう？」

問いかけに向けられたのは笑みの消えた一瞥のみで、けれどその眼差しは決して冷たくはなかった。唇にほのかに滲む笑みこそ彼の

本心なのだろう、本音に本音で問いかけてくる嘘のない応答に清夷はむしる穏やかに頷いた。

「確かに、あの傘の 在蝕を殺すのが東條の役割だ。笠倉が在蝕を飼い慣らし傘にして、人の世に役立てようとしたのと同じ歴史の中で東條は在蝕を狩ってきた。あいつらは人類の天敵で、幽霊のように視認できる者も限られている厄介な物だから。東條の役割を考えるなら、笠倉は目の届くところにおいて監視するだけじゃ生温く、さつさとあの傘なんて葬ってやるべきなんだろう。あれは人の人生を弄ぶ代物だ」

「でも、あの傘の力は必要なんでしょう？」

人類の天敵だからこそ、という考え方も出来る。

人の人生を弄ぶからこそ、逆に救う事も出来る。弟に滅多刺しにされて検視官から「これ以上にむごい遺体を今まで一度も見たことがない」とむせび泣かれた女が、弟がいけない世界では幸福に結婚して子供をもうけている。平凡かもしれないが、弟が傘に食われる前は得られなかった幸せだ。三十年前に無断に断絶された命の続きを、この傘なら、切れた糸と糸をつなぎ合わせるようにひとつに出来る。その為に支払いを要求されたのが、今回の場合は彼女を殺した弟の命だった。それは安い代価ではないか。

「人を救えるのは、確かでしょう」笠倉を否定しながら笠倉を擁護する。言いながら陽葉は、面倒なことだと自分に飽きれる。

「不本意な事に、在蝕は奇跡は起こせる。誰にも分からない奇跡だが」清夷は困ったように苦笑いした。「それを惜しくないのか、といえは確かに惜しいな」独り言のように言って立ち上がった。

「ご都合主義なんですよね」彼を見上げて、言った。特別批難する気もなかったので、ただ意見をいう程度の強さもない口調になった。「誰だって、なかった事にしてしまいたい事はあるものだ」と、清夷はいう。

でも、なかった事になど出来るわけもなく。出来ないからこそ人生というのだろうけど。

もし、誰かの存在を消す対価を支払ってでも人生を変えたいと思うのなら、それはそもそも幸せな事なんだろうか？

「俺には分かりかねます」

清吏が部屋から出て行った後で、陽葉も部屋を出た。

いつもの釈然としない気持ちは相変わらずだったが、傘の所在についてはまったく触れなれなかった事にまだばれていないんだなとため息をつく。足立青年からどう傘を取り返すか算段を頭の中でつねながら玄関までたどり着くと、陽葉は靴を履こうとしたところでぎよつと体の動きを止めた。揃えてある自分のスニーカーの横に見慣れた革靴が一足、同じように並んで置かれているのに気づいたからだ。

ちやうど傍を通りかかったお手伝いの女性が立ち止まる。靴を見下ろして硬直したように立ち尽くす陽葉を見遣って、首を傾げた。

「どうかしましたか。笠倉様」

「靴」と、短く陽葉は言う。無愛想に一言だけ告げたのではなく、かろつじてそれだけをなんとか口に出来たといった風だった。

しかし、靴、と言言われただけで通りかかっただけの彼女に理解できるはずもない。ただ、この家の使用人である彼女としては何か客人に粗相があつたのではないかと、不思議そうに傾げていた表情を幾分か険しくして、陽葉と同じように玄関へ視線を落とした。しばらくしてから険しくしかめていた眉を困惑気に寄せて陽葉の横顔に目をやる。「靴が、どうかしましたか？」

彼女にとっては何も驚くことのない、普通の光景なのだろう。

陽葉にとっては違う。それが何よりもはつきりとした違いだった。

「芳川さんの靴だ。これ」

「そうですけど、」困惑をますます深めて、彼女は頷く。他に誰がこの靴を履いてくるんだ、と言いたげで、でも言わないことをお手伝いさんの誇りにしているような、微妙な距離が開いた言い方だった。彼女の様子は分かりやすい。ようするにこのお手伝いさんの記憶の中では、芳川は陽葉とともに玄関を上がって別室に通された事

になっているのだろう。

「芳川さんはどこにいるんですか？」思い込みとは違う彼女との記憶の差異を陽葉は気にせずが一番大事な事を訊ねた。

「いつもの部屋にお通ししていますけど」

言われてから、そういえば、と清夷に芳川の事を問われなかったのを思い出した。

笠倉は人を喰らう在蝕の傘を持つ。それが決まったルールの上で使われる力であるといっても、ルールを決めているのはあくまでも東條と政府で、歴代の笠倉の傘の使い手の中には結局彼らの合理的な考えの下でしか力を使えない事に腹を立てる者達もいた。傘は人の命を繋ぐ道具でもあるが、無論違った側面もある。人を殺す凶器としても十分に通用する。

だから笠倉が東條に会う時、傘は芳川が受け取り別室で待つのが決まりとなっていた。

「芳川様から新聞を貸してくれと頼まれまして」と彼女は脇に抱えていた新聞紙の束を陽葉に手渡した。一昨日の日付だった。

受け取って、芳川がいつも通される別室へ向かった。

陽葉が先程通された部屋とは反対の方角にあるこじんまりとした五畳ほどの部屋は、念の為、傘と使い手をこの屋敷の中では遠ざけていたいという東條の本音である。清夷もさすがに芳川が来ていなければ不審に思っただろう。それがなかったという事は陽葉を出迎えたお手伝いさんが清夷を呼びに行く前に、芳川が陽葉と一緒にここに来た状態になっていた、という事だ。芳川がここにいる、そうなっているなら、恐らくは芳川が轢かれたあの事故そのものがなかった事になっているのだろう。

新聞はその事実を確かめる為のものだ。事故がどんな風に変化したのか、記憶している事と書かれている事がどう違うのか比べる為の。

障子で閉ざされたその部屋の前に来ると、ひとつ息を落として障子を開けた。

芳川は部屋の中央に敷かれた座布団に胡坐をかいて、障子を開けた陽葉を見る。近づこうとした矢先、手をあげて制してきた。「ちよっと待て、陽葉」

言われたまま陽葉は立ち止まったが、こちらを見つめてくる芳川の目を見て、「違いますよ」と、まず口にした。芳川の目が人の嘘を見極めようとするようなものだったので、否定からゆっくりと首を振る。敷居を跨いで障子を閉めた。「俺は何もしてません。芳川さんが気にしているようなことは何も、誰も殺しちゃいませんよ」きっと芳川が心配しているのはこの事だ、と思いながら彼を見る。思った通り、険しげな芳川の表情がすこしだけゆるんだような気がした。

「俺もそうだとは思っていた」と、言う芳川は少しだけ言い訳ばかった。胡坐をかけた右の膝頭を軽く陽葉へと向けていた掌で叩く。

「でも、いきなりここにいてっていうのは訳が分からなくてな。万が一、あの時俺が死んでいてお前が変なことをしかしていたとしたら、って心配になった」はにかむように唇を動かして言う。少しでも疑っていたのをどうにか隠そうとしているような物言이었다。「俺は死んだって思ったんだけどな」

「芳川さんは死んでいませんよ。あの後、病院に運ばれて手術を受けて、一命は取り留めました」

「それでも、ここにいないのは不自然だろう。あと、こいつもだ」言って、芳川は自分の傍らに置いていたものを掴んで陽葉に差し出した。陽葉は目を丸くする。

すべてが均等に黒く塗り潰されているその傘は、足立青年が持ち去ったあの傘に違いなかった。

芳川と、彼が持つ傘。ふたつを交互にして、「どういう事ですか？」つい本音が口をついて出る。

「俺が知りたい」大人ぶることもせず正直に応えてから芳川は傘を自分と陽葉の間に置いた。まるで動かぬ証拠を突きつける刑事と突きつけられた犯人みたいだったが、芳川の口調はさっきの危惧を秘

めていた時よりは明るかった。「お前を突き飛ばして車に轢かれて、ああ俺は死んだな、」と思っただけここにいた。通りかかったお手伝いの人に聞けばもう三日も過ぎてるって話じゃないか。俺は救急車で運ばれて手術を受けて、集中治療室にでもいたんだろうな。さっばり分らないが」

その芳川の事故に関して言えば、結論はひとつしかなかった。「事故がなくなっただけでしょうね」確認するように言うと、芳川はため息混じりに頭を打つ。

「まあ、それ以外考えられないよな」

芳川の目が脇に抱えた新聞に向けられているのに気づいて、陽葉は「お手伝いさんが渡してくれて」と手渡す。

受け取ると、芳川は新聞を畳の上に広げ出した。社会面やスポーツ面をばさばさと早足でめくって地方面で止まる。ずつと立っているのも疲れるので障子の前に陽葉が腰を下ろすと、「ああ、こいつだな。きつと」芳川が新聞を真ん中で二つ折りにしてよこしてきた。カラーはひとつもないモノクロだけの地方面の下の隅にあってもなくても問題なさそうな狭いスペースで事故の記事が載っていた。

「あつてるのは、時間と大まかな場所だけですな」

細かく言えば場所も間違っている。交差点の先ではなく、交差点が事故現場になっていた。

交差点の横断歩道を青信号で渡ろうとしていた近くに住む女子高生Aさんをはねかけた対向車線の乗用車は、寸前でAさんがいるのに気づいて急ブレーキと急ハンドルでタイヤをスピンさせて回転、Aさんにはぶつからなかったが横断歩道のそばに銀行の正面自動ドアに衝突。乗用車を運転していた会社員が頭を強く打って搬送先の病院で死亡した。

おそらくは乗用車に乗っていた会社員が死亡していなければ記事にもならなかったような事故だろう。赤信号で突っ込んできた会社員に全面的に過失がある事故だと、三十行にも満たない記事を一回読むだけで理解できた。

「きっと、この子は一度喰われたんでしょうね」芳川が車に轢かれる前、道路の先で事故が起こっていた事と興奮しきりの男が人が轢かれたと叫んでいたのを陽葉は思い出していた。そうだ、あの興奮しすぎて雨が降っているのも忘れていたような男は確かに、人が轢かれた、と言っていた。なのにこの記事は人が轢かれた事までは書かれていない。「彼女が消えれば、交差点の事故はなくなる。もしかしたら」

直感めいたものが脳裏をよぎった。

もしかしたら、最初に車に轢かれた人間こそあの足立青年だったのかもしれない。

可能性はあった。あの事故に傘が在蝕が関わっているのではないか、とは芳川が事故にあう前から話していた事だ。

最初はごくごくマツチを擦る時の火花程度の明るさしかない閃きだった、考えていくうちにちゃんとした根拠のある論理のように見えてきた。足立が傘を盗んで店を出たのだとしたら、店の横に伸びている車道の先を歩いていても不自然ではないし、傘を持っていた彼が最初の被害者なら事故が違う場所で二度起こったのにも説明がつく。そして、傘の正体を知っていた理由も。

芳川の事故の事には触れず傘だけを追いかけてきたつもりだったけど、最初の事故でふたつは繋がっていたということか。

唐突に黙り込んだ陽葉に怪訝そうな目を芳川が向けると、陽葉は三日間の出来事をかいつまんで話した。

店に因縁をつけたところまでいくと、「そいつは酷いクレーマーだな」とおかしげに芳川は笑い、最後まで話し終わった後で、「確かに理屈としてはあってるな」と陽葉の意見に同意して頷いた。「こいつは、まあ時代遅れと言えば時代遅れだが、見てくれはそれだけの傘だ。見慣れないだろうが、見ただけでこいつが人を喰らう傘だとは誰も気づかないし思わないよな。あの日はちょうど雨が降っていたし、たまたま広がっていたところに車がぶつかってきて轢かれた、か」

自分が轢かれた瞬間の、痛みや衝撃を思い出しているのか芳川は眉間にしわを寄せる。轢かれた、という言葉が消え入りそうにか細くなった。「何を思ったかは想像がつかない」

突っ込んでくる車、青信号で横断歩道にいる女子高生。轢かれるのは当然、その女子高生のはずだった。

けれど車は彼女に気づいてブレーキをかけ、自分に突っ込んでくる。まるで身代わりのような不幸、偶然とはいえ遣る瀬無い結末。恨むな、というほうが間違っているだろう。

「轢かれたのは女子高生のせいだと思っても不自然じゃないでしょう？」

「怒りが引き金になって傘が女子高生を喰らったわけか」視線を落として、傘を見る。「使いこなせるこなせない以前の問題だったってわけだ」十分すぎるほどの怒りがそこにはあったのだろう。なにせ自分が死んでしまうのだから、それこそ死ぬほど呪ってもおかしくはない。事故にあう直前に傘と事故の関連性を否定していた芳川は苦笑いするしかないと言いたげに笑みを浮かべた。「世の中何が起こるかなんて、分からないもんだな」

「無意識に傘を使う条件が重なるなんて」

「でも、だから車は横断歩道を突っ切った。遮っていたものがなくなったら当然、急ブレーキをかける事もなくなるからな。で、俺がはねられた」

「俺を庇って」

「感謝してほしいわけじゃないから安心しろ」卑屈ともとれる陽葉の発言に芳川はからりとした口調で応じた。考え込むようなしばらくの間の後で、「女子高生が傘を食われて車が直進して、自分は事故に巻き込まれなくなったその足立青年はおそらく、何度も試したんだろうな。轢かれたのにその事がなかったことになっているのがどうしてなのか考えて、傘にたどり着いたわけだ。でも正規のやり方までは分からなかった。だから、失敗した。でなかったら、お前、今頃誰からも忘れられてたぞ」顔を傘に向けたまま目だけを上

向けて陽葉を見た。

「詰めが甘かったのは認めます」芳川の眼差しが、そういう不手際を揶揄しているのではない、と理解しながら陽葉は冗談めかして言うほうを選んだ。「まさか、たった数日で傘を使えるようになっていたとは思ってなかったのだから」その点は事故に合う前の芳川と同じだった。啞然とするほどに偶然が、ここまで重なっているとは思ってもいなかったのだ。

「でもそこでお前を喰らおうとしたって事は、傘の本質は理解していないって事になるが」芳川は腕を組む。

「何も知らない一般人にいきなりそこまで察しろ、というのは無理がありますよ」

きつと足立青年は傘の事を、人を消せる道具ぐらいに思っていたのだろう。

人を消す事が出来るというのが、実際にはどういう事なのかきちんと把握していなかったに違いない。と、陽葉が思うのは自分に傘を向けた時の足立青年を思い浮かべたからだ。憎い相手を思わず殺してしまうような衝動的なものはなく、陽葉を消そうとした時の足立青年は理路整然と自分のしなければならぬ事をしようとするような、義務感や使命感で動いている風に見えた。そして人を消すという真の意味を理解してなお、あんな風な態度を取れるような人間だとは、あまり思えなかった。

「どっちにしても」と、芳川は言う。この話を切り上げる気ではない。「傘は手元に帰ってきた。その、足立が何をこいつに食べさせたとしても、食べさせたものを元に戻す方法なんて結局はひとつしかないんだ。勝手にそれを行使できない以上、もうこの一件は終わりだな」

「どうして傘は戻ってきたんでしょうね」だから最後のつもりで陽葉は口を開いた。終わらせる気満々だった芳川は少しだけ不機嫌そうに顔をしかめたが、「足立青年の人生が変わったか、もしくは足立自身がこの世界から消えたか。どちらかだろう。……なんだ、

気になるのか？」と、陽葉の様子を窺う。

気になると聞かれれば、気にならないはずがなかった。「そりゃあ」と頷いてから、陽葉は傘を見下ろす。

見つめる傘に、変わった様子はない。

自分の手元から離れている間にどれだけの人を喰らったのか、外見から想像するのは難しかった。それでも現実には、目に見える変化が起こっている以上は誰かが犠牲になっているのだ。気にならない、と嘯く気にはなれなかった。

「俺を消そうとしたのは、傘を渡したくなかったからでしょう？」

彼は何を消したくて、傘に固執したんでしょうか」

「お前を消そうとした時にはもう、傘で出来るのが完全犯罪だって気づいていたのかもしれないだろ」話を切り上げたい様子の芳川は面倒くさげに言う。「その本質には気づいてなくなつて、使い勝手ぐらひは理解していたのかもしれない。いつか誰かを消せると思つて手元に置いておきたかつた、理由なんてたかが知れてるもんだ」と、芳川は最後に取り合わない風に首を横に振った。素っ気無いようにも見える所作だつたが、内心は深く考え込みすぎる自分を氣遣つて軽率に振舞っているのだと、陽葉にも分かる。

けれど芳川の優しさに応えて、傘も戻ってきたことだし、と氣樂に頭を切り替えようとする前に別の部分で意識を深刻な方向へ傾ける何かがあつた。もしかすれば深刻だと思つているのは陽葉の感傷というもので、ただの感傷みたいなものだつたかもしれないが、「もし何かを消したかつたんだとしたら、それを消してどうなつたんでしょうね」と呟いた自分の声を聞いてみてからしばらくして、陽葉はため息をついた。

お願いです。消えてください。と、足立青年は言っていた。

芳川の言うように、無闇に何の目的もなく陽葉を消そうとしたのではない。と、その言葉を思い出して考える。

「俺がここにいてるって事は」と、芳川は無駄話に付き合うように口を出す。面倒くさそうな表情をしていたが、言う言葉自体はきちん

と考えての発言のようだった。「そして傘がここにあるって事は、そいつが自分を消してなければ何かが変わったって事だろう？ 望みのものを消してこうなったのかは分からないが、そんなに気になるなら探してみたらいいじゃないか。誰かを消して手に入れようとした人生ってやつを、この世界にいればその足立青年は手に入れているはずなんだろう？」

「俺の前の人生を返してくれ、って言われたらどうしよう」ふとそんな事を思った。実際にそんな夢を、陽葉はたまに見る事がある。

たとえば、上村正紀に殺されて庭先に埋められた夫妻は、息子に殺されるのとトラックにはねられるのとどっちが嫌だっただろう。死ぬ事には変わりない二者択一の中で、絶対に後者のほうを選ぶに決まっていると言い切れるだろうか。「前の貴方達の人生は酷いものだっただから息子さんの一生をなかつた事にしました。貴方達には新しい人生が用意されています」と言って、一日違いでトラックに轢かれてぺしゃんこになって死ぬ。死の上塗りのような行為をしたと後になって気づくと、大抵、嫌な気分になった。

傘で人を喰らった事で人生の影響を受けた人間の大半は、その事実に気づかないように出来ている。芳川のように、交通事故にあつて意識をなくしてから三日間をすっ飛ばしてこの畳の部屋に唐突に放り出される、なんて事は滅多にない。ほとんどの人間が新しく用意された環境に生きる。その事に疑問さえ持たない。

傘とは、傘の元になっっている在蝕とは、そういうものだ。

人を喰らい、喰らった人間に関する他者の記憶や痕跡すべてを消して、まさしく再構築と呼べるレベルでその人間に関わった者達の人生を変化させる。もしも喰らわれた者が事故を起こしていたら、その事故はなかつたことになるし、殺しても同じだ。そうして殺された人間は、殺されなかつた人生の続きを生きる。何事もなかつたように。それをただ一回きりの人生だと思つて。

だから罵られた事は一度もないし、胸倉を掴まれた事もないが、

たまに思う。

「笠倉なんて結局は、東條と政府の思う通りに人を消してるだけに過ぎないじゃないですか」

「人の命が救えるのは本当だ」

「でも、その命を救うのに人一人の一生を消しゴムで消してる」

在蝕を見ることが出来る者、傘を見ることが出来る者、数少ない人間達で決定して命を奪う。たとえその事で理不尽に命を奪われた誰かを救う事が出来たのだとしても、「それは勝手な事なんじゃないんですか」

芳川は露骨に嘆息した。いつもの、「だからお前は笠倉に向いていないんだ」と愚痴のような小言をこぼす時のため息だった。けれど今回はすぐさまその独り言が口をついて出るでもなく、芳川は出したため息を周囲から払いのけるように首を振って、言った

「だからこそお前は、笠倉の跡を継がなきゃいけないんだろ？」

一度だけのつもりで手を、

山の天候は変わりやすい。ついさっきまで雨が降っていたのか地面がぬかるんでいて、何度も足をとられそうになる。その度にこけかけて、近くの木の枝を掴んだ。ちよつとしたサバイバルのような気分だった。

ようやく太陽が昇るか昇らないかの時間だったけれど、空を覆いつくす雲のせいで全然明るくはならない。

僕がこれからやろうとしていることを考えると、そのほうがいいのかもれないけれど。

もつとつくに枯れて花の落ちてしまったつつじの垣根の隙間を抜けて、山道をそれた。隙間に結んでいた茶色の布の切れ端みたいなものを解いておく。

地元でつつじが有名な登山路であるのは知っていたけど、実際に上ったのは初めてだった。いつもの僕ならバイトで身体を酷使しているから山道程度で簡単に息が切れるはずもないと思っていたのだけど、僕の身体はもう限界だと喘いでいる。手紙に書いてあったとおり、この一年間、僕は中華料理屋で働いていたわけでもなく、一昨年と同じようにただ黙々と勉強をして家と学校とを往復していたらしい、と想像していたよりも貧相になっている自分の身体を思っため息が出た。

途中まではしっかり担いでいたシャベルも今は地面に擦れながら、小さな溝を数十メートルにも渡って作っている。

シャベルの先が石ころに当たって小さく跳ね返る、音に僕は汗だくの顔で振り返って、まるで蛇が移動した跡のような溝に気づいた。ため息をついてシャベルをまた肩に担ぎなおす。普段なら全然重たくもないはずのそれに体が振り回されたみたい、に、よろめいた。体がぐらりと傾ぐ。

つつじの垣根に背中がぶつかって、何本か枝が折れるような嫌な

感じが背中に伝わってきた。すぐに身体を起こそうと奮闘してみられ、足ががくがくと震えただけだった。「もう駄目だ。動けない」と、訴えている。

後どのぐらい歩けばいいのか分からなかった。車が乗り入れられる麓の広場から登山路を外れて十分ぐらい歩いたところ、と曖昧に手紙には書いてあって、代わりに広場に置かれている登山路の地図と手書きの地図が別の紙で用意されていて、分かれ道にはあの茶色の布切れが縛ってあった。後々、人に迷惑をかけないように思ったのだろう。手紙のほうは燃やしてしまったけれど、地図は上着のポケットの中に押し込んできた。泥と汗で汚れている手で地図を広げる。

「僕が父を殺しました」と、家で灰にしてきた手紙には書いてあった。

読んだ時、途端に部屋の床に座り込んだ。「なんてこった」と、思わず呟いてしまう。告白の後にはどうしてそんな事になったのか、そうしなければいけなかったのか、事細かに綴られていた。その告白の中には一言も「信じてほしい」とか「理解してほしい」という言葉はなかったけれど、一途にその気持ちがあるのは確かだと感じられた。

こうなるしかなかった事を、どうか、この手紙を読んでいる誰かには分かってほしい。

はじまりは、一年前。ちょうど、父が家を出た日と同じ日だったらしい。

父が突然、暴力を振るいだした。まるで人が変わってしまったみたいだった。と、書かれていた。

もともと母の束縛や依存に少し気が滅入っていたらしい父は、その日を境に爆発したのだ。美空さんという愛人のもとへ走らずに、大爆発を起こした。父は夫であることも父親であることもやめて、ひとつの小さな集団の中で暴君になろうとして、そうなった。味噌汁が塩辛いといえは椀ごと投げつけて、部屋の掃除が行き届いてな

いと思えば壁を殴りつける。母はどんどん傷だらけになってしまいは、外に出れないような顔になった。病院に行ったら一発でばれる、だから病院に行くのも禁止して寝室に閉じ込めた。夜の、自分のいる間だけ部屋から出して、朝と昼間は部屋の中に閉じ込める。窓は内側から板を張って出てないようにして。

想像するだけでもむごたらしそうな現状を、手紙は淡々とこまごまと書いていた。ひとつでも書き逃したら全部を理解してもらえないとばかり、まるで言葉で写生するような感じだった。

「家庭内暴力は歪んだ愛情だと、誰かが言ってたような気がするけど」と、文面は続く。「父が母にしていたのは、そういうものではなくて、たとえば犬が好きでもないのに犬を飼うことになった時に出来るだけ面倒事を減らそうとするような、そんな努力のようなものだと思います。愛してないから褒めないけど、悪いことをすれば愛していない分だけ殴るし蹴る。」

僕は逃げた。と、手紙の中で懺悔していた。「父は僕にまで酷いことをしようとはしなかった。だから僕は眼を閉じて耳をふさいだ。なかった事にしたかった」

それでも辛くて家から逃げ出そうとしていた。でも、それがばれたら自分まで父に酷い事をされるのではないか、部屋に監禁されるんじゃないかと思って何も出来ないでいた。

そうこうしているうちに、とうとう母が死んだ。

自殺だった。あの台所の血溜まりは母が包丁で首の頸動脈を切断して出来たのだと、手紙には書かれている。父が帰ってきて犬がケージから出されるみたいに寝室から出て、父がちよっと目を離れた数秒の間の出来事だったらしい。女の力で頸動脈を切るのは難しいなんて嘘で、母は血を撒き散らしてあつという間に血だらけになった床に倒れこんで、息絶えた。失血死だ。

僕がその一昨日から今日まで学校を休んだのは、母がいつにもなく不安定だと思ったかららしい。自殺するかもしれない、と察していたのだと手紙には書かれている。

それでも母は自殺した。助けられなかった。

「本当は、母が死んでほつとしているのは僕なのかもしれない。あの人を最後まで一回も助けてあげられなかった僕は、母さんの自殺を見逃してしまう、って事でようやくあの人を助けてあげられたのかもしれない。卑怯なぐらいに、僕は安心していいのかもしいない」

ゆっくりとまた歩き出した。今度はシャベルを肩に担いでいく。

僕は、ある意味で、母が自殺したと手紙に書かれていたときは驚いた。父に見捨てられた時も母は死のうとなんてしなかったから、この人は何があっても死ねない人なのだと馬鹿にしていたのだ。どうやら違っていたらしい、と、今更ながらに僕は母への評価を変えるしかなかった。

母は多分、父を繋ぎとめておきたかったのだろう。

愛していたから。愛されていたかったから。だから、父が美空さんのところへ走った時、母は父と離婚しなかった。どう考えてももう二度と戻らないだろう絆の修復という、ありえないことを望んで耐えることにした。だから父が美空さんと結婚するから離婚する、と言い出したとき、母はとうとう美空さんを刺し殺すしか方法がなくなつたのだ。自分達から絆を横取りした女を殺せば、父が戻ってくると心のどこかで願っていた。

愚かな人だった。かわいそうな人だった。

父が暴君になつてしまつた後は、もう死ぬ事でしか父から逃げ出せなくなるぐらい、父との絆を大事にしていた人だった。

「父さんと一緒に母さんを担いで山に登りました」手紙の一行を思い出した。見下ろしたぬかるんだ獣道に、二人の足跡はなかった。雨が全部なかったことにしたのは分からないけど、あるのは自分の足跡と蛇の通った跡のようなシャベルを引きずった跡だけだ。「母さんは自殺したけど、遺体はどうやったって人に見せるものじゃなかった。だから、埋めようという話になりました」

しばらくして獣道の先にある木の枝に茶色のくすんだ色をしたシ

ヤツが結ばれているのに気づいた。まるで衝動的に首を吊ろうとして諦めた後みたいなの、見つけてしまった後で後悔するような、そんなニュアンスでシャツが円の形をして木の枝に括られている。雨に濡れて水を滴らせているそのシャツを枝からはずすと、右の袖が力任せに引きちぎられているのが分かった。

そうしてから僕は、木の下にある不自然に土を掘り起こした跡を見下ろした。そこだけ雑草がないからよく目立つ。

シャベルを持って土を掘り返しはじめ、一度掘った土は水を含んでいても軽くて力を入れなくてもシャベルの先が簡単に地面に刺さる。

「大人がひとり埋められるぐらいの穴ができて父が穴を掘るのをやめようとしなかった時に、僕は気づいてしまいました。黙々と穴を掘る父の後姿は、人を埋めてしまうという心細さよりもっと別の覚悟みたいなものがあつたからかもしれません。思えば、父はいつもそうでした。人生がかかっているような大事な場面の時に限って致命的にいつも選択肢を間違える人だった。母さんの事が気に食わないのなら離婚すればよかったのに、夫婦でいつづけることを選んで母を自殺に追い込んでしまった事だって、致命的な事に違いなかったのですから」

母が美空さんを刺し殺してしまった事もそうだ。父が美空さんを連れてこなければあんな事にはならなかった。

どのぐらい穴を掘り返していただろう。膝の辺りまで地面を掘り進めた時だった、順調に土に刺さっていたシャベルの先が半分も入らないところで何かにぶつかった。石ころのように音がしたわけではなく、土じゃない何かにぶつかった感触が伝わってくる。

父さんだろうか。母さんだろうか。

手紙に書かれていたことが本当か、その事を確かめに来ていたはずなのに、そんな事を思った。

「ふたり分の穴を掘り終えたとき、父さんは手を動かすのをやめました。父はきつとなんだかんだで僕を殺すことに躊躇いを持って

いたのだと思います、だからずっと穴を掘っている最中は背中を向けていた。自分が埋められる穴を掘っている息子にどんな顔をしているのか分からなかったから。でも、父がずっと背を向けてくれているおかげで僕は、簡単に父を刺す事が出来ました」

シャベルを柔らかい地面の部分に突き刺してしゃがみこんだ。両手で土を掘っていく。次に土をすくったら今度は誰かの顔を見るんじゃないかと、鳴り響いている心臓の音が季節外れの蝉のようにやかましく僕の体の中で鳴っている。手があつという間に泥だらけになって爪の間まで黒く汚れた頃に、僕の手が土に埋もれていたなにか細いものに触った。黒い湿った土のところどころから、青褪めた汚れた肌色が見えた。

その部分の土を丁寧に払うと、それは指だった。十本の指を組み合わせている。

即座に思い出したのは、サスペンスものとかでよく見かける棺桶の中に入っている人間の手だった。けれどこの手は演技のために土まみれになっているわけじゃないから起き上がることはないし、撮影用のマネキンでもない。

父さんの手だった。母さんの手には虐待で火傷の跡があると手紙に書いてあったから、父の手に違いなかった。

僕の足元に、父が埋まっている。

「僕が父を殺しました」

と、声に出して呟いた。

顔を見る気にはなれなかったので穴の外へ出る。

ここに手紙通り、間違いなく死体が埋まっていて、目印になっているシャツを回収した。だから後は、また死体を埋めるだけだった。シャベルを持って土を掬い、穴の中に落とす。ほんの少しだけ見えていた指がまた土の下に隠れる。掬っては落として、落としては掬う。単調な作業をやっているうちに、家のあの台所のことを思い出した。伊崎は今日の夕方にも来るかもしれない、来たら玄関でだけ話すなんてことは出来ないだろうし、したら怪しまれるだろう。

あの血だらけの台所をどうにかしなくてはいけない、時間が必要だった。

「燃やすしか、ないか」

言葉にしてから、それが一番名案だと思った。台所が火元だったらなんとでも言い訳が出来るだろうし、ずっと騙し通せなくてもいい。

あの、傘の、前の持ち主を探せるだけの時間があればよかった。

「笠倉」なんてまあ珍しい苗字だし、わざわざ遠くから全国展開しているあの店に来るわけもないので、この近くの人間だって事ぐらいいは想像がつく。見つけて傘のことを聞き出すまでの、時間があればいいのだ。

けど、一度消しかけたのに話を聞いてくれるだろうか。傘はいきなりなくなってしまったから、どうなるんだろうか。心配といえばそこが心配だったけれど、他にいい案がなにも思い浮かばなかった。人殺しの息子にならなくて美空さんの遺体を消したら今度は、人殺しそのものになってしまふなんて、今度は父と母の遺体を消すぐらいしか思いつかない。手紙の内容を全部警察に話して自首したら執行猶予ぐらいはつくだろうけど、人殺しには違いなかった。

あんな家が密集してる場所で火事を起こしたら誰かが死んでしまいかもしれないけれど、それも傘があればどうにかできるだろう。

この場に来て僕は一番、あの傘をほしいと思っていた。

駄目だったらどうしよう、とはすこしも考えないようにしている。埋めなおすと、穴はやってきた時と同じような感じに戻った。雑草がぼつかりと抜けた黒い土が小さく山みたいになっていて、木を墓標にした小さなお墓のようだった。

「そうか」木を見上げてシャベルを地面に突き立てる。「傘に喰ってもらったら、お参りなんて意味がないんだもんね」全部がうまく行った後の、両親の遺骨のない墓に手を合わせる姿を想像して、一回ぐらいいはちゃんと両親に手を合わせておこうと、僕は小山に向かって手を合わせた。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015m/>

在りを蝕む

2010年10月8日14時27分発行